

西澗子曇の渡来とその功績

蒙古襲来を挟んで二度の来日を果たした中国禅僧の数奇な生涯

佐藤秀孝

はじめに

鎌倉時代の後期に蒙古民族の建てた元朝は、二度にわたり日本に大艦隊を送っており、世に元寇あるいは蒙古襲来と称されている。そんな日中間が激動の中にあつたとき、前後二度にわたつて日本に渡来した中国禅僧が存している。名を西澗子曇（西圃とも、大通禅師、一二四九—一三〇六）といい、臨

済宗楊岐派の虎丘派の流れでも松源派に属し、日本の南浦紹明（円通大応国師、一一三五—一三〇八）とは法の従兄弟に当たる禅者である。子曇が最初に日本渡来を果たした際は若き一介の宋僧としての立場であり、二度目に日本渡来を果たしたのは元使に随行した元僧としての立場であつた。

子曇が最初に日本の土を踏んだのは二三歳のときであり、いまだ一介の雲水にすぎなかつたが、師の石帆惟衍（？—一二七二？）の使者として法語を第八代執権の北条時宗（法光寺殿道果、一二五一—一二八四）に届けるべく来日している。

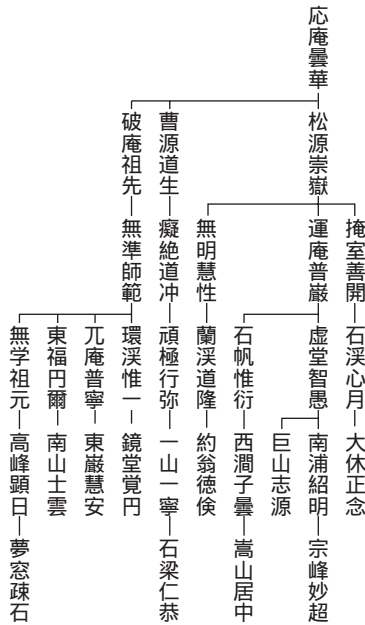
子曇は滅亡直前の南宋の地から到つた宋僧として、その後、八年あまりの歳月を鎌倉など日本国内で過ごしている。そして、この間に第一回の元寇すなわち文永の役が勃発しており、南宋の滅亡を知つて帰国の途に着いている。

子曇が帰国してまもなく第二次の元寇すなわち弘安の役がなされており、再び子曇が日本の土を踏むことはないかのごとくであつた。ところが、その後、日本との講和を願う元の使者に付随して子曇は再び日本に向かうことになる。元の使者に抜擢されたのは曹源派の一山一寧（妙慈弘濟大師、一山国師、一二四七—一三二七）であり、子曇は一寧と行動をとともにするかたちで二度目の来日を果たし、第九代執権の北条貞時（最勝園寺殿崇演、一二七一—一三三一）の帰依を得ている。

鎌倉中期から南北朝期にかけて三〇名ほどの中国禅僧が日本に渡来しているが、二度の来日を果たした人となるときわめて珍しい。しかも子曇の場合、自ら積極的な意志によつて日本に渡航したというより、諸般の事情からやむなく日本に

赴くことになったのであり、自ら望んで日本を目指したとは言いがたい面が強い。ただ、彼は最初に来日して以来、日本に対してかなり好意的であったものらしく、最期を鎌倉の地で終えている。

いま、子曇をめぐる臨済宗虎丘派の禅僧たちの主な系譜を示すなら、



といった具合になろう。子曇の存在は同じ渡来僧である一山一寧の華々しい活動の陰に隠れ、あまり評価されていない面は否めないが、きわめて興味深い消息をいくつか残していることから、改めて子曇の果たした功績について一考をなして見ることにしたい。

雲外雲岫の撰した「大通禅師行実」

西澗子曇に関する伝記史料として最も基本となるのは、曹洞宗宏智派の雲外雲岫（方巖、妙悟禅師、一一四二—一三三四）が明州（浙江省）慶元路鄞県東六〇里の天童山景德禅寺の住持として撰述した「大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代勅謚大通禅師行実」（以下、単に「大通禅師行実」と略称）であり、『続群書類従』第九輯上（巻二八）に収められて一般に知られている。しかしながら、『続群書類従』に所収される「大通禅師行実」は残念ながら後半が欠落しており、子曇が最初の来日を終えて帰国して以降の消息を窺うことができない断簡本（欠本）であって、これまで子曇の生涯を通じた詳しい消息は辿れなかったのが実情である。

ところが、幸いにも国立公文書館の内閣文庫に所蔵される『禅林僧伝』巻七³⁾、および石川県金沢市の曹洞宗の名刹である金龍山天徳院に所蔵される『禅林諸祖伝』巻七²⁾には、それぞれほぼ完璧な状態で雲岫の撰した「大通禅師行実」が筆写されていることから、これまで不明であった部分の内容を知ることが可能である。

そこで最初に『禅林諸祖伝』に載る「大通禅師行実」の全文を返り点などを付さず原文のまま紹介し、若干の字句の異同が見られる『禅林僧伝』との対校を示しておきたい。

大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代勅
謚大通禅師行実。

禅師、諱子曇、号西澗。趙宋一十四葉理宗淳祐九年己酉生也。
浙東道台州路仙居人。俗姓黃氏。雜染於本郡紫羅山広度禅寺。
師長七尺、儀容俊偉、目光射人。飲厭叢社、駐錫平江承天、石
樓明公命掌內記。時年十七歲、度宗咸淳改元乙丑也。是年秋八
月、石帆衍和尚赴詔、自吳之承天移淨慈。師徑往入室參問、資
緣契會、頓止奔馳、侍香山中。六年庚午春二月、石帆有旨領天
童。師隨侍行也。七年辛未、有本朝副元帥平公時宗鈞命。石帆
和尚以法語一段勉其行。航海而來、即文永八年也。師年二十有
三。觀光上邦、及入東府、建長蘭溪、東福聖一、各關敵軒、下
榻相待。宋第十六代少帝德祐二年丙子春二月、北元革宋。師歷
於八白、弘安元年戊寅、再回三朝。世祖老皇帝至元十五年也。
至天童、環溪一公、命師俾職教年三十一也。二十三年丙戌、
出世台之受經紫岩、燒香証石帆之乳。師年三十有八也。居四載、
私衣入古杭。二十六年己丑、徑山雲峯高公、延師板首。解職遊
嶽。二十七年丙寅、董潭之天柱。經数祀、抵回廬阜。三十一年
甲午、円通玉崖振公、請師居第一座。開先一山万公、時々往還、
激揚祖風焉。此歲春正月、断江首座。月江蔵主、起雲隱入廬山、
巡礼山中諸祖靈塔、過夏円通。師与諸公漫遊諸刹、各有唱和也。
成宗大德改元丁酉、平江万寿南洲珍公、致靈柎接雲門之礼焉。
本朝正安元年己亥、副元帥平公貞時、遣使聘師、待以師礼。不

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

獲已、兩次逾溥。蓋与曇年相阻二十有九年。師年五十一。其年
秋八月着岸。冬十月十九日、住円覺。遵規版來、衲子勇鷲、平師
問禅、待遇倍前。建治上皇、聽師道誓、親降綸綽、咨問心要。
師說法語一段、上皇欽歎。居其寺四載、嘉元改元癸卯、移建
長。四年丙午冬十月、退居于正觀。二十八日凌晨、手書辭副帥
曰、子曇茲風火相逼、弗及面違。仏法正宗、全賴一刀主願。至囑。
又写偈曰、來無所從、去無所至、皎日麗天、清風匝地。抛筆便
化。世寿五十有八。葬于伝灯庵。勅謚大通禅師、塔号定明。
古帆未掛、鯨波万里、古帆已掛、鯨波万里。且道、不涉途程、
子版就父底句、作麼生道。大通西澗曇禅師來也。堆雲毫裏遠
他一位始得。遷他了也。安置了也。指牌云、扶桑国裡日頭紅、
太白山中添瑞氣。

日本国小師正初侍者、為大通西澗曇禅師入祖堂仏事。

皇元至治三年癸亥季春、天童住山雲外暮岫書。時年八十有二。
このように従來の史料では後半部分が欠落し、帰国して以
降の記事はもちろんのこと、再来日してより示寂するまでの
日本禅林における活動も詳細を知ることができなかつたわけ
であるが、『禅林僧伝』と『禅林諸祖伝』によつて何ら欠損
することなく、「大通禅師行実」の全文が知られるのである。
貴重な伝記史料であるので、つぎに両写本を通して、「大通禅
師行実」をより妥當なかたちで書き下して載せておくことに
したい。

大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代勅
謚大通禅師行実。

禅師、諱は子曇、西澗と号す。趙宋一十四葉理宗の淳祐九年己酉に生まる。浙東道台州路仙居の人なり。俗姓は黃氏。本郡の紫籜山広度禅寺に雑染す。師の長七尺、儀容は俊偉にして、目光、人を射る。叢社に厭厭し、平江の承天に駐錫するに、石樓明公、命じて内記を掌らしむ。時に年十七歳、度宗の咸淳改元乙丑なり。是の年の秋八月、石帆衍和尚、詔に赴いて、吳の承天より淨慈に移る。師、徑に往いて入室參問するに、資緣契会し、頓に奔馳を止め、山中に侍香す。六年庚午春二月、石帆、旨有りて天童を領す。師、随侍して行く。七年辛未、本朝副元帥平公時宗の鈞命有り。石帆和尚、法語一段を以て其の行くを勉ます。航海して来るは、即ち文永八年なり。師、年二十有三なり。上邦を觀光し、東府に入るに及んで、建長の蘭溪、東福の聖一、各おの敞軒を開き、榻を下りて相い待す。宋の第十六代少帝の徳祐二年丙子春二月、北元、宋を革む。師、八白を歴て、弘安元年戊寅、再び元朝に回る。世祖老皇帝の至元十五年なり。天童に至るに、環溪一公、師に命じて蔵教を職らしむ。年三十一なり。二十三年丙戌、台の受經紫岩に出世し、焼香して石帆の乳を証す。師、年三十有八なり。居すること四載、衣を払つて古杭に入る。二十六年己丑、径山の雲峯高公、延べて板首に飯す。職解けて獄に遊ぶ。二十七年丙寅、潭の天柱を董

す。数祀を経て、抵ちて廬阜に回る。三十一年甲午、円通の玉崖振公、師を請して第一座に居せしむ。開先の一山万公、時々往還し、祖風を激揚す。此の歳の春正月、断江首座・月江蔵主、靈隱を起ちて廬山に入り、山中の諸祖の靈塔を巡礼し、夏を円通に過ぐ。師、諸公と諸刹を漫遊し、各おの唱和有り。成宗の大徳改元丁酉、平江万寿の南洲珍公、靈樹の雲門を接するの礼を致す。本朝の正安元年己亥、副元帥平公貞時、使いを遣わして師を聘し、待するに師礼を以てす。己むを獲ず、兩次、漢を逾ゆ。蓋し曩年と相い阻つこと二十有九年なり。師、年五十一なり。其の年の秋八月、著岸す。冬十月十九日、円覚に住す。叢規嚴肅にして、衲子勇奮す。平帥、禅を問い、待遇は前に倍す。建治上皇、師の道普を聴き、親しく綸綽を降し、心要を咨問す。師、法語一段を献するに、上皇、欽んで歎く。其の寺に居ること四載、嘉元改元癸卯、建長に移る。四年丙午の冬十月、正観に退居す。二十八日の凌晨、手づから書して副帥に辞して曰く、「子曇、茲に、風火相い逼り、面連するに及ばず、仏法の正宗、全く一刀の主盟に頼る、至囑」と。又た偈を写して曰く、「來たるに従る所無く、去るに至る所無し、皎日は天に麗き、清風は地を匝る」と。筆を抛ちて便ち化す。世寿五十有八。伝燈庵に葬る。勅して大通禅師と謚し、塔を定明と号す。

古帆未だ掛けざるに、鯨波万里、古帆已に掛くるに、鯨波万

里。且く道え、途程に涉らず、子販りて父に就く底の句、作
麼生か道わん。大通西潤曇禪師来たれり、堆雲菴裏に他の一
位を遷して始めて得ん。他を遷したわれり、安置したわれり。
牌を指して云く、「扶桑國裡、日頭紅し、太白山中、瑞氣を
添う」と。

日本国の小師正初侍者、大通西潤曇禪師の入祖堂の仏事を為
す。

皇元至治三年癸亥季春、天童住山雲外雲岫、書す。時に年八十
有二。

この「大通禪師行実」を撰述した雲外雲岫は、曹洞宗宏智
派の直翁可拳（徳拳とも、静慧禪師、一一二一—？）に参じて
法を嗣いだ高弟であり、当時、明州（浙江省）鄞県東六〇里
の天童山景德禪寺に住持し、法統の遠祖に当たる南宋初期の
宏智正覚（隰州古仏、一〇九一—一一五七）の再来と称えられ
ている。しかも雲岫と同門に当たる法弟の東明慧日（白雲、
一二七二—一三四〇）が日本の延慶元年（一一三〇）かその翌
年に来日し、執権の北条貞時の帰依を得て鎌倉に曹洞宗旨を
挙揚している。

この「大通禪師行実」は雲岫が元の至治三年（一一三三）
三月に天童山で撰述したものであるが、おそらくその大概は
子曇の門人として入元した侍者の無極正初が天童山で亡き子
曇のために入祖堂の仏事をなした際、住持の雲岫に呈示した

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

元史料に依つたものである。子曇が日本の嘉元四年（元の
大徳一〇年、一一三〇）一〇月に示寂してより一八年後に撰せ
られており、おそらく前年の一〇月に天童山で十七回忌の法
要を経た後に、正初が雲岫に依頼したものである。しかも
実際に雲岫が自ら書した「大通禪師行実」を正初が日本に持
ち帰っているものと見られ、おそらくそれは子曇ゆかりの塔
頭などに収められたはずであろう。いずれにせよ、その詳細
については天童山における子曇の入祖堂を論ずる箇所ので改め
て触れることにしたい。

僧伝・燈史に載る子曇の記事

つぎに僧伝や禪宗燈史に記載された子曇の記事について一
通り紹介しておきたい。子曇の伝記をもっとも古く載せるの
は、聖一派の虎関師鍊（海蔵和尚、一二七八—一三四六）が編
纂した『元亨釈書』であり、巻八「淨禅三之三」の「釈子曇」
（宋子曇）の章には、

釈子曇。宋之台州人。徧游叢社、普參名宿。適於石帆衍公
処、止奔馳。文永之間、觀光上邦、慧峯之爾、福山之隆、
關散軒以待之。經數祀而帰。正安元年、与寧一山、同
舟重來。平副帥貞時、待以師礼、迎居円覺大伽藍。叢規嚴肅、
衲子勇奮。移重建長。徳治元年十一月二十八日滅。諡大通禪
師。

という子曇の記事が収められている。しかしながら、その記載内容はきわめて簡略であつて、曹源派の「山一寧」ともに再来日を果たしたこと以外には目立つた記事は見られず、子曇がなした上堂や問答などについても一切伝えていない。一寧に寄せる師練の思い入れがきわめて強いだけに、子曇に対する記載が表面的で微小なのは、かなり気に掛かるところでもある。

一方、江戸時代に著わされた禅宗燈史や僧伝としては、黄檗宗の高泉性激（曇華老人、大円広慧国師、一六三三—一六九五）が編した『東渡諸祖伝』巻上に「宋西潤曇禅师伝」が収められており、

禅师、名子曇、号西潤。俗姓黄氏。台州仙居人也。父某、母某氏。師生于淳祐己酉九年。幼聰敏、立志不羣、不染浮荣。誓求剪落、礼本郡紫籙山広度寺某老师、为弟子。进戒之後、瓢笠徧扣諸方。嘗於平江承天石楼明禅师室中、掌内記。齒少氣豪、身長七尺、目光射人、兼才思濳秀。每操觚染翰、靡不痛快醇至。叢林争伝、誦之。咸淳乙丑歲、石帆衍和尚赴詔住淨慈、道重一時。師腰包往謁、師資契会、頓息馳求、執侍。六年庚午、石帆被旨上天童、携師与俱。明年、本邦副元帥時宗平公、以礼聘東渡。石帆以法語一段勉其行。洎至觀光上国、当文永八年、時師方二十三歲。聖一・蘭谿二和尚、敬其德待之甚善。每与二和尚、均闡化

風。歷八年、歸寓天童。至元丙戌二十三年、出世台之紫岩、瓣香嗣石帆。一坐四白、弘衣入古杭。径山雲峰高和尚、延首衆說法。職滿杖錫遊嶽。領潭之天柱。數載入廬阜、三十一年、円通玉崖振公、招居第一座。嘗与山一・断江・月江諸老、往来酬唱。声震江湖。大徳丁酉歲、平江万寿南洲公、亦以靈樹接雲門之礼、以待師。正安元年、副元帥貞時平公、遣使聘請、復航海而來。平帥申弟子礼、迎居円覚大伽藍。当是時、海衆奔趨、驩声鼎沸。平帥每入室、詢禅要。建治上皇、聞其道普、特降旨問法。師奏对称旨、皇情大悦。嘉元元年、移建長。徳治冬十一月、退居于正観蘭若。二十八日凌晨、手書遺平帥曰、子曇、茲風火相逼、弗及面辞、仏法正宗、全頼鼎力主盟、至囑。復書頌曰、来無所従、去無所至、皎日麗天、清風布地。擲筆而化。実徳治元年十一月二十八日也。春秋五十八。弟子奉遺殮、窆於伝燈菴。四衆孺慕号哭之声、山林為之变色。敕諡号曰大通禅师、塔曰定明焉。得其法者、叅雲原・嵩山中等等也。

としてかなり詳しい内容が記されており、明らかに性激は「大通禅師行実」の記載を踏まえて子曇の事跡を述べている。ただ、同じ性激が編した『扶桑禅林僧宝伝』一〇巻や『続扶桑禅林僧宝伝』三巻には、なぜか子曇の章は収められておらず、この点は一抔の物足りなさを覚える。

ついで大応派（妙心寺派）の元元師蛮（独師、一六二六—

七一〇)が編した『延宝伝燈録』卷三には「相州建長西圃子曇禪師」の章が収められており、その伝記的な部分のみを示すならば、

相州建長西圃子曇禪師、宋国台州仙居郡人。姓黃氏。薙染於本郡広度寺。身長七尺、目光射人。十七遊方、謁石樓明子承天、掌箋翰。石帆衍住、淨慈、師腰、包參謁。一面機契、頗熄馳求。文永八年、東遊此方、年二十三。慧日聖一、福山蘭溪、弘牀相待。弘安戊寅、返元。依環溪於天童、典蔵論。瑞世台之紫岳、然香統石帆之法焰。董潭之天柱。弘衣漫遊、江湖名刹、拳以版首。正安元年、与一山寧公、同船重來。副元帥平貞時、執弟子礼、請住円覚、遷建長。後宇多上皇、親降綸綽、咨詢宗要。師獻法語一段、大協皇情。師六代祖師眞贊曰、(中略)德治元年十月、退居于正觀。二十八日凌晨、手書辞平帥、因召門人囑後事。復書遺偈曰、來無所來、去無所去、皓日麗天、清風巾地。擲筆而蛻。年五十八。諸徒奉遺殖、葬于福山伝燈菴。塔曰定明、勅諡大通禪師。となつており、記載はいくぶん簡略なものである。ところが、同じ師蛮が編した『本朝高僧伝』卷三「淨禪三之五」に収められた「相州建長寺沙門子曇伝」では、

釈子曇、号西圃。俗姓黃氏。宋之台州仙居郡人。自幼聰敏、志操踔絶。入本郡紫嶺山広度寺出家。身長七尺、目光射人。才思潘發、特善箋翰。十七遊方、在蘇州承天石樓明禪師會裏、

西圃子曇の渡來とその功績(佐藤)

典内記。咸淳乙丑、石帆衍和尚赴詔淨慈、道備丘時。曇腰包參謁、頓息馳求。復隨衍遷天童、執侍六載。常志東遊、遂以文永八年、觀光吾国、時年二十三。東福聖一、建長大覚下榻相待。而以年弱、不董一刹。弘安戊寅、卷衣拂元。依天童環溪和尚、主司蔵論。至元二十三年、出世台州紫巖、嗣香供石帆。一住四載、弘衣入杭。径山雲峯和尚、招歸首座。職解遊嶽。丙寅、丙寅恐庚寅之誤。董潭之天柱。經數議、回廬阜、円通玉崖振公、拳第一座。与一山万、斷江恩。月江印、往來酬唱、声流江湖。大德元年、謁南洲珍公子平江万寿、亦延居首座寮。正安元年、偕一山寧禪師重來、年五十有一。副元帥平貞時、欽執弟子礼、請住円覚、公務之暇、參尋宗乘。海衆屯聚、声光達宸。後宇多上皇、親降綸綽、諮詢禪要。曇獻法語一段、大極聖旨。嘉元元年、遷董建長、四更蔵序、繼白帛掲益多矣。曇贊初祖眞贊曰、(中略)德治元年冬十月、退居于正觀精舎。二十八日凌晨、手簡遺平帥曰、子曇、茲風火相逼、弗及面違、仏法正宗、全賴鼎力主盟、至囑。因召門人付後事。復書遺偈、擲筆而化。春秋五十有八。諸徒奉遺殖、葬于福山伝燈菴。塔曰定明、勅諡大通禪師。

と記されており、この記事は明らかに「大通禪師行実」を踏まえたかたちで著わされ、『延宝伝燈録』よりはかなり伝記的に詳細な内容となっている。ただし、『東渡諸祖伝』『延宝

伝燈録』、『本朝高僧伝』においても、子曇の上堂や問答などは全く収録されておらず、具体的な接化の様子が何ら述べられないのは惜しまれる。

このほか江戸中期のものではあるが、信濃（長野県）北佐久郡大和田村（佐久市鳴瀬大和田）の宝樹山常林寺第八世である曹洞宗の智顔白達（一六九六—一七八七）が撰した『二十四流稽疑』（内題は『国朝二十四流稽疑』）巻上にも、『第十東渡、宋西潤曇禪師書伝』が収められており、これは内容的に高泉性激の『東渡諸祖伝』の記載を概ね踏襲するかたちでまとめられている。さらに江戸後期の茶人である藤野宗郁（松陰亭）が撰して文化二年（一八〇五）に刊行した『墨蹟祖師伝書記』巻下にも、「相州建長西潤子曇禪師」の章が存しており、これは書き下し文で記されているが、概ね『延宝伝燈録』の記載を受けるかたちでまとめられている。

ちなみに西潤子曇に関するこれまでの研究としては、
葉貫磨哉「西潤子曇行状より見た初期鎌倉禅林」（『駒澤史学』第二〇号）

葉貫磨哉「北条時宗と西潤子曇の役割」（『中世禅林成立史の研究』の「北条氏の純粹禅への帰嚮」に所収）

という論文が存しており、かつて駒澤大学文学部の葉貫磨哉氏が考察を試みている。そのほかにも、

榎本涉「初期日元貿易と人的交流」（汲古書院『宋代の長江流

域 社会経済史の視点から』に所収）

という論考の中で、榎本涉氏が「弘安の役以前の日元交通状況」として子曇の消息に注目して論を展開している。また村井章介「北条時宗と蒙古襲来 時代・世界・個人を読む」（NHKブックス九〇二）の「中国禅宗界と時宗」に、「狂言まわしとしての西潤子曇」という項目が存している。

そこで本稿では伝記史料を踏まえて西潤子曇という禅者の活動のさまを詳細に論じてみることにしたい。なお、伝記史料を並記するに当たっては、以下のごとく略称することにした。

行実…『大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代勅諭大通禅師行実』

元亨…『元亨釈書』巻八「釈子曇」の章

東渡…『東渡諸祖伝』巻上「宋西潤曇禪師伝」

延宝…『延宝伝燈録』巻三「相州建長西潤子曇禪師」の章

本朝…『本朝高僧伝』巻三三「相州建長寺沙門子曇伝」

稽疑…『二十四流稽疑』巻上「宋西潤曇禪師書伝」

墨蹟…『墨蹟祖師伝書記』巻下「相州建長西潤子曇禪師」の章

郷里仙居県と幼少期

行実…禅師、諱子曇、号「西潤」。趙宋一十四葉理宗淳祐九年己酉生也。浙東道台州路仙居人。俗姓黃氏。

元亨：釈子曇。宋之台州人。

東渡：禪師、名子曇、号「西澗」。俗姓黃氏。台州仙居人也。父某、

母某氏。師生于淳祐己酉九年。

延宝：相州建長西彌子曇禪師、宋国台州仙居郡人。姓黃氏。

本朝：釈子曇、号「西彌」。俗姓黃氏。宋之台州仙居郡人。

稽疑：師名子曇、号「西澗」。姓黃氏。台州仙居人。生於理宗帝淳

祐九年己酉歲。

墨蹟：相州建長西彌子曇禪師、宋国台州仙居郡ノ人。姓八黃氏。

この人の法諱については子曇で一致しているが、曇は日が曇に遮られて曇ること、曇天の意であるが、仏教では墨曇（ゴータマ）や優曇華などの例に見ることく音写語として多く用いられており、どちらかという仏縁に因む縁起のよい字と見られている。南宋代から元代にかけて法諱の下字に曇の字を用いた禪者として、大慧派に橘洲宝曇（少曇、一一二九—一九七）と枯椿曇、松源派に蔘藜正曇と竺雲景曇、あるいは破庵派に希叟紹曇と雪山祖曇と西浦曇があり、さらに元代後期にも大慧派の覚源慧曇（一一三〇—一三七一）などが知られる。

また子とは男子の敬称であり、古来より学徳のある人に用いられる字といつてよく、孔子の門に出た卜商（字は子夏、前五〇七—前四二〇？）や孔伋（字は子思、前四九二—前四三二）などその例は検挙に暇がない。北宋代から南宋初期にかけて

は雲門宗の保寧子英（覚印禪師、一〇四六—一一一七）や曹洞宗の丹靄子淳（徳淳とも、一〇六四—一一一七）など子の字を用いた用例は多い。南宋末期から元代にかけては破庵派無準下の剣関子益（？、一二六七）や書画に秀でた嗣承未詳の日観子温（仲言、知婦子）あるいは大慧派の元叟行端の法嗣である用堂子楨などが存しているが、子の字を用いている禪者は存外に少ない。ちなみに日本に渡来した破庵派無準下の無学祖元（仏光国師、一二二六—一二八六）が別に子元と称したことも知られている。

一方、道号については西澗と記しているものと西彌と記しているものがあり、二つの表記が混在している。すなわち、「大通禪師行実」と『東渡諸祖伝』および『二十四流稽疑』では西澗となっているが、『延宝伝燈録』、『本朝高僧伝』および『墨蹟祖師伝』では西彌と記されるようになっていいる。この点、『元亨釈書』は単に「釈子曇」と法諱で記すのみであつて、残念ながら道号については何も伝えていない。

澗とは山と山に挟まれた川すなわち谷川・溪谷のことであり、彌も谷ないし谷川のことで澗に通じて用いられるから、澗と彌は同義と見てよい。いずれにせよ、道号と法諱の関係は西天竺の墨曇に因むと共に、西の溪谷が曇ないし霧に覆われたさまにも由来していよう。

ただ、後に触れることく子曇自身が揮毫した墨蹟や文書で

は、概ね「西潤」の署名と落款を用いていることから、本稿では一応は西潤をもって正式な道号として統一し、必要に応じて西潤の表記も使用することにしたい。

南宋末期から元代にかけて道号の頭文字に「西」の一字を用いた禅者はそれほど多くない。楊岐派の純庵善浄の法嗣に西江広謀があり、破庵派の無準師範（仏鑑禅師、一一七七一—一二四九）の法嗣に西巖了慧（一一九八—一二六二）と西浦曇があり、曹源派の癡絶道冲（一一六九—一二五〇）の法嗣に西溪 心が存している。

一方、南宋末期から元代にかけて道号の下字に「潤」または「礪」を用いた禅者はかなり知られている。大慧派では早くに拙庵徳光（仏照禅師、一一一一—一二〇三）の法嗣に北礪居簡（敬叟、一一六四—一二四六）があり、居簡と同門に当たる妙峰之善（一一五二—一二三五）の法嗣に別潤 源があり、別潤 源と同門に当たる東叟仲穎（？、一二七六）の法嗣に南礪似藻があり、少林妙高の法孫に玉潤光瑩が存している。同じく大慧派には偃溪広闡（仏智禅師、一一八九—一二六三）の法嗣に雪礪 森があり、大川普済（一一七九—一二五三）の法嗣に古潤世泉がいるが、とくに世泉はかつて普済の使者としてか日本に渡来し、やがて南宋に帰国したとされる。また破庵派では西巖了慧の法嗣に月潤文明（月礪 広行慧燈禅師、一一二八—？）があり、同じく古田徳屋（？、一二九二）の法

嗣に東潤道洵（東礪）があり、月庭正忠の法嗣に南潤 泉が存している。さらに曹源派では正叟慧心の法嗣に玉潤 璉が存している。このように当時の江南禅林には潤または礪を道号の下字に使う風もかなり流行しており、子曇もそうした風潮の中で西潤または西礪と称したものであろう。

ほか子曇には別号や雅号のごときものは現存する墨蹟などを通しても、いまのところ知られていない。また大通禅師とは日本の嘉元四年（徳治元年、一一〇六）に示寂してまもなく日本の朝廷より下賜された勅諡号であるが、その消息については後に詳しく触れることにしたい。

つぎに子曇の出生年時については「大通禅師行実」に「趙宋一十四葉理宗の淳祐九年己酉に生まる」と記されており、南宋の理宗（趙昀、一一〇五—一二六四、在位は一一二五—一二六四）の淳祐九年（一二四九）に生まれていることが知られ、この点は『東渡諸祖伝』とこれを受ける『二十四流稽疑』も同様に伝えている。また『延宝伝燈録』、『本朝高僧伝』、『墨蹟祖師伝』においても示寂年時と世寿五八歳との逆算から、淳祐九年の出生であったことが確かめられる。ただし、『鎌倉五山記』の「相州小坂郡山内県巨福山建長興国禅寺」の項の「伝燈菴大通禅師」の箇所、『五山記考異 附住持簿』の「相州鎌倉府山内県巨福山建長興国禅寺」の項の「伝燈菴大通禅師」の箇所、および『扶桑五山記』三、相陽巨福山建長

興國禪寺」の「住持位次」の「第十四欄末上」の箇所などによれば、世寿六五歳説を伝えているから、これらによれば、子曇の出生は逆算すると淳祐二年（一二四二）ということになる。一応、本稿では「大通禪師行実」をはじめ伝記史料が一樣に伝えている淳祐九年説に基づいて子曇の足跡を辿っていくことにしたい。

さらに子曇の出身地については、台州（浙江省）仙居県とされ、「大通禪師行実」ではとくに「浙東道台州路仙居の人」と元代の表記によつて記されている。また子曇の俗姓については『元亨釈書』以外すべて黄氏で一致している。仙居県とは東浙（浙東道）の台州に存する県の一つで、北宋の景德四年（一〇〇七）に置かれている。

ちなみに後に子曇と深い関わりを有する曹源派（一山派祖）の一山一寧（妙慈弘濟大師、一山国師、一二四七—一三三七）も同じ台州臨海県の胡氏の出身であり、子曇よりは二歳の年長に当たっている。同世代では松源派の靈石如芝（仏鑑禪師、一二四六—？）も台州黃巖県の出身と見られる。また若干ながら後輩にも、大慧派の元叟行端（慧文正辯仏日普照禪師、一二五五—一三四二）が台州臨海県の何氏、松源派の東嶼德海（明宗慧忍禪師、一二五六—一三三七）が台州臨海県の陳氏、竺元妙道（東海慕翁、定慧円明禪師、一二五七—一三四五）が台州寧海県の陳氏であつて、いずれも台州地内の出身として知ら

れる。また子曇よりいくぶん遅れるが、同じ仙居県の出身の禪者としても、大慧派に本源善達があり、破庵派に無見先觀（真覺禪師、一二六五—一三三四）と東澗道洵が存しており、最初に活躍した敬中普莊（呆庵、一三四七—一四〇三）も仙居県の人である。このように南宋末期の動乱期に台州の地から次代の江南禪林を担う優秀な人材が次々と輩出し、元代に活躍した状況が窺われて興味深い。とりわけ、仙居県からほぼ同時期に西澗子曇と東澗道洵が相次いで輩出しているのは偶然ではないのかも知れない。

そんな台州の出身者の中から、やがて子曇と一寧および一寧の俗甥で法を嗣いだ石梁仁恭（慈照慧燈禪師、一二六六—一三四四）がともに来日し、日本禪林に化導を敷くことになる。

郷里の紫籜山広度寺における出家

行実…薙染於本郡紫籜山広度禪寺。師長七尺、儀容俊偉、目光射人。

東渡…幼聰敏、立志不羣、不樂浮榮、誓求剪落。礼本郡紫籜山広度寺某老師、為弟子。

延宝…薙染於本郡広度寺。身長七尺、目光射人。

本朝…自幼聰敏、志操踔絶。入本郡紫籜山広度寺出家。身長七尺、目光射人。才思潘甍、特善筆翰。

稽疑…幼聰敏、立志不羣、不樂浮榮、誓求剪落。投本郡

紫籙山広度寺、為「弟子」。

墨蹟：本郡ノ広度寺ニ雑染ス。身ノ長七尺、目光射ル。

幼い頃の子曇の消息については「大通禪師行実」に何ら記されていないが、『東渡諸祖伝』に「幼くして聡敏にして、志しを立てて群ぜず、浮栄を樂しまず」とあり、『本朝高僧傳』に「幼きより聡敏にして、志操は蹕絶す」と記され、『二十四流稽疑』にも『東渡諸祖伝』と同様に記されている。これが如何なる伝承に基づくものかは定かではないが、子曇は幼い頃から聡明で賢い子であつたものらしく、他の子供たちと群居するのを好まず、世俗的な榮華にも興味を示さなかつたとされる。また『東渡諸祖伝』『二十四流稽疑』には「誓つて剪落を求む」とあり、子曇は幼いときから剃髪出家することを自ら願ひ求めていたとされる。

ところで、子曇の出家に關しては「大通禪師行実」に「本郡の紫籙山広度禪寺に雑染す」とあるほか、『元亨釈書』以外の諸伝が等しく同様に伝えている。子曇は年少にして郷里仙居県の紫籙山広度寺といつ寺で剃髪得度し、仏門の道を歩んでゐるわけである。『嘉定赤城志』卷二「山水門四山」の「僊居」によれば、

紫籙山、在「東北三十里」、旧名「竹山」。与「天台」接。唐天宝中、

明皇夢一人紫服而朝、自称「竹山神」、来呈「瑞鳳」。翌日果有「鳳

翔焉、遂改「今名」。今其側有「瑞峯」、又上有「樓鳳亭」。王翫

詩云、竹山絶頂古招提、景異相将竺国齐、靈巖吞吐台嶽小、瑞峯高比斗牛低、雲深石怪宜「僧隱」、水靜山幽樂鳥啼、記得當年封「紫籙」、只因「丹鳳」此中棲。

と記されており、同じく『嘉定赤城志』卷二九「寺觀門三寺院」の「僊居 禪院」によれば、

広度院、在「東北三十里紫籙山上」。旧在「西隅百歩」、名「瑞峯」。唐天宝元年建、会昌中廢、晋天福中重建。国朝宣和中、改「今額」。紹興二十年、僧「蘊璋」徙「今地」。地枕「溪帶」、壑「林麓衍美」、居者多「藝朮焉」。

と記されている。清の乾隆元年（一七三六）に重修された『浙江通志』卷三三「寺觀七」の「台州府 仙居県」には、

広度寺、「台州府志」在「東北三十里紫籙山」。旧在「西隅」、名「瑞峯」。唐天宝元年初、晋天福中重建。宋宣和間、賜「今額」。紹興二十年、僧「蘊璋」徙「今址」。寺在「山頂中」、梵宇弘敞、枕「溪帶」、壑「林麓衍美」、居者多「芸竹木」。左右小刹凡六、有「双闕」・「栖鳳亭」諸勝。国朝順治初毀、十八年、僧「巨靈」重建。

といくぶん詳しく、さらに清代における消息なども知られる。これらによれば、紫籙山は一に紫籙山とも記されて台州仙居県北三〇里に位置し、古くは竹山と称しており、山上に広度院といつ禪院が存したことが伝えられている。この寺はもと瑞峯院と称し、唐の天宝元年（七四二）に創建され、会昌の破仏で一時は廢されたものの、晋の天福年間（九三六—九

四四)に重建されている。その後、北宋末期の宣和年間(一一一九—一二二五)に広度院(広度寺)と寺額を改められ、南宋の紹興二〇年(一一五〇)に僧蘊璋が伽藍を移したと伝えられている。伽藍は溪谷に沿って建てられ、山水に恵まれた景勝の地であることが記されており、おそらく仙居県でも名の通った禅刹であったものと推測される。また寺の左右に小刹が六棟あり、さらに双閣や棲鳳亭(栖鳳亭)といった勝蹟も存したものらしい。子曇が投ずる以前に紫籜山の広度寺に住持した禅者としては、南宋中期に大慧派の混源曇密(一一二〇—一一八八)の名が知られている。

ちなみに元代初期には大慧派の一山了万(無意、一二四一—一二二二)が一〇年にわたって紫籜山広度寺に住持しており、その後も子曇と同じ松源派の竺三元妙道(東海善翁、定慧玄明禅師、一一五七—一一四五)が広度寺に住持して多大の接化をなしたことが知られる。さらに妙道の法嗣である了堂唯一(芥室)は台州寧海県の葉氏の出身であるが、やはり師席を継いで広度寺に住持している。

このほか『雪巖和尚語録』巻一「台州仙居護聖禪寺語録」によれば、破庵派無準下の雪巖祖欽(慧朗禅師、?—一二八七)が南宋末期に短期間ながら仙居県東南五〇里の護聖禪寺に化導を敷いたことが知られている。ただ、祖欽の伝記が詳細に辿れないため、祖欽が仙居県の護聖寺の住持を勤めていたの

は、子曇がいまだ仙居県内に留まっていた時期であったのか、仙居県を離れて行脚して以降であったのかは定かでない。

子曇は広度院の住職のもとで出家得度し、「子曇」という法諱を安名されているものと見られるが、残念ながら剃髪を受けた受業師の名は伝えられておらず、『東渡諸師伝』においても「鬚つて剪落を求め、本郡の紫籜山広度寺の某老師を礼して弟子と為る」として「某老師」としか記していない。また「大通禅師行実」をはじめ諸伝ともに得度の年時や法臘を何ら記していないことから、子曇が剃髪得度した年齢はもろろん、具足戒を受けた年時についても定かでない。ただ、状況からすると幼少にして広度寺に上つて重行(童子行者)となり、まもなく剃髪得度して仏門に入り、さらに一五歳前後の頃には受戒して正式な比丘(大僧)となつているものと推測される。

子曇とほぼ同時代の南宋末期から元代にかけて法諱の上字に「子」の語を用いた禅者としては、松源派の竺西妙坦(竹溪、一二四五—一三二五)の法嗣に華国子文(宗周、一二六九—一三五二)があり、大慧派の晦機元熙(仏智禅師、一一三八—一二一九)の法嗣に用堂子梗と業海子清があり、また嗣承不詳の禅者ながら書画に秀でていた日観子温(仲言、知非子・知帰子)の存在も知られる。

いま一つ注目すべきは子曇という人の風体であつて、「大

通禪師行実」には「師の長け七尺、儀容は俊偉にして、目光人を射る」と記されており、『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』『墨蹟祖師伝』もこの記述をほぼ踏襲していることであろう。子曇は背丈のきわめて高い人であったものらしく、一〇歳代後半には身長が七尺に達したと伝えられる。宋・元代において一尺は三〇・七二センチであったとされるから、単純にこれを当てはめて計算すると、子曇は二一〇センチを越える大男であったことになる。多少の誇張を踏まえて差し引いても、子曇が二メートル前後の堂々たる体格を有していたことは疑いなくろう。加えて容姿についても「儀容は俊偉」とあるから、禅僧として礼儀にかなった姿、立ち居振る舞いも立派で、才知にすぐれていたものらしい。また「目光、人を射る」とあり、目の光は人を圧するものが存したとされるから、かなり眼光鋭いものが存したのであろう。あたかも唐代の馬祖道一（馬大師、大寂禅師、七〇九—七八八）や黄檗希運（断際禅師）のとき鋭い視線を放つ威厳に満ちた風体を想起せしめるものがある。現今に子曇の姿を伝える木造や画像の頂相が伝えられていないため、その風貌を仰ぎ見ることができないのは誠に残念であるが、おそらく威厳に富む長身の偉丈夫の漢であったものと見られる。あるいは丈六（一丈六尺）の西天竺の仏陀（墨曇）に準えて、七尺の長身を有した子曇は小釈迦のごとく西澗子曇と命名されたのかも知れない。

また『本朝高僧伝』のみは、このほかに「才思は濬発にして、特に筆翰を善くす」と伝えているが、これが如何なる伝承に基づいているのかは定かでない。これによれば、子曇は思慮深く才知に優れ、とくに書を善くしたことを述べているが、確かに現存する子曇の墨蹟を見るに、楷書にせよ草書にせよ繊細にして気品のある傑出した書風といつてよい。おそらく『本朝高僧伝』の編者である正元師蛮は、実際に子曇の墨蹟などを目の当たりにし、感慨を込めてこの表現を挿入したものであろう。

蘇州承天寺の石楼普明への参学

行実：「蘇州承天寺、駐錫平江承天、石楼明公命掌内記。時年十七歳、度宗咸淳改元乙丑也。

元亨：「徧游叢社、普参名宿。

東渡：「進戒之後、瓢笠徧扣諸方。嘗於平江承天石楼明禪師室中、

掌内記。齒少氣豪、身長七尺、目光射人、兼才思濬発。

每操觚染翰、靡不痛快醇至。叢林争伝誦之。

延宝：「十七遊方、調石楼明于承天、掌箋翰。

本朝：「十七遊方、在蘇州承天石楼明禪師會裏、典内記。

稽疑：「進戒之後、瓢笠徧扣諸方。齒少氣豪、身長七尺、目光射

人、兼之才思濬発。每操觚染翰、靡不痛快醇至。叢

林争伝誦焉。

墨蹟：十七ニシテ遊方ス。石樓ノ明ニ承天ニ謁ス。箋翰ヲ掌ル。

受戒して後、まもなく子曇は仙居県の紫籜山広度寺を離れて諸方歴遊に赴いたものらしく、「大通禪師行実」に「叢社に飢厭し」とあり、『禅林僧伝』本では「飢」が「飲」となっているが、これは『禅林諸祖伝』本の伝える「飢」が正しい。一方、『元亨釈書』にも「徧く叢社に遊び、普く名宿に参ず」と記されており、やはり「叢社」の語が存している。叢社とは禅宗の修行道場である叢林のこと、飢厭とは飽きるとか満足するの意で、叢林で飽きるほど修行したことをいう。具体的に如何なる禪者に参学したのかは記されていないが、郷里の台州から蘇州（江蘇省）に向かつて行脚をつづけ、いくつかの禅寺を遍歴していったものであるう。ただし、一〇歳代半ばに遍参しただけで「飢厭」とまで表記するのはかなりの誇張といつてよい。

こうして子曇が辿り着いた先が蘇州平江府の甲刹である呉県西南二五里の承天能仁禅寺であり、ときの住持であった石楼明のもとに投じている。その時期を「大通禪師行実」は南宋の度宗（趙昀、一二四〇—一二七四、在位は二六四—二七四）の咸淳元年（一二六五）であったとし、子曇の二七歳のことであったと伝えている。ここにいう石楼明とは、大慧派の北圃居簡（敬叟、一一六四—一二四六）の法を嗣いだ石楼普明のことであり、その系統を示すならば、

大慧宗杲 拙庵徳光 北圃居簡 物初大観
石楼普明

ということになる。普明は南宋初期に活躍した楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（妙喜、普覺禪師、一〇八九—一一六三）の法曾孫であつて、物初大観（一二〇一—一二六八）や日本の天祐思順（真観上人）とは同門に当たつてゐる。『続伝燈録』卷三五「目錄」に「淨慈居簡禪師法嗣」として「石樓明禪師 無録」とあり、『増集続伝燈録』卷二にも「淨慈北圃簡禪師法嗣」として「万寿石樓明禪師 無伝」と名が記されている。ただ、幸いに『北圃文集』巻五に「石樓序」が収められ、文中に「潼川普明比丘、摘「石樓」三字、以見志」とあることから、この人の法諱が普明であり、潼州（四川省）潼川の出身で、同郷の居簡を慕つてそのもとに投じ、石樓の道号説を得ていることが判明する。

また『虚舟和尚語録』、「臨安府靈隱景德禪寺語録」には「徑山虚堂和尚遺書至上堂」、「平江万寿困叟和尚遺書至上堂」などを載せた後に「石樓和尚赴「平江万寿」上堂」を収めているから、後に困叟という禅者の後席を継いで普明は蘇州府治東北に存した十刹第四位の万寿報恩光孝禅寺に住持していることになるう。『正誤宗派図』三では「淨慈北圃敬叟居簡」の法嗣として「万寿石樓普明」と具名が伝えられている。普明は物初大観と同門に当たるものの、詳しい消息は定かでない

く、わずかに蘇州の承天能仁禪寺や万寿報恩光孝禪寺に住持したことが知られるにすぎない。

あるいは子曇の道号である西潤ないし西潤とは、北闕居簡の法を嗣いだ普明による命名であったのではなからうか。とすれば、普明は師の居簡の道号である北闕に因んで、門下に到った子曇に対し、西潤ないし西潤の道号を付与したことになる。また「大通禪師行実」をはじめとする諸伝記によれば、承天寺の普明の会下で子曇は内記あるいは箋翰を掌つたとされる。内記とは禪寺で住職を補佐する五侍者の一つ書状侍者のことであり、住職の書状の草案などを掌る職位である。箋翰というのも箋が上奏文、翰が筆の意で文章を掌る役であるから、やはり書状侍者のことを指している。おそらく子曇が筆墨にすぐれていたことから、普明は自らの傍らに侍せしめ、あえて年少にも拘わらず書状侍者の職に就けたものである。②

また『東渡諸祖伝』と『二十四流稽疑』によれば、

齒い少くして氣は豪く、身の長七尺、目光は人を射、兼て才思は濬発たり。觚を操り翰を染むる毎に、痛快醇至ならざるは靡し。叢林、争いて之れを伝誦す。

と当時の子曇のありようを伝えている。年齢はいまだ一〇代と若かったが、子曇は気性が秀でており、すでに触れたことく、七尺に及ぶほどのずば抜けた身長と鋭い眼光を持ち合わ

せ、しかも才知も深く優れていたことを伝えている。操觚とは文字を書くこと、觚とは古代の中国で文字を記すのに用いた四角い木の札のことである。また翰とは筆あるいは書簡のことであり、染翰で文章を書くとか書簡を著わすことである。これによれば、子曇は文章を書くのも得意であったものらしく、痛快にして混じり気のない書風をもって知られ、叢林に伝播して好まれたとされる。

杭州淨慈寺の石帆惟衍との機縁

行実…是年秋八月、石帆衍和尚赴詔、自吳之承天、移淨慈。師径往入室參問、資緣契会、頓止奔馳、侍香山中。

元亨…適於「石帆衍公処」、止「奔馳」。

東渡…咸淳乙丑歲、石帆衍和尚赴詔住淨慈、道重一時。師腰、包往謁、師資契会、頓息馳求執侍。

延宝…石帆衍住淨慈、師腰、包參謁。一面機契、頗息馳求。

本朝…咸淳乙丑、石帆衍和尚赴詔淨慈、道重一時。曇腰、包參謁、頓息馳求。

稽疑…度宗咸淳元年乙丑歲、造淨慈、得法石帆惟衍和尚。道場

運庵普巖和尚的孫、而系楊岐第十一世之孫也。

墨蹟…石帆衍、淨慈二住入。師、腰包參謁入。一面二機契シテ、

頓二馳求ヲ息ム。

子曇が蘇州の承天寺で石樓普明に參学していたのはきわめ

て短期に限られていたものらしく、何らかの理由で普明は承天寺の住持職をまもなく退いているようである。そして、普明の後席を次いで新たに承天寺に住持したのが松源派の石帆惟衍であり、その入院は子曇が普明に参じたと同じ咸淳元年の前半であつたものと推測される。

石帆惟衍の足跡については別に詳しく触れるつもりなので、ここでは子曇との関わりの方に絞るかたちで簡略にその事跡を論じておきたい。『増集統伝燈録』巻四「四明天童石帆禅師」の章などに、惟衍について記事が収められているが、いずれも内容が簡略にすぎ、詳しい情報はほとんど辿れない。わずかに窺われるのは、惟衍が虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽（老叢翁、一一三一一—一二〇二）の高弟である運庵普巖（少瞻、？—一二三二、または一二五六—一二二六）に参じて法を嗣いだ門人であること、同門の法兄に虚堂智愚（思耕叟、一一八五—一二六九）が存していることなどにすぎない。子曇が惟衍を師と仰ぐ因縁について、「大通禅師行実」にはつぎのように伝えている。

是の年秋八月、石帆衍和尚、詔に赴いて、呉の承天より浄慈に移る。師、径ちに往いて入室参問し、資縁契会し、頓に奔馳を止め、山中に待香す。

これによれば、惟衍は咸淳元年（一二六五）の秋八月に勅詔を受けて蘇州の承天寺から杭州（浙江省）钱塘県の南屏山

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

浄慈報恩光孝禅寺に遷住しているが、このとき子曇は直ちに浄慈寺に赴いて惟衍のもとに入室したとされている。ただ、それまで子曇は同じ承天寺において石樓普明に参学していたわけであるから、住持が普明から惟衍に移行した際にはすでにその門に投じているものと見られ、子曇が初めて惟衍に参じたのは承天寺であつたと解するべきであろう。

浄慈寺は杭州府治の西、西湖の南岸に存しており、南宋後期に禅宗五山の第四位に列した名刹である。それまで浄慈寺に住持していたのは惟衍の法兄に当たる虚堂智愚（思耕叟、一一八五—一二六九）であり、智愚が杭州余杭県に存する禅宗五山の第一位の径山興聖万寿禅寺に勅住するのの際し、法弟の惟衍が後席を継いで浄慈寺の住持に迎えられているわけである。

浄慈寺の惟衍の席下において子曇は入室して参問し、師資の機縁が契つたとされるが、残念ながら悟道の問答商量などは伝えられていない。惟衍のもとで何らかの証契を得たものと見られ、ここにおいて子曇は他師に歴参することを止め、真に惟衍を本師と仰いだことが知られる。子曇が如何なる機縁で惟衍より印可を受けたのかは定かでないが、雲外雲岫は「大通禅師行実」で、「古帆未掛、鯨波万里、古帆已掛、鯨波万里」と語っているから、あるいは「古帆未掛」の古則に因むものであつたのかも知れない。「大通禅師行実」によれば、

このとき子曇は惟行の傍らに執侍し、侍香の職を勤めたことされるが、侍香とは住持に随侍する五侍者の一で焼香侍者のことである。若くて長身の子曇が老齢に達していた住持の惟行に随侍しているさまは、山内の大衆や帰依の檀越らにきわめて印象深く受け取られたものと推測される。こうして子曇は惟行の法を嗣いだ高弟の一人となり、松源派の運庵普巖の法孫に列したわけである。

ところで、この頃に日本から齎された『月峯和尚語録』を南宋の地にて開版するのの際し、浄慈寺の惟行が序文を撰している。『月峯和尚語録』とは松源派（大覚派祖）の蘭溪道隆（大覚禪師、一一二三—一二七八）の高弟である月峯了然が鎌倉の極楽禪寺（後の稻荷山浄妙寺）の住持としてなした語録であり、現在、その宋版が中国の北京図書館に所蔵されており、江戸時代の覆刻本が日本の国立公文書館の内閣文庫に所蔵されている。その『月峯和尚語録』の冒頭には、

無明将_レ松源一滴水、鼓_レ平地波濤、蘭谿用_レ無明一星火、

談_レ月峰不甘_レ尽_レ情掃蕩、直得_レ灰飛流絶、可_レ謂不能_レ

克_レ其家_レ者、眼_レ神僧、向_レ此_レ録_レ中_レ辨_レ取。

時咸淳戊辰長至前十日、住_レ大宋南山浄慈_レ石帆叟_レ唯行書。

という惟行の序文が付されている。これによれば、惟行が『月峯和尚語録』に序文を寄せたのは、咸淳四年（一二六八）の長至（夏至）より一〇日前のことであり、序文の中で惟行

は了然を松源崇嶽から無明慧性（一一六一—一二三七）さらに蘭溪道隆とつづく松源派の法統を嗣続する人材として称えている。この点は『元亨釈書』巻六「釈了然」の章にも、

有_レ携_レ其語_レ入_レ宋_レ地_レ者、南屏衍石帆、乳竇曇希叟、著語称讚云。

と簡略に記されており、『月峯和尚語録』を携帯して入宋した日本僧があり、惟行らに著語を請うたことを伝えている。

『月峯和尚語録』には惟行の序文について、同じく咸淳四年の臘八（成道会）すなわち二月八日に、松源派の溪西広沢が杭州仁和果桐扣の黄鶴峰下に存する仏日山浄慧禅寺の専機室（方丈か）で記した序文が載せられている。また末尾には同じく咸淳四年の開爐日すなわち一〇月一日に、破庵派無準下の希叟紹曇（牧間）が明州奉化県の雪竇山資聖禅院（資聖禅寺）の住持として記した跋文が載せられている。

このとき了然の語録を持参して浄慈寺に到った禅者が具体的に誰であったのかは定かでないが、おそらく子曇も同じ浄慈寺にあつて『月峯和尚語録』の存在も知っていたことであろうから、日本禅林に対する何らかの情報をすでに入手していたものと見られる。

天童山における石帆惟行への随侍

行実…六年庚午春二月、石帆有_レ旨_レ領_レ天童。師随侍行也。

東渡：六年庚午、石帆被旨上天童、携師与俱。

本朝：復隨衍遷天童、執侍六載。

稽疑：咸淳六年庚午歲、石帆被旨上天童、携師与俱。

その後、惟衍は淨慈寺から明州（浙江省）慶元府鄞縣東六〇里の天童山景德禪寺へと陞住している。天童山は南宋後期に禪宗五山の第三位に列しており、かつて黃龍派の明庵采西（千光法師、一一四一—一二二五）や曹洞宗の永平道元（仏法房、一一〇〇—一二五三）などが参学して以来、日本禪林とも因縁浅からぬ禪刹となつてゐる。

「大通禪師行実」によれば「六年庚午春二月、石帆、旨有りて天童を領す。師、随侍して行く」と記されている。ただし、「禪林僧伝」本では「天童」が「天龍」となつてゐるが、これは「禪林諸祖伝」本の伝える「天童」が正しい。おそらく「禪林僧伝」本は「天童」を「天竜」と見誤り、さらに「天竜」を「天龍」と書き改めてゐるのであろう。惟衍が天童山に入寺したのは咸淳六年（一二七〇）二月のことであり、『扶桑五山記』一、「大宋国諸寺位次」の「天童住持位次」によれば、

- 卅九、西岩惠禪師。四十、別山智禪師。四十一、西江謀禪師。
- 四十二、簡翁敬禪師。四十三、石帆衍禪師。四十四、環溪一禪師。
- 四十五、月波明禪師。

と記されている。当時の天童山は第三九世に無準下の西巖了

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

慧（一一九八—一二六二）が住持していた際に火災によつて焼失しており、第四〇世に同門の別山智（智天王、一二〇一—一二六〇）が入院して伽藍の復興に努めてゐる。さらに第四一世に楊岐派の西江伝謀が就き、第四二世には無準下（曹源派とも）の簡翁居敬が住持している。惟衍は簡翁居敬の後席を継いで天童山に陞住しているわけであるが、残念ながら『天童寺志』卷三、「先覺攷 宋」には、簡略な記事が存するのみで、その詳細は考察すべき史料がないとして伝記的な記載が見られない。

このとき子曇は引きつづき惟衍に随侍して天童山に赴いてゐる。この点は『東渡諸祖伝』と『二十四流稽疑』が継承しており、『本朝高僧伝』も年時は記さないものの、子曇が惟衍に随侍して天童山に移つたことを伝えている。ただし、『本朝高僧伝』によれば、子曇が天童山で惟衍に随侍していた期間が六年間であつたかのごとき印象を受けるが、実際には惟衍に参学していた期間が全体で六年間であつたことを意味している。

しかもこの時期には天童山の惟衍のもとに珍しくも日本僧が来参している。「大日本国特賜仏燈国師約翁和尚無相之塔銘並序」によれば、

- 乃更遊宋、初達三台之九山、首見寂窓照於育王。一時宗匠、天童石帆衍、淨慈東叟穎、靈隱虚舟度、径山藏叟珍、覺庵真、

咸推器重。于_レ時名勝、照晦機・万_一山・本末宗・相寂庵、皆樂_レ之遊。

と記されており、松源派（大覚派祖）の蘭溪道隆の法を嗣いだ約翁徳俊（仏燈国師、一一四四—一三三〇）が入宋して参学した消息を伝える中に天童山の惟衍との関わりを伝える記事が見られる。徳俊が参学した江南の禪者として具体的に名が挙げられているのは、阿育王山に住持していた虎丘派の寂窓有照と、天童山に住持していた惟衍と、淨慈寺に住持していた大慧派の東叟仲穎（？—一二七六）と、靈隠寺に住持していた松源派の虚舟普度（一一九九—一二八〇）と、径山に住持していた大慧派の蔵叟善珍（一一九四—一二七七）という五山の住持らであり、また住地の記されていない松源派の覚庵夢真である。さらに徳俊が在宋中に交友を持った同世代の禪者として、大慧派の晦機元照（仏智、一一三八—一一三九）と大慧派の一山了万（無意、一一四一—一一三二）と破庵派の末宗徳本と大慧派（一に松源派）の寂庵妙相といった禪者らの名が挙げられているが、残念ながら子曇の名はそこに見られない。ただ、日本僧の徳俊にとっても、身の長七尺にも及ぶ子曇の存在は、おそらく印象深く受け取られたはずであって、後年、両者は日本禅林で関わりを新たにすることになる。

北条時宗の書簡と最初の来日

行実…七年辛未、有_二本朝副元帥平公時宗鈞命_一。石帆和尚以_二法語

一段_一勉_二其行_一。航海而来、即文永八年也。師年二十有三。

東渡…明年、本邦副元帥時宗平公、以_二礼聘_一東渡。石帆以_二法語

一段_一勉_二其行_一。泊_二至_一觀_二光上国_一、当_二文永八年_一、時師方

二十三歳。

延宝…文永八年、東遊_二此方_一、年二十三。

本朝…常志_二東遊_一、遂以_二文永八年_一、觀_二光吾国_一、時年二十三。

稽疑…明年、時宗平公、以_二礼聘_一東渡。石帆以_二法語一段_一勉_二其

行_一。泊_二觀_二光上国_一、当_二龜山院文永八年辛未也_一、時師方二

十三歳。

墨蹟…文永八年、此方二東遊_一、年二十三。

天童山の惟衍のもとで侍者として研鑽に努めていた時、不思議な因縁によって子曇は異郷日本の地へ赴くことになる。「大通禪師行実」によれば、

「大通禪師行実」によれば、

七年辛未、本朝の副元帥平公時宗の鈞命有り。石帆和尚、法語一段を以て其の行くを勉ます。航海して来たる、即ち文永八年なり。師の年二十有三なり。

と記されており、子曇が初来日を果たす消息が簡略にまとめられている。この記述によるならば、南宋の咸淳七年（日本の文永八年、一二二一）に日本から執権（副元帥）の北条時宗

(相模太郎、法光寺殿道果、一二五一—一二八四)が認めた書簡が遠く海を隔てて天童山の惟衍のもとに届けられたものらしい。ただし、時宗の書簡の内容が具体的に如何なるものであったのかは何も記されておらず、実際に使者として日本から時宗の書簡を所持して天童山に到った禅者が誰であったのかも定かでない。

これより先、時宗は文永五年(一二六八)に鎌倉幕府の第八代執権となっており、その翌年の文永六年には早くも松源派の大休正念(仏源禅師、一二二五—一二八九)が四〇代半ばで来日しており、時宗の帰依を受けて鎌倉の禅興寺に住持するなど、鎌倉禅林における活動を開始している。

おそらく時宗としては正念につづいて本格的な中国禅僧を日本に招聘したい意図が存したものと見られ、日本とも因縁浅からぬ天童山に使者を派遣したものであろう。同門の法兄に当たる虚堂智愚が咸淳五年(一二六九)一〇月に示寂した後、惟衍は江南禅林の中心的な禅者のひとりとして明州の天童山に化導を敷いており、時宗が白羽の矢を当てるには最も相応しい存在であったといつてよい。しかし、このときすでに惟衍は七〇歳を優に越えた老齢の身であったことから、とても自ら日本に向かうことのできる状況ではなかったし、惟衍自身としても不穏な国際関係の中で進んで日本に赴く意志など持ち合わせていなかったはずである。おそらく時宗とし

ても老齢の惟衍が日本の要請で渡航することなど考えてもいなかっただであらう。

ただ、惟衍としては日本の執権(副元帥)からの申し出をむげに断ることもできず、門下で侍香ないし侍者を勤めていた子曇を選んで使者として日本に向かわせることにしたものであろう。なぜ惟衍がこのときいまだ二〇歳代前半の子曇を使僧に選んだのかは定かでないが、おそらく二メートルを超える堂々たる風格を有する子曇であれば、時宗を始めとする鎌倉の武士たちに対しても面目を一新すると判断して決定したものでなかろうか。

このとき惟衍は時宗宛てに自ら法語一編を揮毫して子曇に託したとされ、子曇は惟衍の法語を所持して日本へと向かっている。もちろん、年齢的にいっても子曇はあくまで惟衍の書簡を日本に届ける使僧の役を請け負ったのみであって、日本人々を化導する目的で渡航したものではなかったはずである。この点、『本朝高僧伝』のみが「常に東遊を志し、遂に文永八年を以て吾が国へ觀光す」と記し、子曇が早くから常に日本渡航を志していたかの如く伝えているのは、かなりの誇張と見てよいであらう。

子曇が天童山の惟衍のもとを辞して明州慶元府の港を発つたのが、咸淳七年の何月なのかは定かでないが、いまだ二三歳という若き一介の中国僧は日本の文永八年の年内には大海

を航して筑前（福岡県）に辿り着いている。

ちなみに同じ文永八年の九月には元国（蒙古）の使節団として宣撫の趙良弼（字は輔之、一一二七—一一八六）らが筑前の今津に到っており、少弐氏によって国書の副本が鎌倉の幕府に送られている。また文永九年五月にも張鐸・趙良弼らが再び使節団を擁して大宰府に來航している。『円通大応国師語録』巻下「偈頌」には「和蒙古国信使趙宣撫頌」有「東林遠之語」一首^②が収められており、紹明は筑前早良島の海晏山興徳寺の住持として陝西路宣撫使の趙良弼と詩偈のやり取りをなしている^③。

そうした状況下にあつて、蒙古の趙良弼らとほぼ時期を同じくして南宋から渡來した子曇の場合も、直ちに鎌倉行きが許されたとは見がたく、暫しの間、筑前の地に留め置かれたと解するのが自然であろう。

筑前興徳寺の南浦紹明との因縁

その後、子曇は惟衍の法語を所持して京都さらに鎌倉へと向かうわけであるが、幕府の許可を得るまでの間か、しばらくの期間を筑前の地に留まっていたものらしい。「大通禪師行実」をはじめとする伝記史料には何らの記載も存していないが、來日早々の子曇は法從兄に当たる南浦紹明と交渉を持っている。『円通大応国師語録』の末尾には、文永九年（一

二七二）三月に撰した子曇の跋文が収められており、その全文を示すならば、

提「殺人刀、乘「活人劍、須「遷「作家手段、方堪「任用。苟失「其正、非「唯血「指刃「身。益且魂驚膽落、莫「知「柄欄何似。今覽「興徳堂頭南浦法兄禪師拳「揚綱要、有「如「長劍快馬「運転如「風。略無「縫罅可「容「窺測。若其「眨眼之流、豈止「橫屍万里。余意、虚堂老伯未「必有「此作「也。所謂、智過「於師「方堪「伝受者、於「斯尽矣。因為書「于卷末。

時文永壬申季春、大宋国属末比丘西瀨子曇

というものである。ただし、これは内容からも知られることく、あくまで『円通大応国師語録』巻上の「円通大応国師初住筑州早良山興徳禪寺語録」に当たる部分に対する跋文であつて、來日早々の子曇が実際に法從兄に当たる南浦紹明を筑前早良山の興徳禪寺に訪ねて相見し、その語録を目の当たりにして跋文を寄せたものである。子曇は跋文の中で、

今、興徳堂頭南浦法兄禪師の綱要を挙揚するを覽るに、長劍・快馬の如く運転して風の如くなる有り。略ぼ縫罅の窺測を容るべき無し。若し其れ眨眼の流ならば、豈に止に横屍万里のみならんや。余意うに、虚堂老伯も未だ必ずしも此の作有らざるなり。所謂る「智、師に過ぎて、方めて伝受するに堪えたり」とは、斯に於いて尽くせり。因りて爲めに卷末に書す。

と語っており、智愚を虚堂老伯と記し、紹明を南浦法兄禪師

と称して超師の器と讃辭している。このとき子曇はわずか二四歳の若さであり、紹明もいまだ三八歳の壮年に当たっている。当時の紹明の語録はおそらく『南浦和尚語録』の「南浦和尚初住筑州早良興德禪寺語録」といった表題であつたものと見られる。また子曇は来日に際して南宋で刊行された後録を含む『虚堂和尚語録』を日本に将来してきているのではないかと見られる。

一方、元末に大憲派の懶庵廷俊(用章、一一九九—一三六八)が撰した「円通大応国師塔銘」によれば、

文永七年秋、徒西都、出世筑州之興德禪寺。遂以嗣法書并入院語、因曇侍者呈径山。堂得之大喜、謂衆曰、吾道東矣。其爲堂器重如此。

と記されている。これによれば、文永七年(一二七〇)の秋に紹明は建長寺の道隆のもとを辞して九州に下つており、筑前早良興の興德禪寺に出世開堂したとされる。実際に「円通大応国師語録」巻上「円通大応国師初住筑州早良興德禪寺語録」によれば、紹明が興德寺に入寺開堂したのは文永七年冬一〇月二八日であつたことが知られ、その中の「陞座拈香」において、

此香、曾在凌霄峯頭、無心之中忽然拾得。今日人天普会、不敢冀戴。燕向爐中、供養前往大宋径山興聖万寿禪寺虚堂和尚大禪師、用酬法乳。

西潤子曇の渡来とその功績(佐藤)

と自ら述べている。紹明は開堂の拈香において、径山の凌霄峰における悟道の機縁を語り、本師の智愚に対して嗣承香を炷いて法乳の恩に酬いている。

ところで、問題なのは「円通大応国師塔銘」に、

遂に嗣法の書并び入院の語を以て、曇侍者に因りて、径山に呈す。堂、之れを得て、大いに喜び、衆に謂いて曰く、「吾が道、東せり」と。其の堂の爲めに器重せらるること此くの如し。

という逸話が付されていることであろう。これによれば、紹明が筑前の興德寺に開堂出世した際に、曇侍者という禅者が遠く海を越えて南宋に赴き、嗣法の書と入院の語を径山の智愚のもとに呈したとされる。ここにいう嗣法の書とはいわゆるの嗣書ではなく、門人が師に対して嗣承香を炷いたことを報告する文書の類いであろう。ときに智愚は紹明からのことばを得て大いに喜び、会下の大衆らに「吾が道、東せり」と告げたというのである。

ところが、日本の文永七年とは南宋の咸淳六年に当たり、智愚はその前年の咸淳五年一〇月七日に世寿八五歳で示寂していることから、すでに一年以上の歳月が経過していたことになる。まして曇侍者が紹明の開堂して以降に嗣法の書を持参して入宋したとすれば、径山に辿り着いたのは早くても咸淳六年の末か咸淳七年の春であつたと見なければならぬ。当然のことながら、曇侍者が径山に赴いて生前の智愚に会い、

紹明の書を呈示することなどあり得ないわけである。

ここにいう曇侍者こそ、実は子曇その人のことを指しており、おそらく子曇は来日早々に早良の興徳寺に法從兄の南浦紹明を訪ね、紹明と親しく相見しているものと見られる。子曇は興徳寺で「南浦和尚初住筑州早良興徳禪寺語録」を實際に見聞し跋文を寄せたわけであるが、その際、紹明の語録と嗣法書を海を隔てた杭州の径山興聖万寿禪寺に存した智愚の塔頭天沢庵に奉安せしめることに尽力したものでなからうか。あるいは後に帰国した際に子曇自ら紹明の語録や法嗣書を天沢庵に奉納したのかも知れない。「円通大応国師塔銘」の記事は、史実とはかなり相違するものの、全く荒唐無稽の話でもなかったと見るべきであろう。

京都東福寺の円爾と鎌倉建長寺の蘭溪道隆

行実：観光上邦、及入東府、建長蘭溪、東福聖一、各關散軒、下榻相待

元亨：文永之間、観光上邦、慧峯之爾、福山之隆、關散軒以待之。

東渡：聖一・蘭谿二和尚、敬其德待之甚善、每与二和尚、均關化風。

延宝：慧日聖一、福山蘭溪、弘牀相待

本朝：東福聖一、建長大寛、下榻相待、而以年弱、不董一刹。

稽疑：聖一・蘭谿二和尚、敬其德待之甚善、每与二和尚、均關化風焉。

之關化風焉。

墨蹟：恵日ノ聖一、福山ノ蘭溪、牀ヲ弘テ相待ス。

ついで子曇は西海道を東に上って京都に辿り着いているものらしく、洛東の慧日山東福寺に赴いて円爾（辨円、聖一國師、二〇二—二八〇）と相見している。「大通禪師行実」では「上邦を観光し、東府に入るに及んで、建長の蘭溪、東福の聖一、各おの散軒を關き、榻を下りて相い待す」と記されている。おそらく鎌倉に赴く途上、京都にて暫し留まることになり、この間、東福寺に身を寄せて円爾と面会する機会を得たものであろう。したがって、この点は『元亨釈書』が伝えている「文永の間、上邦を観光するに、慧峯の爾、福山の隆、散軒を關きて以て之れを待す」という表現の方が史実に近いであろう。おそらく子曇は筑前から京都さらに鎌倉へと赴く際に各地の神社や仏閣などを參觀し、日本の風土を見聞しながら遊山玩水の旅を続けたものと推測される。

円爾は駿河（静岡県）の人であり、いつまでもなく入宋して破庵派の無準師範の法を嗣いで帰国しており、当時、京都東福寺の開山として絶大な接化を振っていた。『聖一國師語録』に付される『東福開山聖一國師年譜』の「（文永）八年辛未」の箇所には、

西瀛子曇侍者、自宋而至。師關散軒、下榻相待。曇呈偈、

師即和之曰、絶学道人入帝裏、不随_レ玩水与_二遊山_一、具_レ烹_二飯_一、_レ知是_レ応_レ時破_レ鉄関_一。

として子曇との交流を伝える記事が載せられている。ただ、子曇が日本の地に着岸したのは文永八年ではあつても、直に東福寺において円爾と面談することができたのは、文永九年の夏以降のことであるうと推測される。しかも実際に『聖一國師語録』『偈頌』には、

次_二子曇侍者_一酌。

絶学道人入_二帝裏_一、不_レ随_二玩水与_二遊山_一、具_レ烹_二飯_一、_レ知是_レ応_レ時破_レ鉄関_一。

として同文の偈頌が載せられている。おそらく『聖一國師年譜』を編集した聖一派の鉄牛円心(圓心、一一五四—一三二六)が子曇の来日記事を踏まえて文永八年の項にこの記事を安易に収めたものであろう。「師、散軒を關き、榻を下りて相い待す」の表現は「大通禪師行実」と軌を一にするものである。これによれば、子曇が来日して京都に到つた際、円爾は東福寺の方丈において自ら椅子(禅榻)を下りて子曇を迎え入れたとされる。酌に次ぐとあるから、初めに子曇の詠じた偈頌があり、円爾がこれに和韻したものであることになるが、残念ながら子曇の作が如何なるものであつたのかは伝えられていない。老境にあつた円爾は京都に到つた異国の青年僧であつた子曇を絶学無為の道人と称えており、単なる遊山玩水を

西潤子曇の渡来とその功績(佐藤)

超えたところに子曇のありようを見、すぐれた指導力を發揮する禅者としての資質を認めている。

子曇が京都に留まっていたのはわずかな期間と見られ、まもなく鎌倉に下向しており、山内の巨福山建長寺においても同じ渡来僧の蘭溪道隆から応分の接待を受けたものらしい。道隆は西蜀(四川省)の涪江の人であり、松源派の無明慧性(一一六二—一二三七)に法を嗣いでおり、慧性は子曇の法統の祖である運庵普巖と同門に当たっている。道隆が来日したのは寛永四年(南宋の淳祐六年、一二四六)のことであるから、子曇が生まれる数年前に当たり、このときすでに二五年の歳月を日本禅林で過ごしていたことになる。

ただし、子曇が鎌倉に到つたとき、道隆と具体的に如何なる交渉を持ったのか、残念ながら両者の交流を伝える史料はほかに残されていない。おそらく子曇は執権の北条時宗に謁見する前に、建長寺において道隆と面会して日本の幕府に関する詳細や執権に謁見する仕方などを質しているものと推測される。いずれにせよ、わずか二〇歳代半ばの子曇に対して、老齡の円爾と道隆がともに格別の待遇をなしているのは興味深いものがあろう。

その後、子曇は実際に執権の北条時宗や幕府の要人と謁見しているものと見られるが、「大通禪師行実」にはそのことは何ら触れられていない。しかしながら、おそらく子曇は蒙

古の脅威に脅えていた鎌倉武士に対し、自ら見聞してきた南宋国内の状況や蒙古軍の実態などを具体的に説明したに違いない。国際状況を見据えた子曇の存在は、鎌倉でも重宝されたはずであり、貴重な助言として為政者層に受け取られたことであろう。

また子曇は来日に際して師の惟衍から託された法語一編を時宗に呈したものと見られ、惟衍の人となりや当時の南宋禅林の詳細を説明したことであろう。ときあたかも天童山では惟衍が示寂しており、それに伴って破庵派の環溪惟一（一一二〇—一二八二）が新たに住持に迎えられているが、そうした事情が鎌倉の子曇のもとに伝えられたのが何時であったのかは定かでない。

わずか二三歳で来日を果たした子曇に対して、老齡の円爾や道隆が厚く遇したことは異例ともいえるが、その後の日本禅林における消息については「大通禅師行実」に何も伝えられていない。辛うじて『本朝高僧伝』のみに「而るに年の弱きを以て、一刹を置せず」という記載が存しており、当時の子曇がいまだ二〇歳代という弱齡であったことから、一ヶ寺の住持を勤めるには至らなかつたといふのである。おそらく子曇は日本禅林に在る間、天童山の惟衍のもとを辞去した際の職位をもって「曇侍者」の尊称で呼ばれ、別格の待遇で処せられていたものと見られる。

大休正念との交流と南宋滅亡の知らせ

行実：宋第十六代少帝徳祐二年丙子春二月、北元革^レ宋。

自ら来日の目的を果たした後、子曇が日本国内に留まつて如何なる活動をなしていたのかは定かでないが、建長寺や円覚寺などにおいて同じ松源派の大休正念のもとに身を寄せていた可能性も存している。『大休和尚語録』の「大休和尚偈頌雑題」には、

和「曇侍者見寄韵」。

巨福東南八吉祥、叢林氣概冠^レ諸方、素知下榻寶筵穩、喜得盟
鷗機事忘。陶壁寒梭終破^レ蟄、豊城宝剣豈埋^レ光、厥躬道在^レ深
藏密、会见時亨理自彰。

又和「弔鷗韵」。

剝腹曾因吞^レ却珠、傷^レ身縁為^レ頸能書、可^レ怜強項遭^レ殃禍、争
似^レ潜淵驚^レ鯨魚。

という曇侍者すなわち子曇と交わした偈頌二首が伝えられている。正念は温州（浙江省）永嘉県の出身で、南宋の嘉定八年（一二二五）の出生であるから、子曇より三五歳の年長に当たつており、曹洞宗宏智派の東谷妙光（？—一二五三）に参じて後、松源派の石溪心月の法を嗣いでいる。心月は掩室善開の高弟であり、善開は普巖や慧性と同門に当たつており、法嗣には正念のほかに日本から入宋した無象静照（法海禅師、

一二三四 一三〇六) が存している。

母国の状況がきわめて不安定な中で同じ浙江出身の僧(浙僧)の後輩と知り合えたことは、正念にとつても心強いものが存したはずであろう。最初の偈頌は子曇が寄せた作に和韻したものであり、建長寺における消息であるらしい。つぎの偈頌は鵲が亡くなったことに因んだ子曇の作に正念が和韻したものである。この点でも子曇の作が如何なるものであったのか伝えられていないのが惜まれる。

この間、文永二年(一二七四)一〇月には第一次の元寇(蒙古襲来)すなわち文永の役が勃発している。この年は元の至元十一年に当たるが、一〇月三日に元と高麗の連合軍は高麗の合浦(慶尚南道)を出発し、五日には対馬(長崎県)に上陸し、一四日には吉岐(長崎県)を攻略している。さらに連合軍は一〇月二〇日には筑前(福岡県)の博多湾に侵入し、日本軍は苦戦を強いられたわけであるが、翌朝未明に起つた大風雨によつて連合軍の艦隊は大打撃を受け、博多湾から撤退している。この大惨事を鎌倉に在つた子曇がどのように静観していたかは興味深いところであるが、残念ながら伝記史料には何ら記されていない。

さらに南宋の徳祐二年(景炎元年、一二七六)に元が南宋を實質的に滅ぼしており、このときの元の年号は至元十三年に当たっている。「大通禪師行実」には、「宋第十六代少帝の徳

祐二年丙子春二月、北元、宋を革む」と記されており、元朝が徳祐二年に南宋を制圧した消息を特筆している。

この点、興味深いのは『増補続史料大成』第一〇巻や『続群書類従』第三輯に収められている『建治三年記』の「六月」の箇所に、

八日、晴。宰府脚力参着、宋朝滅亡、蒙古統領之間、今春渡宋之商船等、不及交易、走過、云々。

という記事が存していることであろう。建治三年(一二七四)六月に大宰府よりの報によつて鎌倉の幕府は宋朝が滅亡し、蒙古(元)が中国を統治した消息を知つたとされ、この年の春に南宋に赴いた日本商船も交易を果たせずに日本に戻つたことを伝えている。建治三年は南宋の景炎二年に当たり、元の至元十一年のことであるが、この年に幕府は明確に南宋の命運が尽きたことを認識したものであろう。おそらく元が南宋を征圧したという情報を子曇もこのとき逸早く入手したものと見られ、俄に故国に帰る意を決したのではなからうか。

元への帰国と天童山の蔵主

行実…師歴於八白、弘安元年戊寅、再回元朝。世祖老皇帝至元十五年也。至天童、環溪一公、命師俾職蔵教。年三十

一也。
元亨…経数祀而帰

東渡：歴八年帰寓天童。

延宝：弘安戊寅、返元。依環溪於天童、典蔵論。

本朝：弘安戊寅、巻衣帰元。依天童環溪和尚、主司蔵論。

稽疑：留日国、中間七年、往来俱九年、而帰元国。後宇多院弘

安二年己卯歳也、即当太元世宗至元十六年、南宋第九主

衛王祥興二年也。輒寓於天童。

墨蹟：弘安戊寅、元二返テ、環溪二天童二依テ、蔵論ヲ典ル。

最初の渡来から子曇が日本に留まっていた期間は八年間であったとされ、弘安元年（一二七八）すなわち元の至元一五年（南宋の祥興元年）に帰国の途に着いているが、このとき子曇はようやく三〇歳に達している。ちなみにこの年の七月二四日に久しく鎌倉禅林にあつて大きな精神的支柱であつた渡来僧の蘭溪道隆が六六歳の生涯を終えているが、子曇が帰国の途に着いたのはそれ以前の春か夏のことであつたと見られる。

ところで、「大通禪師行実」では「師、八白を歴て、弘安元年戊寅、再び元朝に回る。世祖老皇帝の至元十五年なり」とあり、『東渡諸祖伝』以降の史料も元国に帰つたとする点で一致している。ただし、『二十四流稽疑』のみは子曇が渡来と帰国の期間を含めて日本に滞在していたのを前後九年間とし、帰国を一年遅い弘安二年（元の至元一六年）であつたと伝えているが、「大通禪師行実」など諸史料が等しく伝え

る弘安元年（元の至元一五年）をもつて帰国の年とすべきである。

ちなみに『二十四流稽疑』は大応派（大徳寺派）の小心義統（一六五七—一七三〇）の『二十四流圖書伝』を引用して、

西瀨子曇、台州黃氏。文永八年東渡、弘安二年帰宋。正安元年再来、住円覚建長等。諡大通禪師。

という記事載せており、さらに「義統所撰二十四流図校讀」において、

西瀨子曇書伝、作弘安二年帰宋者、失考也。作帰元、則可也。号元朝者、宋咸淳七年辛未、韃靼国建元号大元、取周易乾元之義、以明資始之功。具見統宋通鑑。七年辛未、当国朝八十九主龜山院文永八年也。

と註している。韃靼とは蒙古族のタタールの音写であり、南宋の咸淳七年（一二七二）に正式に大元（元朝）という国号を用いたと解している。子曇は故国に帰つたわけであるが、すでにこのとき中国の地はほぼ元朝によって征圧されており、したがつて、『二十四流稽疑』では「帰元」とすべきである点を強調している。ちなみに「大通禪師行実」や「延宝伝燈録」「本朝高僧伝」などは、いずれも元朝に帰つたことを明記している。

では、故国に帰国した直後、子曇は元朝治下の中国江南に

あつて如何なる活動をなしていたのであろうか。子曇は直ちにかつて修行した明州の天童山景德寺に上山したものでなく、その目的はおそらく天童山に存した本師石帆惟衍の塔頭である堆雲菴に身を寄せることであつたものと見られる。また後に触れるごとく至元一六年（南宋の祥興二年、一二七九）の春には郷里の台州仙居県にまだ健在であつた老母を訪ねる機会も存し、久々に母との再会を果たして天童山に戻つてゐるものらしい。

しかも「大通禪師行実」では「天童に至るに、環溪一公、師に命じて藏教を職らしむ。年三十一なり」と記しており、『延宝伝燈録』と『本朝高僧伝』も同様の消息を伝えている。これらによれば、子曇は天童山において無準師範の法嗣である環溪惟一のもとに投じて藏主の要職を命ぜられてゐることが知られ、年齢が三十一歳とあるから、至元一六年四月の夏安居には子曇は天童山の藏主を勤めていたわけである。

惟一の子曇が天童山の惟衍のもとを去つて日本に赴いた後、惟衍の後席を継いで天童山に住持した禅者であり、南宋末元初の厳しい動乱期を火災などの試験を経ながら長年にわたつて住持として伽藍を維持することに努めていたのである。天童山の惟一のもとには至元一六年の夏に日本の北条時宗が蘭溪道隆の高弟であつた大覚派の傑翁宗英と無及徳詮の二禅者を元朝治下に遣わして禅僧招聘の依頼をなしてい

る。円覚寺に所蔵される控えの文書によれば、時宗が天童山に宛てた書簡とは、

時宗、留_レ意宗乘、積有_二年序_一、建_レ普梵苑、安_二止繡流_一。但時宗每憶、樹有_二其根_一、水有_二其源_一。是以欲_レ請_二宋朝名勝_一、助_レ行此道。煩_レ詮英二兄_一、莫_レ憚_二鯨波險阻_一、誘_レ引俊傑禅伯、歸_二來本國_一為_レ望而已。不宣。

弘安元年戊寅十二月廿三日、時宗和南

註藏主禪師。

英典座禪師。

というものであり、日本の弘安元年（一二七八）二月二三日の日付けで時宗が二禅者に宛てた内容となつてゐる。藏主の宗英と典座の徳詮の二禅者が入元して天童山に到つたのと、これに一年先んじて子曇が帰国して天童山で藏主を掌つてゐる事跡が全く無縁であつたとは見がたい。おそらく子曇は帰国に際して北条時宗より何らかの委託を得て天童山に戻つたものと見られ、ある程度の事前交渉を経ていた上で、宗英・徳詮を迎え入れているのかも知れない。

これを受けて天童山の惟一のもとで首座を勤めていた同じ無準下の無学祖元（子元、仏光国師、一一二六—一一八六）が選ばれて日本に向かうことになり、惟一の高弟で祖元の法姪に当たる鏡堂覚円（大円禪師、一一四四—一三〇六）がこれに随行してゐる。このとき子曇は天童山の藏主としてその動向を

傍らで見届けていたことである。つし、あるいは日本に向かう年長の祖元や覚円らに対して日本国内の状況を説明するようなことも存したかも知れない。

ただし、『仏光国師語録』や『鏡堂和尚語録』を通してこの時期の祖元や覚円が子曇と直接に関わりを持ったことを伝えるような記載は見られない。ちなみに、『環溪和尚語録』巻末に付される「行状」によれば、至元一六年の冬に惟一は老病を理由に住持を退いており、至元一八年（一二八一）九月四日に世寿八〇歳で示寂している。おそらく子曇が惟一のもとに留まっていたのも至元一六年の解制（七月一五日）の後まもない頃までであり、その後、天童山を辞して杭州へと旅立つたものと推測される。

浄慈寺寓居と日本への四通の書簡

ところで、「大通禪師行実」をはじめとする伝記史料には何らの記載も存していないが、天童山を辞した子曇は杭州の浄慈寺に赴いているものらしい。この間の子曇の消息を伝える史料として、東京都世田谷区上野毛の五島美術館には、重要文化財に指定されている子曇の「与夢庵尺牘」が所蔵されている。その全文を示すならば、つぎのようなものである。

子曇、頓首再拜。夢庵知藏尊道契禪師足下。子曇、奉別顔色。転眼三春、未嘗（無脱力）思慕中山同守寂寥之時也。

近者想、道體清勝、奉待令師和尚、無諸難事。子曇、去歲起天童、帰浄慈住。幸粗安、朝夕禪誦之餘、絶無它念。去秋之船、風波不定、只有兩隻到。及問、乃皆他処之人、不知上方之事。中間薄聞、上刹新建、仏堂、縁法極殊勝。甚為可賀。此豈非令師道德所感而然、尤且敬羨。寂庵兄、今在何処。中間有聞説、南殿出於他処。果然否、皆不得実信。去歲、送仏僧回、曾附寂庵書。不知已到否。近日、関東何事哉。此間、天童・育王、皆為火廢。所幸者、自己皆不見此境界。極為可惜可歎。今後卒難成就也。浙東氣象、蕭索不如旧日。子曇老母尚在。去春已曾一帰省謁。今後心意皆滿。若上國之人無相恻意、明後年当求見參以畢此世。為令師東巖和尚法門友弟、不復有再帰之願也。但恐、縁法已尽、則無奈何也。偶便率此布糸、深愧不端。未拜面間。尚冀為法門無尽功德海之舟航、広度未濟。是所請禱。不宣。

二月十日、寓臨安浄慈、子曇、頓首再拜。

この「与夢庵尺牘」一幅は、帰国して間もない頃に子曇が如何なる活動をなしていたかを窺う上できわめて貴重な史料であることから、つぎに書き下し文も示しておきたい。

子曇、夢庵知藏尊道契禪師の足下に頓首再拜す。子曇、顔色に奉別し、眼を転すること三春、未だ嘗て中山にて同じく寂寥を守るの時を思慕すること無きにあらざるなり。近ごろは想う、道體清勝にして、令師和尚に奉侍して諸の難事無かりしことを。

子曇、去歲、天童を起ち、淨慈に歸りて住す。幸いに粗ば安らかにして、朝夕禪誦の餘、絶えて它念無し。去秋の船、風波定まらず、只だ兩隻の到ること有るのみ。問うに及んで、乃ち皆な他処の人にして、上方の事を知らず。中間に薄か聞く、上刹に新たに仏堂を建て、緣法極めて殊勝なりと。甚だ質すべきと爲す。此れ豈に令師の道德の感ずる所に非ずして然らんや。尤も且つ敬養せん。寂巖兄、今は何処に在りや。中間に聞説くこと有り、南殿は他処に出づると、果して然りや。皆な実信を得ず。去歲、仏僧の回るを送るに、曾ち寂巖に書を附せり。知らず、已に到れるや。近日、関東は何事ぞや。此の間、天童・育王、皆な火の爲めに廢す。幸う所は、自ずから已んで皆な此の境界を見ざらんことを。極めて爲めに惜むべし、歎くべし。今後、卒に成就し難きなり。浙東の氣象、蕭索にして旧日の如くならず。子曇が老母尚お在り。去春、已に曾て一たび歸りて省觀す。今後は心意皆な滿つ。若し上国の人、相い恠しむ意無ければ、明後年、当に見參することを求め、以て此の世を畢るべし。令師東巖和尚の法門の友弟の爲めに、復た再び歸えるの願い有らざるなり。但だ恐れらくは、緣法已に尽き、則ち奈何ともする無きことを。偶たま便ち此の布糸を率め、深く不端を愧じ、未だ面問を拝せず。尚お冀わくは、法門無尽功德海の舟航と爲り、広く未済を度せんことを。是れ請い禱る所なり。不宣。

西澗子曇の渡來とその功績（佐藤）

二月十日、臨安の淨慈に寓する子曇、頓首再拜す。

この尺牘は某年二月一〇日に日本の夢庵、契に宛てて書されたものであるが、「顔色に奉別し、眼を転ずること三春」とあるから、子曇が夢庵契と別れてから三年目の春を迎えたことが知られる。おそらく子曇は至元一六年の解制を経て蔵主の職を辞し、秋には天童山を去つてゐるものと見られる。とすれば、この尺牘は至元一七年（一二八〇）二月一〇日に記されたものと見るのが自然であり、子曇が夢庵契と別れたのは日本の弘安元年（建治四年、一二七八）であつたと解するべきであろうか。したがつて、子曇は至元一六年の秋には天童を起つて杭州の淨慈寺に移つて寓居してゐたことにならう。淨慈寺もかつて子曇が修行に參學した有縁の地であり、建物の名稱こそ伝えられていないが、やはり淨慈寺にも南宋末期から元代にかけて惟衍ゆかりの塔頭が存したものと見てよいであろう。

ところで、夢庵契に宛てた書簡の中で「令師東岩和尚」とあるのは、宗寛派（元庵派）の東巖慧安（宏寛禪師、一二二五—一二七七）のことであり、夢庵契はその慧安の門人であつたものと見られる。慧安には長編の伝記史料として「東巖安禪師行実」が存しており、播磨（兵庫県）の人で、同国の書写山円教寺で天台教学を学んだ後、禅宗に転じて入宋を志したが、太宰府で破庵派の悟空敬念（一二二七—一二七二）のも

とに投じ、破庵派の兀庵普寧（宗寛律師、一一九八—一二七六）が渡来すると、建長寺で参学して法を嗣いでいる。普寧は西蜀（四川省）の人で、東福寺の円爾などと同じく無準師範の法を嗣いだ高弟であり、正元二年（文応元年、南宋の景定元年、一二六〇）に日本に渡来し、執権の北条時頼の参禅の師となつたことで知られる。しかし、その後、普寧は時頼が逝去したため、文永二年（南宋の咸淳元年、一二六五）に南宋に帰国している。一方、文永五年（一二六八）に慧安は京都の今出川に一寺を創建したが、比叡山の衆徒によって伽藍が破却されたため、その後、鎌倉に下向して福光山聖海寺に住持し、建治三年（一二七七）十一月三日に世寿五三歳で示寂している。おそらく子曇は帰国するまでの間に鎌倉において慧安や夢庵契らと知遇を得、かなりの交遊が存したものである。また寂庵兄とは『兀庵和尚語録』巻中の「住巨福山建長興国禅寺語録」を道昭・景用とともに編した寂庵禅了のことである。『兀庵和尚語録』巻下「序跋」に「跋了侍者頌軸」が存し、また『清拙和尚語録 日本』の「題跋」に「跋了寂岩回日本頌軸後上」が存している。禅了は入宋して明州鄞県東南の大慈山教忠報国禅寺において大慧派の大川普濟（一一七九—一二五三）に参じて帰国し、さらに建長寺で兀庵普寧に参じて侍者になつており、あるいは普寧の法を嗣いでいるのかも知れない。禅了のその後の消息は定かでないが、

禅了は子曇より二〇歳以上は年長と見られ、子曇が日本に在る頃に禅了と知り合つ機会を持ち、「寂庵兄」と慕つていたことが知られ、書簡では禅了の消息を尋ねている。しかも前年には日本に帰る僧に託して禅了に宛てた書簡も認めたことを記しているから、おそらく祖元・覚円らが日本に向かう際、子曇は帰国する日本僧の宗英と徳註に禅了への書簡を託したものである。

また、書簡の中に記されている南殿とは、時期的に六波羅探題南方を勤めていた北条時国（相模式部大夫、親縁、一二六三—一二八四）のことを指しているものらしく、時国は建治元年（一二七五）に祖父の北条時盛（勝円、一一九七—一二七七）とともに上洛し、年少にして六波羅探題南方に就任している。子曇はおそらく帰国に際して京都を経て若い時国らと何らかの関わりを有したのではないかと見られるが、その間の詳細については定かでない。子曇は書簡の中で「南殿、他処に出づと、果たして然りや否や」とその安否を尋ねている。その後、時国は弘安七年（一二八四）六月に鎌倉に呼び戻され、常陸（茨城県）伊佐郡に配流となつて同年一〇月に誅殺されている。

また夢庵契に宛てた書簡によれば、子曇にはこのとき老母がなお健在であつたことが知られ、書簡を書く前年の春に郷里台州仙居県に帰省して母と会つたことを述べている。子曇

の父方は黄氏の出身であるが、母に関しては俗姓が何であったのか、「大通禪師行実」をはじめ諸伝ともに伝えていない。出家受戒した子曇が郷里を離れたのは一〇歳代半ばのことであり、日本に向かったのは二三歳のときであるから、母とは一〇数年ぶりの再会であったことにならう。異境日本の地に赴いた子曇にとって再び会えないものと覚悟していたであろう母との再会がよほど嬉しくも懐かしいものであったことは、子曇の「今後は心意皆な満つ」のことは十分に察することができる。

一方、『聖一國師語録』に付される『東福開山聖一國師年譜』の「弘安元年戊寅」の条によれば、

師七十七歳。西潤曇侍者、歸宋國、後寓淨慈。上書於師曰、子曇、遠蒙慈庇之及、衆底粗安、寧忘所自耶。每惟和尚、道德貫充、權衡八表、天上人間、咸霑利益。末世大法橋梁、捨和尚而誰耶。鑽仰有所不及、子曇自惜、不獲久依座下、以親光明盛事、為不滿耳。近伏想、尊体安佳、諸緣殊勝。賤跡去秋、起天童、歸淨慈、住。嘗遊無準老和尚塔頭、菴宇一新、亭道華麗、極為可觀。自非和尚作成之、奚及此耶。非私意言之、而衆人皆合辭贊嘆。去歲、道意房回、曾伸起居一書、以述百千謝忱。諒已奉徹左右。茲偶人回、擊楫略布草率、以詞万一。未拝面問、尚祈、広施法雨、普潤含生、寿仏慧燈、永燭昏暗。

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

として帰国した子曇が円爾に寄せた書簡の抜粋が載せられている。便宜上、この子曇の書簡の部分も書き下しておくことにしたい。

子曇、遠く慈庇の及ぶを蒙り、衆底にては粗ば安らかなりし、寧んぞ自る所を忘れんや。毎に惟う和尚、道德貫充し、八表を権衡し、天上・人間、咸な利益に霑わんことを。末世の大法橋梁、和尚を捨てて誰あらんや。鑽仰しても及ばざる所有り。子曇自ら惜しむ、久しく座下に依りて以て光明の盛事を觀るを獲ざることを。不満と為すのみ。近ごろ伏して想う、尊体安佳にして、諸緣殊勝ならんことを。賤跡、去秋、天童を起ち、淨慈に歸りて住す。嘗て無準老和尚の塔頭に遊ぶに、菴宇は一新し、亭道は華麗にして、極めて觀るべきと為す。和尚の之れを作成するに非ざるに自らば、奚んぞ此れに及ばんや。私意にて之れを言うに非ず。而して衆人皆な辞を合わせて贊嘆せり。去歲、道意房回れば、曾て起居を伸ぶる一書にて、以て百千の謝忱を述べたり。已に左右に奉徹せるを諒る。茲に偶たま人回れば、楫を撃り、略ぼ草率を布べ、以て万一を詞わん。未だ拝面せざる間、尚お祈る、広く法雨を施し、普く含生を潤し、仏慧の燈を寿ぎ、永く昏暗を燭されんことを。

これは弘安元年（南宋の景炎三年、元の至元一五年、一一七八）に子曇が帰国した記事に付されているため、如何にも弘安三年の書簡のように見られがちであるが、その後、淨慈寺に寓

した際に子曇が日本の円爾に上つた書簡である。おそらく至元一七年（日本の弘安三年、一一八〇）の日本への使いに託して東福寺の円爾に宛てたものであつて、時期的には夢庵契に宛てた先の書簡と同じ二月の頃に書されたものと見られる。

円爾は弘安三年二月の初めに微疾を生じ、一〇月一七日に生寿七九歳で示寂していることから、子曇が遠く元の国から送つた書簡を辛じて読むことができたものと見られ、かつて東福寺にはその書簡が所蔵されていたものである。

書簡の中で子曇は在日中における円爾の恩に感謝し、その道体堅固を願っている。また前年の秋に天童山を辞して杭州の浄慈寺に寓居したこと、その際に杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に上り、無準師範の塔頭である正統塔院を訪れたことを述べており、その現状を語るとともに、塔院建立におけるかつての円爾の功績を称えている。

一方、この書簡によれば、この前年に道意房という僧が日本に帰る際にすでに最初の円爾宛ての書簡を託したことが知られる。ここにいう道意房とは蘭溪道隆の門人のひとり道意のことと見られ、弘安元年七月より以前に入元し、翌年五月より以降に帰国の途に着いているものらしく、円爾への書簡とともに先の寂庵禅了に宛てた書簡もこの人が子曇から託されたのであろう。

帰国した子曇が杭州の径山に上山した当時は松源派の虚舟

普度（一一九九—一二八〇）が至元一四年（一二七七）より住持を勤めていたが、『虚舟和尚語録』巻末に載る大慧派の元叟行端（慧文正辯仏日普照禅師、一二五五—一三四一）が撰じた「行状」によれば、

至元丁丑、被命径山。山中大火滌地之餘、竭心極力、圖興復、方将有成、俄示微恙。遽索筆大書曰、八十二年、駕無底船、飄飄掃去、明月一天。怡然跌坐而化。実庚辰四月二十有四也。

と記されている。普度が住持してまもなく径山が大火に見舞われたことが知られ、これを復興せんと尽力した普度はやがて体調を崩して病氣となり、至元一七年四月二十四日に八二歳の生涯を終えている。子曇が径山に到つた当時、すでに大伽藍は焼失していたことになるが、子曇の書簡には老齡の円爾の気持ちを配慮してかそのことが何ら記されておらず、無準師範の万年正統院が立派に残っている消息のみが語られている。その後、径山を復興するのが大慧派の雲峰妙高（一一一九—一二九三）であり、後に子曇は径山の妙高のもとで首座に就くことになる。

このように子曇は帰国してまもない間に円爾に二度の書簡を送り、さらに寂庵禅了と夢庵契の二人にも書簡を送っているのであつて、実に四通の書簡を日本に向けて認めていたことになり、この頃、日本との関わりを重視していたことが知

られる。

ところで、子曇が杭州錢塘県の淨慈寺に赴いて寓居した際、住持を勤めていたのは松源派の石林行鞏（一一三〇—一一八〇）であり、子曇はそのもとに身を寄せたものらしい。淨慈寺はかつて子曇が惟衍に参学して印可を得たゆかりの地であり、あるいはこのとき子曇は淨慈寺に存したであろう惟衍の塔所に寓居していたのかも知れない。行鞏の師は天目文礼（滅翁、一一六七—一一五〇）であり、子曇の法祖蓮庵普巖と同門に当たっている。

行鞏の語録である『石林和尚語録』巻上「臨安府淨慈報恩光孝禪寺語録」に、

謝「曇首座至上堂。舉「南泉住」庵時、因「僧到。泉云、某甲上」山作務。請「齋時作」飯自喫了、却送「一分」来公案。師云、者僧克由耐耐、既壞「人家生」、又臥「人牀榻」。苟非「南泉有」容、者僧要「起去」未「得在」。

という上堂が存している。ただし、この上堂がなされたのは上堂語の編成からして子曇が淨慈寺に寓居するよりも早い時期のことと見られ、また子曇はいまだ首座には就いていないことから、ここにいう曇首座は子曇とは別人と解するべきであるうか。その後の数年間に及び子曇の活動の消息は定かでないが、おそらく淨慈寺を中心に五山などの大刹で何らかの要職を歴任していたものと推測される。

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

郷里仙居県の紫巖山殊勝院への出世

行実…二十三年丙戌、出「世台之受經紫岩」、焼香証「石帆之乳。師年三十有八也。

東渡…至元丙戌二十三年、出「世台之紫岩」、瓣香嗣「石帆」。

延宝…瑞「世台之紫岳」、然香統「石帆之法船」。

本朝…至元二十三年、出「世台州紫巖」、嗣香供「石帆」。

稽疑…至元二十三年丙戌、出「世台之紫岩」、瓣香供「于石帆衍公」。

墨蹟…台ノ紫岳ニ瑞世ス。然香、石帆ノ法焰ヲ統グ。

帰国して八年の歳月を経過した至元二十三年（一一八六）に、子曇は漸く出世開堂の機会に恵まれている。「大通禪師行実」によれば、

二十三年丙戌、台の受經の紫岩に出世し、焼香して石帆の乳を証す。師、年三十有八なり。

と記されており、『東渡諸祖伝』「本朝高僧伝」、『二十四流稽疑』が同じく年時を伝え、『延宝伝燈録』と『墨蹟祖師伝』も年時は記していないものの、同様の記事を載せている。受經とは經典の教義などを受けることであり、弟子が師匠から經典の教えを学ぶことであるから、ここでは出家得度して後、初めて仏教の教えを本格的に学んだ寺院のことを指しているう。ただ、「大通禪師行実」をはじめとする諸伝が、いずれも「紫岩」または「紫巖」「紫岳」と記し、「紫籜」ではない

点が問題ではあり、おそらく子曇が開堂出世したのは、受業寺である紫籙山広度禅寺とは別に仙居県内に存した寺院であったと解するべきであろう。

清代の『光緒僊居志』巻二「地里志」の「叙山上」には、

紫巖山、在「県西南七十里」案当作八十里。土石紫色、一名「鷄冠巖」。

という記載があり、仙居県西南七〇里または八〇里に紫巖山が存しており、土石が紫色であることに因み、一に鷄冠巖とも称されている。また同じく『光緒僊居志』巻三「雑志上」の「寺観 寺院」によれば、

殊聖院。赤城志、作「殊勝」、入「禅院」。鄭志、作「殊聖教院」。
 県西北五十里九都紫巖山麓。鄭志。赤城志、作「県西」。按俗呼「紫巖寺」。旧名「奉国」。宋治平中、改「今額」。紹興九年重建。赤城志。明永業間、僧以「事詔獄」、寺奉廢。康熙戊午、庠生張相維、覽「巖壑幽奇」、請「於官」、僧梅芳重建。助「田二十畝」、為「香燈資」。

とあり、紫巖山に存した殊聖院（もと殊勝院）の変遷が記されている。ちなみに古く南宋代の『嘉定赤城志』巻二九「寺観門三 寺院」の「僊居」には禅院として、

殊勝院。在「県西北五十里」、旧名「奉国」。紹興九年重建。治平中改「今額」。

と記されており、おそらくこの紫巖山の殊勝院こそ子曇が初

めて開堂出世した禅寺であろうと見られる。ただし、紫巖山が県の西南七〇里にあるとされるのに対し、殊勝院が県の西北五〇里ということになると、地理的にかなり隔たっていることになり、その間の事情が定かでない。おそらく紫巖山が覚えていた山麓のもつとも北側の一角に殊勝院が位置していたものであるうか。古くは奉国院と称していたが、北宋の治平年間（一〇六四—一〇六七）に殊勝院と改められ、紹興九年（一一三九）に重建されている。また『嘉定赤城志』巻一四「版籍門二 寺観」の「僊居県」によれば、

殊勝院。田 二百九十七畝。地 九十六畝。山 一百三十四畝。

と寺産として宋代に所有していた田地・山林に関しても記載が存しているが、常住田が二九七畝、境内地が九六畝、山林が一三四畝となっているから、それほど広大な伽藍ではなかったものと見られる。ちなみに子曇より後のことながら、『増集統伝燈録』巻六「台州万年横江浩禅師」の章によれば、松源派の横江 浩は台州路仙邑（仙居県のことか）東溪の鄭氏の出身で、松源派の東嶼徳海（双清、明宗憲忍禅師、一一五六—一一三七）の法を嗣いだ後、紫巖山の殊勝院に出世開堂したことが知られ、その後、台州天台県の天台山中の平田万年報恩光孝寺に遷住している。

子曇が殊勝院に住持として開堂入院したのは至元二三年の

ことであり、年齢も三八歳に達していたのである。子曇が天童山の惟衍のもとを辞して日本に向かったときから数える、すでに一五年という歳月が経過していた計算になる。殊勝院に開堂出世した際に子曇は初めて嗣承香を石帆惟衍に炷いており、松源派の禪者としてその活動を開始している。

ちなみに至元二三年は日本の弘安九年に当たっており、この年九月三日に破庵派（仏光派祖）の無学祖元が鎌倉の地で瑞鹿山円覚興聖禅寺の開山として世寿六一歳の生涯を終えている。天童山の環溪惟一のもとで子曇らと別れて至元一六年に日本へと向かってから、僅か八年後に祖元は日本に骨を埋めたわけである。この間、元朝は日本に対して第二次の遠征を決行しており、世に弘安の役と称される蒙古襲来がなされているが、日本から帰国した子曇がそうした惨状をどのような気持ちで静観していたのかを思うと、推して余りあるものがある。

子曇が殊勝院に住持していたのは四年間であつたとされるから、それほど長い期間ではなかつたが、仙居県において暫し平穩の中で郷里の人々に仏法を説く機会に恵まれていたわけである。江戸期にまとめられた『正誤宗派図』四によれば、「天童石帆惟衍」の法嗣として、「日本建長西禪子曇」のほか、「浄慧平洲義隆」「浄恵不開因」の名が見られる。子曇と同門に当たる平洲義隆と不開 因が住持した浄慧寺とは、お

そらく台州天台県西九〇里の天台山中の蘆峰に存した天台十大刹の一つ浄慧禅寺（古くは宝慈寺）のことであろう。したがって、当時、台州地域には子曇を含めて数名の禪者が惟衍の法嗣として松源派の法燈を掲げていたわけである。

雲峯妙高と径山興聖万寿寺の首座

行実…居四載、弘衣入古杭。二十六年己丑、径山雲峯高公、延
版板首。

東渡…一坐四白、弘衣入古杭。径山雲峯高和尚、延首衆説法
本朝…一住四載、弘衣入杭。径山雲峯和尚、招帰首座。

稽疑…一坐四白、弘衣入古杭。

郷里の紫巖山殊勝院に住持すること四年にして、子曇は住職の座を退いて杭州へと旅立っている。「大通禅師行実」によれば、

居ること四載にして、衣を払って古杭に入る。二十六年己丑、
径山の雲峯高公、延へて板首に版す。

と記されており、『禅林諸祖伝』本では「延版」となっているところが、『禅林僧伝』本では「迎帰」と字句が相違している。この点は『東渡諸祖伝』では「一たび坐すること四白にして、衣を払って古杭に入る。径山の雲峯高和尚、延へて衆に首として説法せしむ」とあり、『本朝高僧伝』も「一たび住すること四載、衣を払って杭に入る。径山の雲峯和尚、

招いて首座に帰せしむ」と伝えており、いずれも年時を記さないものの、「大通禪師行実」の内容を継承している。これらによれば、子曇が紫巖山殊勝院に住持していたのは四年間であつたことが知られ、おそらく至元二六年（一二八九）の春の頃には住持を退き、その年の夏安居の始まる四月一五日より以前には杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に上山し、大慧派の雲峰妙高（夢池、一一一九—一二九三）のもとで制中の首座に就任しているものと見られる。

妙高は福州（福建省）長溪県の出身で儒者の家に生まれているが、しだいに仏典に耽るようになって出家し、破庵派の無準師範らに参じた後、大慧派の偃溪広闡（仏智禅師、一一八九—一二六三）のもとで法を嗣いでいる。諸刹を歴住して後、建康府（南京）の蒋山太平興国禅寺を経て杭州の径山の第四三代住持に迎えられている。径山はいうまでもなく禅宗五山の第一位の名刹であり、妙高は松源派の虚舟普度（一一九九—一二八〇）の後席を継ぐかたちで元代最初期に住持として化導を敷いている。

『統伝燈録』卷三六「杭州径山雲峰禅師」の章によれば、至元庚辰、遷径山、寺権回禄、草創纒什。師究心興建、不十年、悉還旧觀。戊子春、魔事忽作、有譜毀禅宗者。師嘆曰、此宗門大事、吾当忍死争之。遂趨京、有旨集諸宗徒、延辨上問、禅以何為宗。師奏、淨智妙円体本空寂、非見

聞覚知思慮分別所能到。宣問再三、師歷拳、西天東土諸祖、以至德山臨濟禪喝因緣大抵。禅是正法眼蔵涅槃妙心、趨最上乘、孰有過於禅。詞指明頭、餘二千言。又宣、進榻前与諸者、反復論難、譜者辞屈。上大悅、禅宗安堵如初。陸辭南帰。

という妙高に関する興味深い記事が載せられている。妙高が径山に住持したのは至元一七年（一二八〇）のことであるが、すでに触れたごとく径山の大伽藍は普度の代に火災によって大伽藍の大半を失っている。妙高は径山入寺とともに直ちに復興に尽力し、一〇年を経ずして伽藍を旧觀のごとくに復興したとされる。そんな中で至元二五年（一二八八）の春に、元の都である大都（いまの北京市）で禅宗を誹謗する者が現れたとされる。妙高はこれを宗門にとつてきわめて深刻な大事と受け止め、論争を挑むべく大都に向かったものらしい。大都に到つた妙高は世祖フビライ（忽必烈、一二二五—一二九四、在位は一二六〇—一二九四）の前で諸宗の徒と論争を展開し、禅の要諦を示して彼らを打ち負かしたと伝えられる。妙高のはたらきによつて禅宗はもとのように安堵を得、妙高はフビライのもとを辞して径山に帰山したのである。

ときあたかも子曇が妙高に招かれて径山の首座（板首）に就任したのは、この事件の翌年のことであり、子曇は首座として住持の半座を分かつて径山の修行僧（大衆）に説法をなしたとされる。フビライの信認を得た妙高のもとで、日本帰

りの子曇が一山の大衆に対して如何なる普説をなしたのかは定かでないが、おそらくこのときの普説は子曇にとつて径山第一座の輝かしいできごとであつたはずである。

ところで、『統伝燈録』卷三六「杭州径山雲峰禪師」の章によれば、

径山復次。師謂衆曰、吾夙負此山債耳。遂竭力再普建。匪殿坡為池、他屋以次落成。癸巳六月十七日、書偈而逝。

と記されており、その後、径山は再び火災に見舞われている。これが子曇が径山に留まっていた時期のことなのか、子曇が径山を去つて後の消息なのか否かは定かでないが、妙高は「吾れ夙に此の山の債を負わんのみ」と山内の大衆に告げ、自らに課せられた最後の責務として再び復興に尽力したといつのである。ちなみに径山の妙高のもとには仙居県の柴氏の出身である本源善達が参学しており、ほかにも一深自如・惟石大奇・古智慶哲および龍巖 真などすぐれた人材が育成されている^③。再建を果たし終えた妙高は至元三〇年（一二九三）六月一七日に世寿七五歳で示寂している^④。

南嶽天柱寺への遷住

行実：「解職遊嶽」。二十七年丙寅、董潭之天柱。

東渡：「職滿杖錫遊嶽、領潭之天柱。」

延宝：「董潭之天柱。」

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

本朝：「職解遊嶽」。丙寅 丙寅恐庚寅之誤 董潭之天柱。
墨蹟：「潭ノ天柱ヲ董ス。」

径山で首座の要職を勤め終えて後、子曇は雲峰妙高のもとを辞している。「大通禪師行実」によれば、

職解けて嶽に遊ぶ。二十七年丙寅、潭の天柱を董す。

と記されており、『東渡諸祖伝』では「職滿ちて錫を杖して嶽に遊び、潭の天柱を領す」とあり、とりわけ「本朝高僧伝」では「大通禪師行実」をそのまま受けつつも「職解けて嶽に遊ぶ。丙寅 丙寅は恐らく庚寅の誤り に潭の天柱を董す」と注を付けて伝えている^⑤。

これらによれば、子曇は首座の任期を無事終了すると、錫杖を手にして行脚し、嶽に遊歴したとされる。嶽とはつきに触れることく具体的には南嶽のことを指しており、元朝によつて全土が平定され、ようやく平安が訪れた湖南の地に子曇は歴遊していることが知られる。おそらく若くして日本に赴いた子曇は、江西・湖南の禅の祖跡を経巡つた経験がなく、また帰国して後もしばらくの間はいまだ国内が安定せずといったため、歴遊を控えていたものであろうか。

さらに子曇は至元二七年（一二九〇）に潭州（湖南省）の天柱という寺院を董したと伝えられるが、至元二七年は丙寅ではなく庚寅に当たっていることから、『本朝高僧伝』では先のごとく注しているわけである。潭州とは湖南省の中心部、

現在の長沙市とその周辺地域を指している。

では、子曇が住持することになった潭州の天柱とは、具体的に何れの寺院を指しているのだろうか。長沙近隣に天柱と称する地が他に存しないことから、潭州の天柱寺とは衡山県西北三〇里に位置する衡山（南嶽）の天柱峰に存した寺を指しているものと解される。衡山県は後世は衡州府に属しているが、宋・元代には潭州（長沙府）に属しており、雲外雲岫が「大通禪師行実」を撰した頃はまさに衡山県は潭州の一隅であったことが知られる。「南嶽総勝集」巻上「五峯靈跡」によれば、

天柱峯、高四千八十餘丈。其形如「双柱」、兩頭端聳百丈。九域

誌云、名山三百六十中有「八柱」、此其六也。山下有「天柱寺」。山

西北有「石室」。

とあり、『南嶽志』巻一「形勝」にも、

天柱峯、亦曰「双柱峯」。在「嶽廟西」。兩山端聳、其形似「柱」。九

域志云、名山三百六十中有「八柱」、此為「第六柱」。

と記されている。天柱峰は一に双柱峰とも称し、南嶽廟の西にあつて高さ四〇八〇丈であるとし、その山下に天柱寺が存していたことを伝えている。この場合の高さとは峰の頂上までの距離を示すものであろう。

一方、天柱寺については、『南嶽志』巻一「寺觀」ではわずかに、「已上八寺、俱在「嶽山後」として、「天柱寺」の名の

みが挙げられているにすぎないが、『南嶽総勝集』巻中「叙觀寺」には、

天柱禪寺、在「廟之西北」。登「山十八里」、天柱峯下在「近山」。天

柱為「之最高寺」、在「半山樓閣」參差、与「彌陀」相隣、出「没煙雲

之際」、居者疑「在「虛無中」。葆真居士詩「絶云、福嚴直上看「天

柱」、樓閣罪微倚「翠空」、却望「福嚴」如「画出」、更憐「煙雨巧朦朧」。

思大和尚「生塔」、在「寺下」。山有「香岡」、周回数里、多生「香

白芷、伝云「魏夫人所」植。

とあり、南嶽廟の西北に存した天柱禪寺の概要を記している。

子曇が住持した潭州の天柱寺とは、ここにいる衡山県の南嶽

に存した天柱寺のことを指しているものと見られ、実際に

『「山国師語録」巻下「小仏事」の「西澗和尚入祖堂」には

「在「唐土、則天台・南岳、妙提「玄要」。来「日東、則瑞鹿・

巨福、大振「宗綱」という表現が見られるから、子曇が住持

した天柱寺が南嶽に存していたことは疑いなからう。

ところで、同じ天柱峰の東南腹には有名な福嚴禪寺（もと

般若寺）が存している。福嚴寺は南嶽第一の禅刹であつて、

古く南嶽慧思（思大和尚、五一五 五七七）が般若寺を開いた

ことに始まり、唐代には六祖下の南嶽懷讓（大慧禪師、六七七

七四四）が住持して「磨瓶作鏡」の故事をもつて馬祖道一

（大寂禪師、七〇九 七八八）を接化したことで知られる。磨鏡

台にはいまも、「唐勅諡大慧禪師最勝輪塔」や「禅宗七祖懷讓

大慧禪師塔」の勝跡が残されている。おそらく子曇は天柱寺の住持を勤める傍ら、こうした南嶽の名勝や寺觀を訪れ、その景觀を愛でたことであろう。実際に子曇が住した天柱寺の下には南嶽意思ゆかりの「思大和尚二生塔」が存したことを伝えている。

廬山における交遊

行実：經「數祀、抵回廬阜。三十一年甲午、円通玉崖振公、請師居第一座。開先一山万公、時々往還、激揚祖風焉。此歲春正月、断江首座・月江藏主、起靈隱入廬山、巡礼山中諸祖靈塔、過夏円通。師与諸公漫遊諸刹、各有唱和也。

東渡：數載入廬阜、三十一年、円通玉崖振公、招居第一座。嘗与一山・断江・月江諸老、往来酬唱、声震江湖。

延宝：弘衣漫遊。

本朝：經「數禩、回廬阜、円通玉崖振公、拳第一座。与一山万・断江恩・月江印、往来酬唱、声流江湖。

墨蹟：衣ヲ弘テ漫遊ス。

その後、数年を経て子曇は天柱寺の住持職を退き、江西の名峰として名高い廬山に遊んでいる。「大通禪師行実」によれば、

數祀を経て、抵みて廬阜に回る。三十一年甲午、円通の玉崖振

公、師を請して第一座に居せしむ。開先の一山万公、時々往還し、祖風を激揚す。

と記されており、『東渡諸祖伝』と『本朝高僧伝』のみがその記事を継承している。子曇は自ら願って天柱寺の住持を辞したものらしく、その足で直ちに江州（九江）徳化果の廬山へと赴いている。しばらくの間、おそらく子曇は廬山の勝景を愛し、山内の諸刹を歴遊していたことであろうが、至元三年（一二九四）に円通崇勝禪師の玉崖克振に招かれて第一座（首座）に就任している。円通寺は徳化果甘泉郷の廬山西麓の石耳峰の下にあり、南宋末期より禅宗甲刹の一つに列している。

玉崖克振については詳しい情報が定かでないものの、『増集統伝燈録』巻四に「径山無準範禪師法嗣」として「饒州蕭福無文璨禪師」の章が存し、『正誤宗派図』には「径山無準師範 円照仏鑑」の法嗣として「蕭福無文道璨」の系統を載せて、

蕭福無文道璨 円通玉崖克振 円通思菴 嘗

という法系が記されている。これによれば、玉崖克振は『無文印』や『柳塘外集』の著者として名高い無文道璨（柳塘、一二二四—一二七一）に参じて法を嗣いだ高弟ということになる。ただし、道璨については上記のごとく破庵派の無準師範の法嗣とする説が存しているものの、実際に『無文和尚語録』

「無文和尚初住饒州薦福禪寺語録」の入寺拈香を窺うに、道璨は自ら明確に大慧派の笑翁妙堪（一一七七—一二四八）に嗣承香を注いでいることから、妙堪の法を嗣いだ高弟とするのが正しいであろう。したがって、克振に至る法系も、

大慧宗杲 無用淨全 笑翁妙堪 無文道璨 玉崖克振

と訂正すべきであつて、克振は大慧宗杲（妙喜、普覺禪師、一〇八九—一一六三）より四代を次第する法孫であり、大慧派に属する禪者ということになる。

しかも、このとき同じ廬山にある開先華藏禪寺（秀峰寺）の住持であつた大慧派の一山了万（無意、一二四一—一二三二）がしばしば円通寺を訪れて子曇と交遊を結んだとされる。開先寺は廬山の南麓に位置し、南康府星子県に属しており、やはり南宋末期から禅宗甲刹に列している。了万は撫州（江西省）臨川の金氏の出身で、諸禅者のもとを遍参して後、杭州の淨慈寺において大慧派の東叟仲穎（？—一二七六）に参じて印可を得ている。『蒲室集』卷二「塔銘」の「永嘉江心寺一山万禅師塔銘 代仏智師作」には、郷里撫州臨川の疎山白雲禪寺の住持を捨て去つた記事について、

時予亦菴居于洪。一日有廬眉負笠走雨中來、就之乃一山也。留數月歛焉。而江淮總統、會諸山于靈隱直指堂、議以開先迎居之。一山益奮厲、以古道自任、庶幾禪林全盛時。又十年、行宣政院具疏幣、以永嘉江心來聘。

とあり、『統伝燈録』卷三六「温州江心一山禪師」の章においても、

後遊天台及境。衆請開法寒岩、竟嗣東叟。踰三年、遷仙居紫籜。歷十載、遷疎山、當道議不合即擲退。未幾、江淮總統、會諸山于靈隱直指堂、議以開先迎居之。師蒞事叢林鼎新。又十年升住江心。

と記されている。これらによれば、了万は初め天台山に遊方し、請われて天台県西北七〇里の寒巖（寒石山）の福善院に住持しており、三年を経て仙居県の紫籜山広度寺に遷住している。広度寺はいうまでもなく子曇がかつて受業した寺であり、了万は南宋末期から元初にかけて一〇年間にわたつて広度寺に住持していたわけであり、その後、疎山の住持に招かれたが、諸般の事情から住持には至らなかつたものらしい。そんな了万が杭州銭塘県の北山景德靈隠寺における衆議を経て、廬山の開先華藏禪寺の住持に迎えられており、開先寺でも一〇年にわたつて化導を敷いている。おそらく了万と相見した子曇は仙居県の広度寺をめぐつて因縁浅からぬものを感じたに違いない。

さらにいま一つ興味深いのは、「大通禪師行実」に、

此の歳の春正月、浙江首座・月江藏主、靈隠を起ちて廬山に入り、山中の諸祖の靈塔を巡礼し、夏を円通に過す。師、諸公と諸刹を漫遊し、各おの唱和有り。

という消息が記されていることであろう。ただし、『禪林諸祖伝』本で「諸祖靈塔」となっているところが、『禪林僧伝』本では「諸靈塔」となっており、「祖」の字が欠落しているが、文意は同じといつてよい。この点もかなり簡略化されてはいるものの、『東渡諸祖伝』と『本朝高僧伝』に記事が継承されている。ここにいる断江首座とは、松源派の横川如珙（此庵、一一三二—一一八九）に参じて法を嗣いだ断江覺恩（以仁、？—一一三九）のことであり、いま一人の月江藏主とは、松源派の虎巖淨伏（天瑞老人、仏慧定智禪師、？—一三〇三）に参じて法を嗣いだ月江正印（松月翁、仏心普鑑禪師、一一二六七—？）のことである。

「大通禪師行実」によれば、至元三年の正月に覺恩と正印は杭州の豐隱寺を起つて廬山へと赴いており、廬山山中の諸祖の墓塔を巡礼した後、夏安居を円通寺の克振のもとで過ごしている。このとき円通寺の首座であつた子曇は覺恩や正印と諸刹を漫遊し、互いに詩偈の唱和をなしたとされる。

覺恩には詩集として『断江摘藁』二巻が存しており、正印には語録として『月和尚語録』三巻が存しているが、残念ながら『断江摘藁』にも『月和尚語録』にも子曇との交流を伝えるような具体的な詩偈は見られない。ただ、この時期に覺恩と正印が班を組んで廬山に歴遊していることは確かめられることから、「大通禪師行実」に伝えているのは史実と

見てよく、子曇の在元中の交友関係を知る上では貴重なものがある。このように子曇は廬山において克振・了万・覺恩・正印らと交流を結び、詩偈を唱和して楽しい日々を過ごしていたことが知られる。

蘇州万寿寺における助化

行実…成宗大徳改元丁酉、平江万寿南洲珍公、致「靈樹接」雲門之礼焉

東渡…大徳丁酉歳、平江万寿南洲公、亦以「靈樹接」雲門之礼、

以待師。

延宝…江湖名刹、拳以「版首」。

本朝…大徳元年、謁「南洲珍公于平江万寿」、亦延居「首座寮」。

墨蹟…江湖ノ名刹、拳ニ版首ヲ以テス。

その後、大徳元年（一一九七）に至つて、子曇は蘇州（江蘇省）吳県に存した禪宗十刹の一つ万寿報恩光孝禪寺に赴いている。「大通禪師行実」によれば、

成宗の大徳改元丁酉、平江万寿の南洲珍公、靈樹の雲門を接するの礼を致す。

という記事が存している。ただし、『禪林僧伝』本で「靈樹」となっているところが、『禪林諸祖伝』本では「靈柎」となっており、この点は「靈樹」の方が正しい。『東渡諸祖伝』はほぼこれを踏襲して「大徳丁酉の歳、平江万寿の南洲公、

亦た靈樹の雲門を接するの礼を以て、以て師を待す」と伝えられているが、『本朝高僧伝』においては、「大徳元年、南洲珍公を平江の万寿に謁するに、亦た延べて首座寮に居す」とより判りやすい表現となっている。

万寿報恩光孝禅寺は蘇州（平江路）の府治の東北に存した禅寺であり、古く晋代の創建とされ、北宋代には天寧万寿禅院などと称せられ、南宋の紹興年間（一一三一—一一六二）に万寿報恩光孝禅寺の額を賜っている。また南宋末期には五山十刹制度によって十刹の第四位に列しているから、かなりの名刹として機能していたことが知られる。

また南洲珍公とは松源派の石溪心月（仏海禅師、一一七七—一二五六）に参じて法を嗣いだ南洲永珍（南州、季潜、一二二五—一三〇〇）のことである。『増集続伝燈録』巻五「蘇州万寿南洲珍禅師」の章によれば、

蘇州万寿南洲珍禅師。初住「常熟甘草・能仁」、遷「廬山開先」、升「万寿」。

とあり、諸刹の住持を経て万寿寺に陞住していることが知られる。『石溪和尚語録』巻上「臨安府径山興聖万寿禅寺語録」の編者の一人に「侍者永珍」の名が存し、『正誤宗派図』には「径山石溪心月 仏海」の法嗣として、「万寿南洲永珍」の名が載せられている。南洲永珍は石溪心月の法嗣であることから、日本に渡来した大休正念（仏源禅師、一二二五—一二

八九）や入宋帰国した無象静照（法海禅師、一二三四—一三〇六）とは同門に当たっていることが判明する。また蘇州の万寿寺に陞住する前には、永珍は蘇州常熟県の甘草寺と能仁寺を経て、廬山の開先華蔵禅寺の住持となっていたから、あるいは開先寺の一山了万との関わりなどから、子曇が永珍に招かれることになったものかも知れない。

一方、『増集続伝燈録』には永珍の「上堂」として、
 上堂。耕而食、蠶而衣。天地造「化万物」、生「於四時」、説「甚無修無証無念無為」。山僧来年七十三歳、誰知道、乙酉生人「不屬」雞。

と述べているから、乙酉すなわち宝慶元年（一二三五）の生まれで、この上堂がなされた七二歳は元貞二年（一二九六）に当たることになり、まさに子曇が蘇州の万寿寺に赴いて永珍のもとで首座を勤める前年になされたものということになる。

さらに、『江湖風月集』巻上には、「江西南洲珍和尚」として「送「人」之「廬山」」という永珍がなした一偈を載せているが、江西とあるのは出身地を指しているものと見られ、永珍は洪州（南昌）など江西の出身であったものと見られる。

ところで、「大通禅師行実」や『東渡諸祖伝』に、「靈樹の雲門を接するの礼を致す」とあるのは、『雲門「匡真禅師」広録』巻下に付された「雲門山光泰禅院匡真大師行録」に、

後抵「靈樹知聖禪師道場」。知聖夙憶「其來、忽囑、鼓告、衆、請往接首座。時師果至。先是、知聖住「靈樹」、凡數十年、堂虛、首席。衆屢請、命「上座」、知聖不「許」。嘗曰、首座纒遊方矣。及「師至、始命首、衆焉。」

とある因縁を指している。南嶽下の長慶大安（延聖大師、七九三—八八三）に參じて法を嗣いだ靈樹如敏（知聖大師、？九二〇）は、韶州（広東省）韶社都の靈樹禪院に住持してより數一〇年間にわたって首座を空席にしていたが、雪峰下（雲門宗祖）の雲門文偃（匡真大師、八六四—九四九）がやって来ると篤く礼して門下の第一座に迎えたと言れる。この故事に準えて南洲永珍が子曇を首座に招いた消息を語っているわけであり、永珍が如何に手厚く子曇を首座に招いたかを伝えている。

しかも興味深いのは後に日本に渡來した破庵派無準下の靈巖祖欽（慧朗禪師、？—一二八七）の高弟である靈山道隱（仏慧禪師、一二五五—一三三五）が日本に赴く以前の偈頌を収録した内閣文庫所藏『業識団』一卷にも、「平江万寿南洲和尚三題」と「寄平江万寿南洲老和尚」の偈頌が収められている。道隱も同じ頃に蘇州の万寿寺において永珍に參学していたことが知られ、永珍の示す「目前不物」「声前一曲」「独脱無依」という三つの禪の機関について研鑽を深めている。あるいはこのとき首座の子曇は道隱とも何らかの面識を得る機

会が存した可能性が高く、道隱が後に日本に赴く一因として万寿寺の永珍のもとで子曇と関わった消息が影響していたのかも知れない。

ちなみに先の「雲門山光泰禪院匡真大師行録」には、
泊「知聖將示、滅、欲、師、踵、其、席。乃、潛、秘、函、中、謂、門、弟、子、曰、吾、滅、後、上、或、幸、此、請、以、遺。上、果、會、龍、幸、山、知、聖、預、測、上、至、乃、升、堂、踰、跌、而、終。及、帝、至、已、滅、矣。帝、詢、師、遺、示、門、人、出、函、奉、之。上、啓、函、得、書、云、人、天、眼、目、堂、中、上、座。帝、乃、勅、刺、史、何、希、範。具、禮、命、師、以、襲、法、会。上、於、是、欽、美、之。累、召、至、闕、每、所、顧、問。酬、答、響、心。帝、愈、擢、服。遂、賜、紫、袍、師、名。後、徙、居、雲、門、山。」

という記事がつづいて記されており、如敏が靈樹寺の後席を文偃に託するべく取り計らって示寂した事跡が伝えられている。とすれば、永珍の場合も万寿寺の後席を子曇に託する意向が存したのかも知れない。残念ながら子曇はまもなく日本に向かうことになったため、万寿寺の住持を継承することはなかつたわけである。

一山一寧とともに再来日を果たす

行実…本朝正安元年己亥、副元帥平公貞時、遣「使、聘、師、待、以、師、礼。不、獲、已、兩、次、逾、溟。蓋、与、曇、年、相、阻、二、十、有、九、年。師、年、五、十、一。其、年、秋、八、月、著、岸。」

元亨：正安元年、与一山、同、舟重来。

東渡：正安元年、副元帥貞時平公、遣使聘請、復航海而來。

延宝：正安元年、与一山寧公、同、船重来。

本朝：正安元年、借一山寧禪師、重来、年五十有一。

稽疑：後第九十二主後伏見院正安元年己亥歲、副元帥貞時平公、

遣使聘請、歸元已來、既歷霜華二十年、而再航海、与

一山、俱再来、日国。即当太元第六主成宗帝大德三年也。

墨蹟：正安元年、一山寧公ト、船ヲ同フシテ重テ来ル。

諸山の住持を勤めたり、大刹の要職を歴任していた子曇のもとに再び来日の機会が巡ってきたのは五〇歳を過ぎてのことである。「大通禪師行実」によれば、

本朝正安元年己亥、副元帥平公貞時、使いを遣わして師を聘し、待するに師礼を以てす。

と記されており、日本の正安元年（永仁七年、一一九九）すなわち元の大徳三年に執権の北条貞時（最勝園寺殿崇演、一一七一—一一三二）が遠く使者を使わして子曇を招聘し、師の礼をもつて待遇せんとしたとされる。この記事を受けるのは『東渡諸師伝』と『二十四流稽疑』であつて、いずれも日本の鎌倉から北条貞時による聘請が存したことを伝えている。北条貞時は父の北条時宗の死去を受けて弘安七年（一一八四）七月より第九代執権に就いている。この間、貞時は弘安八年

（一一八五）一一月に霜月騒動で安達泰盛（覚真、一一三二—一一八五）らを滅ぼし、永仁元年（一一九三）には内管領の平頼綱（泉円、平禅門、？—一一九三）をも討倒している。

注目すべきは『元亨釈書』に「正安元年、寧一山と舟を同じくして重ねて来たる」と記している点であつて、後世の『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』などもこれを踏襲しているのである。したがつて、子曇は再来日に際して、曹源派（一山派祖）の一山一寧と同じ船に便乗して日本に辿り着いたことが判明する。

ところで、聖一派の虎関師鍊（海蔵和尚、本覚国師、一一七八—一一四六）の『濟北集』巻一〇「外紀・行記・伝・表・疏」の「一山国師行状」および「一山国師語録」巻末に付される「行記」（単独には「一山和尚行記」）には、

宝陀智愚溪、有維桑旧、往来欵密。一日語曰、我老倦于領衆也、煩我兄可乎。師掩耳焉。智潜馳使於僧官、道讓賢之志。府帖遽至、不得已而還。（中略）大徳二年夏、我商舶薄明州。大元国主、初有狙窺我之心。故辛巳、戰艦數盈十方、然風濤一夕破蕩狼狽。是以恐我之神靈、羸志未歇、屢圖奇筭。為此方傾鄉公乘、欲聘有道衲子、勸誘以爲附庸。愚溪既當其任、然老病未遣、偶聞商船至、欲成先策、遂選俊髦、臺評湊師。即敕宣慰使阿答刺相公、遣一省郎及慶元府判官・僧録司・知書・昌国州知州・僧正

司・知書等五十餘人、入寺。出宣慰使手書及僧録司官書曰、皇帝聖旨下省府、賜師金襴衣及妙慈弘濟大師号、泛溟波到日本、通二国之好。乃以衣帖付師、軟語慰勞。師思不可道、受之。明日、一行官將師到府。府官僧官皆在焉、細說通好之事、而付元朝信書一通、又差官吏五人侍衛。蓋備師之逃匿也。尋燕參政公來、持国主詔旨及省部文書、宣讀了、急請登舟、歸宝陀宿一日。

という記事が存しており、一山一寧が日本に赴くことになる事情を伝えている。二度にわたる日本遠征(元寇)に失敗した後も、元の世祖フビライは日本を詔諭して入貢を促したものでらしい。『善隣国宝記』巻上「海印接待庵記」によれば、至元二〇年(一二八三)八月に明州昌国州(昌国県)東海上の普陀山(梅岑山)観音宝陀禅寺の住持であった大憲派の愚溪如智(五楽翁)と提拳の王君治が元朝の使者として日本に派遣されている。しかしながら、海上に宿留すること八ヶ月、途中で暴風雨に遭って如智らは引き返している。さらに翌年の至元二二年四月に如智は参政の王積翁(字は良存・良臣、一二二九—一二八四)とともに再び日本に向かったが、七月に対馬(長崎県)に辿り着いたものの、日本に赴くことを欲しなかった船員のために王積翁が暗殺され、如智のみが辛うじて帰国し、観音宝陀寺に再住している。如智が宝陀寺前住として「海印接待庵記」を撰したのは至元二八年(一二九一)六

月のことであるが、このとき如智は老齢を理由に住職を退き、官に奏して同郷台州出身で昌国州治東南の祖印寺の住持であった一寧に観音宝陀寺を譲っており、まもなく一寧が宝陀寺の住持になっている。

実際に『一山国師語録』巻末には、

中書左丞行浙東道宣慰使記事。宝陀堂上一山総統大師。今奉省割。有燕右丞、賈擎宣命、寧一山授妙慈弘濟大師江浙釈教総統、又賜錦襴袈裟鈔一百足。随行伴当五名、段子表并賈擎詔書、前來慶元、起發倭船。今令東路并僧録司、委官詣請如達。一山総統、就將行、随行伴当五名、即便到城、欽受宣命賞賜。理会倭船好当、更不別來附此。致意愚溪長老。為禱、併希法照。不備。

五月二十有一日修。

宝陀堂上一山総統大師。

という元の朝廷から一寧に下された勅文の写しが掲載されており、これは『鄰交徵書』二篇巻一に「与一山牒」として収録されている。ときの皇帝は世祖フビライの後を継いだ成宗(鐵穆耳、一二六六—一三〇七、在位は一二九四—一三〇七)であり、この勅文では宝陀寺の住持(堂上)である一寧に妙慈弘濟大師の勅号と江浙釈教総統大師の称号を与え、日本に使者として赴くべき旨を示している。

日本の正安元年すなわち元の大徳三年に子曇は一寧とともに

に日本に赴くことになるわけであるが、「大通禪師行実」によれば、子曇が日本に着岸したのを八月のことと伝えている。とすれば、北条貞時から子曇のもとに來日を要請する書簡が届けられたのは、大徳二年（二二九八）の夏に明州に到つた日本の商船によつてであるつと推測される。おそらく元朝としては早くから日本との間で緊張關係を改善したい意向が存したことから、この日本側の要請を重視し、一寧が日本に向かうのに子曇を同行させることを決したものと見られる。

『一山國師語録』卷末に付される「行記」によれば、

行官吏差三船、劇送附日本船。於是乎、風浪鼓蕩、櫓折柁摧、修補僅成、進馳三四日、到高麗絶嶺、又速奔一日、出沒瀟山浪嶽間、飄簸而著于博多。本朝正安元年也。

と一寧が來日する際の旅程を伝えているが、子曇が一寧らと同じ船で日本に辿り着いたのであれば、この記事はそのまま子曇の來日の状況をも伝えていることになる。子曇はこのとき日本の北条貞時の招請を得て元朝の許可のもと日本へと向つているのに対し、一寧はこの日本商船の來航を機に日本との關係改善を図る元朝の意向を受けて日本に向かうことになつたと見てよいだろう。ただし、このとき両者が日本商船に乗り込んだと解するのは不自然であり、帰国する日本商船を護送するかたちで元朝が遣わした三艘の船の一つに同乗して日本に向つたものと見るべきであろう。

目的の違う両者が縁あつて同船に便乗したわけであつて、もちろん、元朝としても子曇の日本渡航を認めた上で、一寧と行動を共にさせたものであろう。したがつて、子曇の場合は日本側と元朝側の双方から了解を得たかたちで日本に向かつていることになり、一寧の場合はあくまで元朝側のみの意向のもとに日本に向かう羽目となっている。この微妙な違いが日本に辿り着いた当初に、鎌倉における両者に対する待遇の相違となつて現れることになる。

一寧の「行記」によれば、両者を乗せた船は高麗の沖合を経由してそれほど日数を經ずに筑前の博多に着岸したもののようであるから、「大通禪師行実」の記事と合わせると、両者は八月に明州の港を起つて順調に航海をなし、その月の内に博多に到着したものと見てよいであろう。

このとき一寧に随侍して日本に渡來した門人として石梁仁恭（仁玖、慈照燈禪師、一二六六—一三三四）という禪者が存している。『延宝伝燈錄』卷二二「京兆建仁石梁仁恭禪師」の章によれば、

京兆建仁石梁仁恭禪師、元国台州人。一山和尚外甥也。礼徑山石溪月、剪髮納具、徧講知識。後參一山、遂得「罷休」泊在「雪竇」、居「紀綱寮」。正安元年、從山東渡。

と記されており、仁恭は一寧の外甥として台州に生まれたとされ、天台山の石梁瀑布（石橋）に因んで自らの道号を石梁

と称しているが、道号と法諱の関係は曹洞宗宏智派の石窓法恭(一一〇二—一一八二)に基づいているものであろう。

ただ、ここで仁恭が松源派の石溪心月(仏海禪師、?—一二五六)を礼して剃髪したとするのは年代的に誤りであって、実際には曹源派の癡絶道冲(一一六九—一二五〇)の高弟である月溪紹円(明鑑禪師)に就いて得度している。その後、仁恭は外俗叔の一寧に参じて法を嗣ぎ、明州奉化県の雪竇山寶聖寺で維那を勤めた後、一寧とともに日本に赴いているから、当然ながら子曇とも交流が存したことにならう。

ところで、「固山鞏和尚行状」によれば、子曇や一寧が来日した直後、筑前(福岡県)の博多の地でなした消息として、

正安元年己亥、師十六歳、一山・西澗来朝、師博多相看。西澗授以「無中号」、有「五言頌」曰、「内外忘能所、東西絶往来、空王遍塵刹、門戶鎮長閑。」

という記事が伝えられている。聖一派の固山一鞏(もと無中冲虚、守覺、一一八四—一二六〇)は一寧と子曇が元国より渡来したことを知り、直ちに博多に赴いて両者を訪ねて相見している。一鞏は肥前(佐賀県)佐嘉郡長瀬の源氏の出身で、同郡の春日山高城護国禪寺において聖一派の蔵山順空(無量房、円鑑禪師、一一三三—一一三〇八)のもとで出家得度しており、法諱を冲虚と命名されている。このとき一鞏はわずか一六歳であったが、一寧と子曇は快く一鞏と相見してくれたも

のらしく、とくに子曇からは無中という道号を授けられている。ちなみに、「固山鞏和尚行状」には、このとき子曇が一鞏の当時の道号と法諱である無中冲虚に因んで、

内外に能所を忘じ、東西に往来を絶す、空王は塵刹に遍く、門戶は鎮に長く閑く。

という五言四句の道号頌を与えており、これは再来日した直後に子曇が博多で詠じた貴重な作といえる。

さらに京都紫野の龍宝山大徳寺には石帆惟衍が贊を付した法兄の虚堂智愚の頂相が現今に伝えられている。ただし、現今に残されているものは惟衍その人の自筆ではなく、法嗣の子曇が複写したものであって、

黒雨呵風、興妖造怪、鳴鄒山倒卓、攪西湖鼎沸、單々一箇破砂盆、輾到凌霄百雜碎。描邈出来、十分精彩、我此叢林、不願見之。只好將去日本國裏、燒香呪病。

此庚午歲、石帆和尚、居淨慈時、為孤舟和尚贊。

虚堂和尚頂相之語、因歸朝後失於延燒、今復新繪、俾余筆之。庶昕夕得以瞻依昭見、不忘所自。

己亥、西澗子曇、拜手。「子曇」「西澗」

という内容である。この画贊はもともと惟衍が淨慈寺の住持として庚午の歳すなわち南宋の咸淳六年(一二七〇)に孤舟和尚という禪者のために贊を付したものであることが記されているから、天童山に移る直前に当たる正月か二月に揮毫し

たものであることが知られる。このとき惟衍に贊を求めた孤舟和尚は智愚ゆかりの人と見られ、智愚が前年の咸淳五年一〇月に示寂して数ヶ月を経た時点で浄慈寺の惟衍を訪ねて贊を得ていることになる。あるいは孤舟和尚はそれまで径山の智愚のもとに参禅し、その示寂とともに浄慈寺の惟衍のもとに到って頂相の贊を得たものであろうか。

この孤舟和尚は宋国の禪者なのか日本から入宋した禪者なのかも定かでないが、鎌倉円覚寺所蔵「仏日庵公物目錄」の「墨蹟」にも「石帆真蹟一 与「孤舟」法語」という記事が存し、惟衍が孤舟に与えた法語が日本に将来されて円覚寺仏日庵に所蔵されていた事実が知られ、贊の中にも「日本国裏に将去る」の語が見えるから、日本僧であったと解するのが自然であろう。あるいは北条時宗の命を受けて惟衍のもとに法語を届けた日本僧こそ、孤舟和尚その人であったと解されるかも知れない。ただ、この孤舟和尚という表記は、この人が浄慈寺の惟衍のもとを訪れたときの呼名ではなく、おそらく後に子曇が尊称を込めて道号で表記したものであって、法語が伝えられていないのが惜しまれる。

その後、この頂相の原本は孤舟によってか日本に将来されており、子曇も日本に在る間に拝観する機会が存したものであろうが、子曇が元朝に帰国した後、火災によって焼失したとされる。己亥とあるから日本の正安元年（元の大徳三年、一一二

九九）に再来日した直後、子曇が新たに画かれた智愚の頂相に求められて本師の惟衍の贊を揮毫した事情が記されている。現今、この頂相は大徳寺の所蔵となっているが、子曇が贊を付したのが九州であったのか京都なのか、または鎌倉に到って後であったのかは定かでない。

ところで、『南山和尚語録』に付される「南山和尚行状」や単独の「東福第十一世南山和尚行実」には、

永仁三年乙未、師年四十二、在建長結夏、冬至秉鉢。四年、移円覚、又在首座寮、兩節説法。五年、年四十四、有承天之請、而來洛下。仏源・大通・一山・鏡堂・仏燈・双峯・玉山・鐵庵・絶涯諸考、偈以贊之。

という記事が存し、永仁五年（一一九七）に聖一派の南山土雲（一一五四—一三三五）が筑前（福岡県）博多の万松山承天寺の住持を拝命し、永仁六年（一一九八）三月八日入院しているが、このとき子曇と一寧も偈頌を寄せてこれを賀したと伝えられている。ただ、永仁六年にはいまだ子曇・一寧は来日していないことから、両者が偈頌を寄せたとすれば、来日して博多に在った時期ということになり、あるいは両者は来日した直後、承天寺に寓居して住持の土雲と交遊を結んだものであろうか。

ちなみに大休正念・西澗子曇・一山一寧・鏡堂覚円の四人はすでに触れたごとく渡来僧であるが、このときすでに正念

は示寂して久しい。つづく約翁徳俊(仏燈国師、一二四四—
三三〇)・双峰宗源(達源、双峰国師、一二六三—一三三五)・
玉山徳璇(仏覚禅師、一二五五—一三三四)・鉄庵道生(本源
禅師、一二六二—一三三二)・絶涯宗卓(広智禅師、?—一三三
四)の五人は日本僧であつて、便宜上、分けて記載されてい
る。徳俊と徳璇は大覚派の蘭溪道隆の法嗣であり、宗源は土
雲と同じ聖一派の円爾の晩年の高弟であり、道生は仏源派の
大休正念の法嗣であり、宗卓は大応派の南浦紹明の法嗣であ
つて、いずれも土雲と道交が存したことが知られる。

瑞鹿山円覚寺への陞住

行実：冬十月十九日、住「円覚」。叢規嚴肅、袖子勇齋、平帥問「禅
待遇倍前。

元亨：平副帥貞時、待以「師礼」、迎居「円覚大伽藍」。叢規嚴肅、袖
子勇齋。

東渡：平帥申「弟子礼」、迎居「円覚大伽藍」。当「是時」、海衆奔趨、
驩声鼎沸。平帥每「入室、詢」禅要。

延宝：副元帥平貞時、執「弟子礼」、請住「円覚」。
本朝：副元帥平貞時、欽執「弟子礼」、請住「円覚」、公務之暇、参

尋宗乘。海衆屯聚、声光達辰。

稽疑：平帥「申弟子礼」、迎居「円覚大伽藍」。当「是時」、海衆奔趨、
驩声鼎沸焉。平帥每「入室、詢」禅要。

西潤子曇の渡来とその功績(佐藤)

墨蹟：副元帥平貞時、弟子ノ礼ヲ執リ、請シテ円覚ニ住シム。
その後、子曇や一寧らは一〇月初旬には鎌倉に到つたもの
らしく、『鎌倉年代記』の裏書によれば、正安元年の記事と
して、

今年 正安元(中略)自「去年」及「今春」、慧星連々出現。九月
廿八日寅刻、慧星出「現辰方、光芒」二丈。十月八日、宋朝僧正
子曇・一寧、参「着鎌倉」。一寧持「大元国書」。今年造「御評定所
於將軍御所、被「行」御評定。

という記事が存している。この記述によれば、子曇や一寧ら
が鎌倉に辿り着いたのは、正安元年(一二九九)の一〇月八
日のことであり、両者を「宋朝僧正」としながらも、一寧で
はなく子曇の名を先に記している。また「大元国書」を持参
したのが一寧である点を明確に伝えているもの、その後、
両者に対して如何なる処遇をなしたのかは何も触れられてい
ない。

ところが、鎌倉に到つた子曇と一寧に対する処遇はきわめ
て相違したものであつた。子曇の場合は、まもなく鎌倉山内
の瑞鹿山円覚興聖禅寺の住持に就任しており、「大通禅師行
実」によれば、

冬十月十九日、円覚に住す。叢規嚴肅にして、袖子勇齋す。平
帥の問禅、待遇は前に倍す。

と記されている。もっとも『禅林僧伝』本で「十九日」と

「敵肅」とあるところを、『禅林諸祖伝』本はそれぞれ「十九」と「敵来」と記しており、この場合は「十九日」と「敵肅」の方がより妥当と見られる。いずれにせよ、子曇は一〇月八日に鎌倉に到つてより、わずか一〇日余りを経た一〇月九日には円覚寺の住持に迎えられるわけであり、渡来僧とはいへ異例の抜擢と見てよいであろう。また『元亨釈書』によれば、

平副帥貞時、待するに師の礼を以てし、迎えて円覚大伽藍に居せしむ。叢規は敵肅にして、衲子は勇奮す。

と伝えており、このとき執権の北条貞時が弟子の礼を執つて子曇を円覚寺に迎えたことを特筆している。また「叢規敵肅、衲子勇奮」のことは『禅林僧伝』本の「大通禅師行実」と同じである。貞時は子曇を師として待遇しているわけであり、それまで円覚寺の住持であった大覚派の葦航道然（大興禅師、一一一九—一三〇一）が老齢を理由に退隠し、これに代わるかたちで子曇が新たな住持として直ちに入院しているのかも知れない。『扶桑五山記』四「相陽瑞鹿山円覚興聖禅寺」の「住持位次」によれば、

第六、西圃禾上、諱子曇、謚「大通禅師」。嗣「石帆」。徳治元十月廿八日。

とあって、子曇は円覚寺の第六世に名を連ねている。しかも「大通禅師行実」によれば「平帥、禅を問い、待遇は前に倍

す」とあるから、円覚寺に住持した子曇に対して、執権の貞時はかなりの力の入れようで参禅問法したもののらしく、子曇が最初に来日した際における父時宗の待遇にも倍したとされている。

一方、これに対して一寧の伝記史料である「一山和尚行記」には、

舶主以書白「元師府」。府議曰、敵国命使命不活矣。或曰、使命不活、然奈「僧儀」何。先編「置豆州修禅寺」。

と記されており、幕府としては元朝を敵国と判断したものの、一寧が僧侶であることから命を奪つことはせず、伊豆（静岡県）田方郡の修禅寺（修善寺）に幽閉する処置を取っている。しかしながら、さらに「一山和尚行記」によれば、

或曰、宋僧之人「我土」、多挟「道術」也、伝聞、寧公「元国」望土、其受「重寄」又可「知矣」。而又出「于抑逼」也。且夫沙門者福田也、有道之士、無「心」於万物也。在「元国」元之福也、在「我邦」我之福也。豈必区区慕「子郷」之節哉。若「長朽」于窮裔、非「吾土郷」比丘之素也。因茲「追赴」相陽。而猶居「僻处」、未「入」府寺。東方緇白、初聞「師錮居」、大尽焉。及其来、奔波礼謁、只恐「後」。山内高舎、門外如「市」。十二月七日、主「福山大道場」、叢規「肅如」、万神鎮仰。府主耳「其提唱」、悔「中塗稽滯」矣。

と記されている。一寧はまもなく修禅寺から鎌倉に移されたが、しばらく山内の一隅に寓居させられていたものらしい。

『一山国師語録』卷上「住日本国相模州巨福山建長興国禅寺語録」によれば、一寧は子曇が円覚寺に住持したのになりに遅れ、正安元年二月七日に至って漸く建長寺に入院している。おそらく一寧の幽閉を解くべく子曇も円覚寺の住持として相応の嘆願を幕府ないし執権の貞時になしていたものと見られる。

ところで、両者の来日直後の消息を伝えるものとして、『延宝伝燈録』卷二「京兆南禅高山居中禅师」の章には、
会一山・西圃、同船東渡、開法建長・円覚。鏡堂以偈賀二師来遊、副元帥平貞時、命諸山和之。師亦預焉。軸成求証於西圃。圃閱師偈曰、衆角雖多一麟足矣。平帥乃拳師侍客于巨福。及圃董席、遷掌内記、參詳不倦、遂承密記。

とあり、『本朝高僧伝』卷二七「京兆南禅寺沙門居中伝」も、
一山・西圃、開法建長・円覚。鏡堂作偈賀二師来遊、副元帥平貞時、命諸山和之。中亦預焉。軸成、平帥求証於西圃。圃賞中偈曰、衆角雖多一麟足矣。平帥乃拳中侍客于巨福。及圃董董、掌内記。

という記事が存している。これは子曇の法を嗣ぐことになる大通派の高山居中（大本禅师、一二七七—一三四五）が一寧・子曇の来日を聞いてなした事跡である。遠江（静岡県）吉最県の源氏の出身であった居中は諸禅者に歴参した後、一山一

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

寧と西潤子曇が渡来して建長寺・円覚寺に開堂したのを聞いてその門に投じている。かつて無学祖元に随侍して日本に渡来した破庵派の鏡堂覚円（大円禅师、一二四四—一三〇六）が、一寧・子曇の来日に際して祝賀の偈を作ったとされ、執権の北条貞時が諸山の禅者に覚円の偈頌に和韻せしめており、居中もその詠者の一人に選ばれたとされる。「賀一山・西潤二師来遊」の頌軸が完成したとき、貞時はその証明を子曇に願っているが、子曇は諸禅者の作を読み、その中から居中の偈頌を取り上げて「衆角、多しと雖も、一麟にて足れり」と絶賛したとされる。このときの諸禅者の偈頌を軸装した頌軸は残念ながら現存に伝えられていない。もし、これが残されていれば、いままう一寧・子曇をめぐる来日の事情や、鎌倉に到着した直後の活動なども窺い知ることができたであろう。この頌軸に満足した北条貞時は居中を選出して建長寺の一寧のもとに掛搭させて侍客（請客侍者）となさしめ、さらに子曇が建長寺を董すると、居中はそのまま内記（書状侍者）を掌ったとされる。

円覚寺における広範な活動

行実：建治上皇、聽師道普、親降綸綽、咨問心要。師獻法語一段、上皇欽歎。居其寺四載。

東渡：建治上皇、聞其道普、特降旨問法。師奏对称旨、皇情

大悦。

延宝…後宇多上皇、親降_レ綸綽、咨_レ詢宗要。師_レ獻_レ法語一段、大協_二皇情_一。

本朝…後宇多上皇、親降_レ綸綽、諮_レ詢禪要。曇_レ獻_レ法語一段、大愜_二聖旨_一。

稽疑…建治上皇、聞_レ其道誓、特降_レ旨問_レ法。妻_レ對稱_レ旨、皇情大悦矣。

墨蹟…後宇多上皇、親ク綸綽ヲ降シテ、宗要ヲ咨詢ス。師、法語一段ヲ獻ズ、大二皇情ニ協フ。

子曇が円覚寺に入院して間もない頃の情報として、「大通禪師行実」にはつきのことき朝廷との関わりを伝える興味深い記事が載せられている。

建治上皇、師の道誓を聴き、親しく綸綽を降し、心要を咨問す。師、法語一段を獻するに、上皇、欽んで歎く。

諸伝記も概ねこれを受けているが、とくに『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』では、

後宇多上皇、親しく綸綽を降し、宗要を咨詢す。師、法語一段を獻するに、大いに皇情に協う。

と記されており、建治上皇とは大覚寺統の後宇多上皇（世仁、一二六七—一二三四、天皇在位は一二七四—一二八七）のことである点が伝えられている。後宇多上皇が院政を敷いたのは正安三年（一二三〇）一月から延慶元年（一二三〇）八月までの

間に当たっており、記事が正確とすれば、後宇多上皇が子曇と関わりを持ったのは正安三年の一月以降のことであり、しかも子曇が円覚寺に住持していた期間ということになる。これによれば、後宇多上皇は子曇の道徳を尊び、親しく綸旨を下して禅の教えの要諦を尋ねたことが存したものであろう。このとき子曇は法語一編を揮毫して献上したとされ、法語を読んだ後宇多上皇はその内容に大いに満足したといっているのである。このとき子曇が具体的に如何なる内容の法語を示したのか定かでないのが惜まれる。

あるいはこのとき後宇多上皇をはじめとする朝廷方としては、子曇を京都の禅寺に住持せしめようと画策したものであなかろうか。しかし、幕府側がこれを拒否し、ために子曇は法語のみを後宇多上皇に献じたとも解される。

かつて無学祖元に随侍して日本に渡来した破庵派の鏡堂覺円が『鏡堂和尚語録』巻二「偈頌」において、

次_二西潤和尚紫菜袈裟_一。

曉承_三釣使入_二烟霞_一、紫色伽梨賜_レ其佳、不_レ犯_二金針与_二絲線_一、打成一片可_二人_一詩。

という偈頌を残している。この「西潤和尚の紫菜袈の韻に次ぐ」の偈頌は、「紫色の伽梨、其の佳を賜う」とあるから、おそらく子曇が後宇多上皇から紫衣の袈裟を賜った際の偈頌に和したものであろう。

と云るで、「固山叢和尚行状」によれば、

二年庚子、師十七歳、諱「冲虚」。二月、出「高城」、上「洛陽」。三月末、京著、掛「錫於三聖寺無為和尚会下」。于「時清衆百七十七人也。義俊侍者自「鎮西」知音之間、一寮同脚。七月、之「相陽」
円覚寺、長老大通禪師也。其時望「掛搭」者、百餘人之中、三十餘人被免。于「時長老、拳「万法版」一「版」何処」之語。師曰、
黄鶴樓前鸚鵡洲、依「此許」掛搭。乾峰和尚、同時九月比也。

と記されている。正安二年二月に固山一輩は高城寺を辞して上洛し、三聖寺において聖一派の無為昭元（大智海禪師、一一四五—一一三一）に参じた後、七月には鎌倉の円覚寺に赴いて再び子曇のもとに投じている。このとき円覚寺の子曇のもとには一〇〇余人の入門掛搭の志願者が存したが、実際に掛搭を許されたのは三分の一に当たる三〇余人であったとされる。その際に子曇が題材に選んだのは、「万法は一に帰す、一は何処に帰す」という語であったとされ、一輩は「黄鶴樓前鸚鵡洲」と答えて入門掛搭を許されたとされる。ときに同じ（聖一派の乾峰土曇（少曇、広智国師、一一八五—一一三六）も一輩に遅れて九月には円覚寺の子曇のもとに投じたことが記されている^③。これは円覚寺の子曇のもとに多くの修行者が参集したことを伝えるものであるが、子曇が一山一寧と同じように参学の徒を偈頌の善し悪しで選抜していたことを示すものであり、先の嵩山居中の場合と共通して子曇が詩偈の作成を

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

門下に課していた一例として注目されよう。
同じく、「固山叢和尚行状」によれば、

三年辛丑、師十八歳、在「円覚寺大通会下」。最勝園寺殿被「差」湯薬侍者之時、被「書」三名字、曇始・冲虚・土信也。三人之内、始依「年臘高」任職也。後改「名字」守叢、而請「道号」於大通。七月九日、山叟運化、聞「円鑑受」東福寺之請、上洛。

とあり、正安三年の前半期も一輩は引きつづき円覚寺の子曇の会下に在つて修行している。このとき檀越の北条貞時（最勝園寺殿）が曇始・土信という二僧とともに冲虚すなわち一輩を侍者に任じ、とくに曇始が法臘がもっとも高かつたことから湯薬侍者に就かされたとされる。このとき一輩はそれまでの冲虚から法諱を守叢と改め、無中に換わる新たな道号を子曇に請うており、このとき子曇が与えたのが固山という道号であつたものと見られ、おそらく子曇が一輩に与えた道号頌も存したことであろう。この年の七月九日に聖一派の山叟慧雲（仏智禪師、一一三一—一一三〇）が示寂し、前年から受業師の蔵山順空が東福寺の住持に就任していたことから、円覚寺の子曇のもとを辞して上洛し、東福寺に掛搭して順空に随侍している。

また円覚寺には国宝に指定される銅造の梵鐘（洪鐘）が所蔵されており、総高二五九・五センチ、口径一四二・〇センチとなつているが、そこに子曇が住持として揮毫した刻銘が

記されている。いま、『鎌倉市史・考古編』（昭和三四年刊）の「鎌倉の古鐘」や円覚寺から出版された『瑞鹿山円覚寺』（昭和六〇年刊）に掲載されているものを踏まえて示してみるなら、およそつぎのごとくなる。

相模州瑞鹿山円覚興聖禅寺鐘銘

鶴岡之北、富士之東、有大円覚、為「釈氏宮」。恢「廓賢聖」、蹴「踏象龍」、範「困天地」、秦「籥全功」。銘「金去」鑄「煨」煉頑銅、成「大法器」、啓「袖昏蒙」。長鯨吼月、幽谷伝空。法王号令、神天景從、祐「民贊」国、植「德旌」忠、停「酸息」苦、超「越樊籠」、高輝「弘日」、普扇「皇風」。浩浩蕩蕩、声震「寰中」。

正安参年辛丑八月初七日。

本寺大檀那從四位上行相模守平朝臣貞時、勸縁同成「大器」。

当寺住持伝法宋沙門子曇、謹銘。

勸進耆旧僧宗証。奉行兵部丞橘朝臣邦博。

兵庫允源朝臣仲範。大工大和権守物部国光。

掌財監寺僧、至源・道處。

皇帝万歳、重臣千穉。

此月十七日巳時、大鐘昇、樓洪首發、虚謹具「名目于后」。

喜捨助縁善信共、壹千五百人。

本寺僧、貳佰五十員。

大耆旧、慧寧・覚眼・宗証・道範・宗英。

頭首、覚泉・覚俊・師侃・玄挺・崇喜・道生・性仙。

知事、聡因・智定・可玆・至牧・文順・元安・祖安。
西堂、徳熙・自聡・徳義・徳詮・源清・志遠。
当寺住持宋西澗和尚子曇。

風調雨順、国泰民安。

これによれば、子曇は正安三年（一一三〇）八月七日に円覚寺現住としてこの「相模州瑞鹿山円覚興聖禅寺鐘銘」を撰していることが知られる。施主の大檀那相模守貞時とはときの執権であった北条貞時であり、喜捨の信者一五〇〇人、円覚寺の僧衆二五〇人という多くの道俗の助縁を得て大梵鐘鑄造の大事業がなされた事実が知られる。また大工の物部国光（大和権守）は当代随一の鑄物師の棟梁として知られ、円覚寺の梵鐘がその最後にして最大の作とされる。この梵鐘は一〇日を経て八月一七日の巳の刻に初めて打ち鳴らされることが記されている。

当然、梵鐘鑄造の起案は落慶に先立つ数ヶ月前には開始されていたはずであるから、おそらく北条貞時は子曇の入寺とともに造立の発願をなし、多くの道俗の賛同を得て事業が推進されていたものであろう。興味深いのは子曇が「当寺住持伝法宋沙門子曇」ないし「当寺住持宋西澗和尚子曇」と自ら記している点であって、あくまで「大元沙門」ではなく「大宋沙門」としての自負を心に持ちつつつけていたことが改めて窺われる。

この梵鐘銘には大書目として慧寧・覚眼・宗証・道範・宗英の五名、頭首位（西班衆）として覚泉・覚俊・師侃・玄挺・崇喜・道生・性仙の七名、知事位（東班衆）として聡因・智定・可珂・至牧・文順・元安・祖安の七名、さらに西堂位として徳熙・自聡・徳義・徳詮・源清・志遠の六名の名が記されており、当時、円覚寺の子曇のもとに集っていた人々の名が具体的に知られるのは貴重であらう。さらに寺内の大衆（修行僧）の数が二五〇人であったことを伝えており、当時の円覚寺の規模が知られて興味深い。

ところで、『鎌倉年代記』の「執権」の「貞時」の項によれば、
正安三、四、十二、叙「從四上」。同年、八、廿三、出家 卅一。
法名崇暎、改「崇演」。

と記されており、北条貞時は正安三年四月二二日に從四位下に叙せられた後、八月二三日には出家しており、法名は初め崇暎、後に崇演と改めている。貞時の出家は円覚寺梵鐘の完成から僅か半月後のことであり、出家した当時の崇暎というのが、あるいは子曇による命名であったのかも知れない。

さらに先に触れた破庵派の鏡堂覚円の『鏡堂和尚語録』巻二「偈頌」には、

重陽日述呈「瑞峯西澗和尚」是日円覚喫「粽」。

汾陽玄要強分張、讓較「新聞菊蕪黃」、争似「瑞峯交栗粽」、和
西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

盤撥出与「人嘗」

という子曇に寄せた偈頌が載せられている。この「重陽の日述して瑞峯の西澗和尚に呈す 是の日、円覚にて粽を喫す」の偈頌は、九月九日の重陽の日に、覚円が親しく円覚寺に到つて子曇と会い、ともに交栗の粽を喫した消息を詠じたものである。同じく『鏡堂和尚語録』巻二「偈頌」には、

寄「西澗和尚」。

昨得「趁」風接「笑譚」、灼然崖蜜未「為」甘、中華二十年來事、何
翹迷「途遇」指南。

という偈頌を子曇に寄せている。この「西澗和尚に寄す」は何時のものか定かでないが、「中華二十年來の事」とあるから、二〇年前に覚円が無学祖元に随侍して日本に赴く際に、日本から帰国した子曇と交遊が存したことを伝えるものと見られる。いずれにせよ、覚円は再来日した子曇を円覚寺に訪ね、久々の再会を喜んだものであらう。

一方、大覚派の約翁徳儉の語録である『仏燈国師語録』巻下「偈頌」にも、

次「西澗禾上謝」太守惠「建蓋頌」。

提「起玻璃」已「再」三、分明垂「釣」在「深潭」、舌頭若具「通方眼」、一
囉方回苦口甘。

という子曇の作に和した偈頌が載せられている。これは太守すなわち北条貞時が子曇に建蓋を惠贈した際に、子曇が感謝

の偈頌を作り、さらに徳儉がそれに和韻したものである。時的には子曇が円覚寺に住持していた期間と見られ、かつて入宋して杭州浄慈寺の石帆惟衍に参学した経験を持つ徳儉は子曇との久々の再会を喜んだことであろう。

また内閣文庫所蔵『禅林僧伝』五には、楊岐派（法燈派祖）の無本覚心（心地房、法燈円明国師、二〇七—二九八）の伝記史料である「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」が載せられているが、その撰者が子曇であることが知られる。「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」の全文を示すならば、およそつぎのようである。

鷲峰開山法燈円明国師塔銘

西圃和尚製并書

永仁戊戌十月十三日、住持鷲峰山西方院、覚心禪師遷寂。塔全身舍利於院之西。其徒心開、繼躡院事、一日過余於瑞鹿山円覚、且欲需文以銘其事。余因循延坐、歴扣其詳。迺師於承元丁卯、出信州神林果常澄氏。母祈戸蔵豊仏、一夕夢感、仏自手燃燈以授之、已而有娠。及生、英氣逼人、略無經世意。十五、依神宮院主習読、頗知其要。十九薙髮、詣東大寺、登壇受具。即登高野山、染指教密。因謁金剛三昧院勇公、幡然易服。遇勇居龜山、令歸堂司。年二十九、復究密宗玄旨於和州三輪道法師。三十六、依深草元和尚、受菩薩戒。宝治戊申、四十有一、自知從前学解非究竟法、遂入洛依勝林寺天祐順和尚、探究禅要、久而稍知

蹊径。建長己酉、遂附船跨巨宋。首至補陀、登陸迤邐。越双径、礼癡絶和尚、高一单於広衆、無事不出僧堂。以機語未契、更調道場荆叟和尚。後東遊四明、掛錫育王。後因止天台、礼応真供養有感。偶覩壁間所書念起是病、不統是業、正抓着痒处。回登大梅山、礼常禅師塔。乃邂逅本国源心者、以曩曾参、遂問久参此地、遭遇明眼知識也無。心云、護国仏眼、一代明師、可往参見。乃相率同往。仏眼見而問曰、汝名什麼。師云、覚心。眼即示以偈云、心即是仏、仏即是心、心仏如々、亘古亘今。与師酬对数回、即蒙印可。復召師曰、汝来太遲生。師遂問云、抛却一切、以何示人。眼云、覲箇覲底。師便礼拜辞出。眼以对御録付師。甲寅春、復詣護国告別、求示末後句。眼云、覲便了。復以月林和尚語并無門関二冊授之、并偈曰、心即是仏、仏即心、心仏元同亘古今、覚悟古今、心是仏、不須向外別追尋。又請頂相贊曰、用迷子訣、飛紅爐雪、一喝当鋒、崖崩石裂。化生蛇作活龍、点黄金為生鉄。去縛解粘、抽釘拔楔、更將仏祖不伝機、此界他方俱漏泄。師便辞出、跨商舶以帰。及海之半、風濤為難、集衆称念観音、有瑞相現。月輪于帆上、頃刻風波自息。尋至博多津焉。後詣高野、擢為第一座。明年、附水晶数珠于仏眼。又明年、繼躡金剛三昧院、瓣香為仏眼拈出。其時、仏眼有回偈云、百八摩尼顆々円、遠天鼻孔一音穿、恒河沙数仏菩薩、每日呼来跳一圏。

越二年、五十二歳、乃通「嗣書」于「仏眼」。復遊「紀州」鷲峯、勝然有「終焉之心」、就而開山、聿成梵宇。此山常有「妖鬼」、從者二百、每「至惱人」。師至、一夕「摧伏之」、為授「五戒」、遂寧息。庚申歳、得「仏眼書」併「法衣一頂」。七葉園、賜對「十段錦」。月林体道銘等、「誨語」諱々無出此也。戊辰歳、相州龜山、以「主席」招致於師、「固辭不赴」。弘安庚辰、時七十有四、「登熊野妙法山」、白曰「忽有星斗現」、空祥雲橫、峰之異。辛巳春、当「禅林法皇」治園、三馳「詔書」、令住「京之勝林」、復召對以探「禅要」。師深談「入理」、宏辯「錯縱」。法皇始知「宗門有過」量事。由是、学徒奔趨、如「水赴」擊、賢愚咸仰以帰。不一季、潜回「鷲峰」。正応辛卯、八十五歳矣。忽青冥中聞「霹靂」大震一声、於「東嶂」雨「宝珠一顆」、大地震動、声聞「四十里」。乃以此「珠鎮」之山門。永仁乙未、八十九歳、徒衆数百、各捐「囊橐」、為「師建」寿塔於都城之西仁和寺側、「扁其庵」曰「歲寒」、迎「師說法」。繼白欣魁。于時、法皇厚礼迎請、「咨詢法要」。師咸以「妙辯」、登對啓悟、皇情大悅。復還「鷲峯」。師凡有「參問」履「踐」此道者、「即示以」趙州無話、「一切善惡」、都莫「思量」、念起即覺之語。諸宗異学、至皆扣「其本宗之美」。就其偽妄、「以单伝之旨」接之。創院二十年来、所度僧不「計數」。凡接「施利」、皆歸「常住」、一物不「蓄」、類舊老屋、不「數」十楹、「羹藜飯」麦以自処。地雖「僻絕」荒寒、而登「門者」參扣無「虛日」。或則裹糧「誅茅」縛屋樹下、為「法之故」、忘「軀相依」、歲不下「千指」。凡四十年若此。戊戌四月十一日、「偶起」微疾、「即不食」。繼白省

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

間、「統統不絶」。侍僧乃扣、「凡宗師臨」行多「遺偈」、和尙如何。師云、「我生不好」為「頌」、今豈作哉。至「月末」、稍寢安、「对機」雄辯如常。十月十三日、「自旦至夕」、与「道俗」酬問激励。至「子時」、肅歛「威儀」、端坐寂然。侍僧見「神色有異」、遂請問、「師告」終歎云、「諾」乃泊然而逝。繼素奔趨、「充塞」山林、「恋慕」啼号、「如失」父母。龜留八日、「凝然不動」。氣兒如生。茶毗獲「五色」設利。寿九十二。臘七十有四。就塔于本山、「庵」曰「思遠」、塔号「寂光」、乃係之「以銘石」。

仏祖瑞世、「神天」罔測、「物以縁心」、願以「悲得」。我々鷲峰、有大知識、「出現」人間、「為」物作「則」。妙辯縱橫、「王臣」仰德、「弘化」群迷、「破」除癡惑。「指」道見源、「悟」機投跡。飄蕩凡籠、「優入」聖域。「法不」久住、「潜帰」空寂、「歛」容告終。「泊然」屏息。八日茶毗、「設利」五色、「輝映」乾坤、「本光」常寂。窅塔巍々、「天神」擁翼、「千古」儼存、「宜」劍「諸石」。

この伝記史料は具體的にいつ書かれたものかは定かでないが、子曇が円覚寺に住持していたときの作であることが知られる。すなわち、子曇は撰述の経緯を、「鷲峰開山法燈」円明国師塔銘の冒頭において、

永仁戊戌十月十三日、「鷲峰山」西方院に住持せる覚心禅師、「遷寂」し。全身舍利を院の西に塔す。其の徒心開、「院事」を継踵す。一日、余を瑞鹿山円覚に過ぎ、「且つ」文を需めて以て其の事を銘せんと欲す。余「因循」して座を延べ、「其の詳」しきを歴扣す。

と自ら記している。これによれば、永仁六年（一二九八）一〇月一三日に紀伊（和歌山県）由良荘の鷲峰山西方院（後の西方興国禅寺）において楊岐派（法燈派祖）の無本覚心が示寂しており、その全身舍利が西方院の西に建塔されている。覚心は信濃（長野県）神林県の常澄氏の出身であり、黄龍派の退耕行勇（莊嚴房、一一六三—一二四一）に参随し、深草の興聖宝林寺において永平道元（仏法房、一一〇〇—一二五三）から菩薩戒を授与されており、入宋して楊岐派の無門慧開（仏眼禅師、一一八三—一二六〇）に参じて法を嗣いで帰国している。その後、由良の西方寺を中心に化導を敷き、その門流は法燈派として一大勢力を形成している。

その後、覚心の後席を継いで西方院に住持した法燈派の心開鐵関が鎌倉の円覚寺に親しく子曇を訪ね、覚心の開山塔院である思遠庵寂光塔に文を請い、覚心のために塔銘を記してほしい旨を告げている。子曇自身は覚心その人を全く知らなかったため、しきたり通りに鐵関を招き入れ、鐵関から覚心の事跡を詳細に聞いたものらしく、やがてまとめ上げたのが「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」なのである。しかも子曇はこのとき自ら全文を浄書して鐵関に呈示したものらしいが、残念ながら子曇直筆のものは現に残されていない。また子曇が撰述した塔銘は鐵関によって立石され、西方院の西隅の一角に覚心の墓塔に沿うかたちで存したことであろう。ただ、

子曇は実際に西方寺を訪れた形跡は見られず、おそらくこのとき鐵関がまとめた覚心の「行状」の「ときものが先に存し、それを参照して「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」をまとめているのかも知れない。

もっとも、覚心に後醍醐天皇（尊治、一二八八—一三三九、在位は一二八八—一三三九）から法燈円明国師の勅諡号が下賜されたのは、子曇が塔銘を撰して後のことであるから、子曇が実際に撰述した当時の表題は「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」ではなく、おそらく「鷲峰山西方院覚心禅師塔銘」といったものであったと見られる^⑧。

覚心に関する伝記史料としては、覚心の法孫に当たる法燈派の自南聖薫が大部の『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』を編集するのが南北朝時代の後期であり、すでに覚心が示寂して八〇年も経つてのことである。また法燈派の在庵普在（仏恵広慈禅師、一二九八—一三七六）の門人として入元（あるいは入明か）した日岩一光の依頼で撫州（江西省）金谿県西北の疎山白雲禅寺の住持であった雲林師啓（仏心真恵溥照大禅師）が「興国開山法燈円明国師塔銘」を撰したのも元末明初のことである。それらに比すれば子曇が「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」を撰したのは覚心が示寂して僅か数年後のことであるから、その面では覚心に関する最も古い貴重な伝記史料といふことになる^⑨。

また同じく法燈派の東海竺源（法公安威禪師、一二七〇—三四四）の伝記史料である「東海和尚行実」によれば、

南院国師主「南禅」日侍客、及「于司」蔵鑰、屈「書雲節」、对「衆衆」私罷。龜山太上法皇、不勝「睿感」、幸弊寮加嘆、一衆無「不驚」異焉。大通住「円覚」日、依「檀越元帥之命」、重知「蔵做」。

という記事が存しており、『本朝高僧伝』巻二六「京兆建仁寺沙門竺源伝」にも「西徇曇公主「円覚」日、平帥招「源以」典蔵」と記されている。竺源は紀伊の藤原氏の出身であり、由良西方寺の無本覚心のもとで出家得度し、京都の南禅寺において仏光派の規庵祖円（南院国師、一二六一—一三三三）のもとで蔵主を勤めた後、円覚寺に赴いて檀越の北条貞時の命で子曇の席下において重ねて蔵主を勤めている。

このように子曇は円覚寺で大いに接化をなしていたわけであるが、その後、何らかの理由で正安四年（一一三〇）一〇月に円覚寺の住持を退いたものらしい。すなわち、「一山和尚行記」には、

会曇西潤謝「鹿山事」、府命令「師権」之、両山一矩、衆望冀如也。已而辞「建長」、独正「円覚席」。

という記事が存し、実際に、『一山国師語録』「兼住相模州瑞鹿山円覚興聖禅寺語録」には、

師、於「正安四年十月十一日」入院。指「山門」。尽大地是円覚伽藍。願「視左右」云、「爾既入作無「門」、今日爲通「線路」。嗚。

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

として入院の法語が記されている。これによれば、子曇が退住した後、幕府の命で建長寺の住持であった一山一寧が円覚寺を兼務する状況となったことが判明する。「大通禪師行実」には「其の寺に居すること四載なり」とあるから、子曇が円覚寺に住持していたのは正安元年一〇月から正安四年一〇月までの足掛け四年間であったことになろう。この点は、『夢窓国師年譜』の「後二條天皇乾元元年壬寅」の箇所にも「冬、一山兼管「円覚」、師随侍而遷、其志在「朝夕參詣」爾」とあって、正安四年（一一三二）二月二日に乾元と改元（一）の冬に一寧が円覚寺を兼務した際、仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石（朴訥子、夢窓正覚心宗国師、一二七五—一三五二）も一寧に随侍して円覚寺に赴いていることから確かめられる。ただし、このとき疎石が一寧のほかには寺内の一角に寓居したと見られる子曇にも参じる機会が存したか否かは定かでない。

さらに実際に、『一山国師語録』巻上「兼住相模州瑞鹿山円覚興聖禅寺語録」には、

謝「東堂西潤和尚」上堂。諸仏強出頭、諸祖妄生「事」、病痛雖「一般」、脈息亦有「異」。逗「倒瑞鹿峯前」、自然別有「道理」。任是仏病「祖病」、一切衆生心病毛病、万病總教「脱然同到」大安樂地。見麼。緑水青山自在身、菩薩神通暫遊戯。

という上堂が収められている。一寧が円覚寺七世として入院した頃、子曇は一時期ながら住持の座を辞して東堂（隠居）

として寺内の一角に居していたことが知られる。この「東堂の西潤和尚を謝する上堂」では「仏病祖病」とか「心病毛病」「万病」といったことばが見られるから、このとき子曇は何かの病によつて住持を退き、建長寺の一寧が円覚寺の住持をも兼務することになつたものであろう。

このとき東堂（隠居）となつた子曇が何れに居していたのかは定かでないが、円覚寺山内の一隅に留まつていたものが、または後に最期を迎える円覚寺門前の正観寺に寓居した可能性も存しよう。いずれにせよ、子曇は一時期ながら東堂として円覚寺の一角に居して病身を押しして一寧の助化をなしていたことにならうか。

巨福山建長寺への陞住

行実：嘉元改元癸卯、移_二建長_一。

元亨：移_二建長_一。

東渡：嘉元元年、移_二建長_一。

延宝：遷_二建長_一。後宇多上皇、親降_二綸綽_一、咨_二詢宗要_一。師献_二法語一段、大協_二皇情_一。

本朝：嘉元元年、遷_二建長_一。四更歳序、緇白帰_二挹益多矣_一。

稽疑：後_二一條院嘉元元年癸卯、移_二建長_一。

墨蹟：建長_二遷_二元_一。後宇多上皇、親_二ク綸綽_一ヲ降シテ、宗要_二ヲ咨詢

入。師、法語一段ヲ献ズ、大二皇情_二協_二フ。

ところで、「大通禪師行実」および「東渡諸祖伝」によれば「嘉元改元癸卯、建長に移る」とあり、「本朝高僧伝」にも「嘉元元年、遷りて建長を董す」とあるから、その後、嘉元元年（乾元二年、一三〇三）に至つて子曇は巨福山建長興国禪寺の住持に就任していることが知られる。

『扶桑山日記』三、「相陽巨福山建長興国禪寺」の「住持位次」によれば、

第十、西欄禾上、諱子曇、謚大通禪師。嗣_二石帆_一。

とあり、子曇は建長寺の第一〇世となつたことが知られており、この点は「大通禪師行実」の具名が「大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禪寺第十代勅謚大通禪師行実」であることから確かめられる。おそらく嘉元元年に子曇が入寺するまで一寧が建長・円覚両寺の住持を兼務していたものと見てよいであろう。乾元二年は八月五日に嘉元と改元されており、「大通禪師行実」の記事が年時を正確に記しているとすれば、子曇が建長寺に入院したのは八月五日より以降といふことにならうか。

また『本朝高僧伝』には子曇の建長寺における活動として、とくに「四たび歳序を更え、緇白の帰挹すること益ます多し」と記されている。歳序は一年間（四季）の巡り合わせのことであるから、子曇が建長寺に住持していた期間は四年間に及んだことが知られ、また帰挹とは帰依の意であるうか

ら、緋白すなわち多くの道俗が建長寺の子曇のもとに参学したことを伝えている。ただし、『延宝伝燈録』と『墨蹟祖師伝』が後宇多上皇と関わりを持ったのを建長寺での事跡とするのは誤りであつて、すでに触れたごとく円覚寺住持期における消息である。

先に円覚寺で子曇に参学した聖一派の固山一輩が建長寺に到つて再び子曇に随侍している。「固山輩和尚行状」には、

(嘉元)二年甲辰、師二十一歳、春退侍者。八月、鎌倉下向、
惠丘首座同行。建長寺西澗会下掛搭、此時名字改「一」之字。後
深草院。七月十六、崩御也。三年乙巳、師廿二歳、双峰自「円
覚寺首座着旧、而鎮西横岳入院。此時焼香侍者也。閏臘八日入
寺。

とあり、京都の東福寺に修行していた一輩が嘉元二年(一一三〇)八月に首座の惠丘とともに鎌倉に下向し、建長寺の子曇のもとに掛搭している。ともに参じた惠丘についてはその詳細が定かでないが、このとき一輩はそれまで名乗つていた法諱の守輩を一輩と改めており、その改名が子曇の示唆に依るものであつたものらしい。一輩が建長寺の子曇のもとに留まつていたのは一年有余のことであり、円覚寺首座の着旧の地位で、聖一派の双峰宗源(達原、双峰国師、一一六三—一一三五)が筑前(福岡県)大宰府の横岳山崇福寺の住持に任せられたため、子曇のもとを辞して宗源に随侍して鎮西(九州)

に下り、嘉元三年(一一三〇)閏二月八日に宗源の入寺に焼香侍者を勤めていた。

一方、嘉元三年正月には聖一派の鉄牛円心(一一五四—一二二六)が建長寺の子曇に書簡を呈し、亡き円爾に対して勅諭降下の斡旋方を請うている。鉄牛円心といえは、久しく晩年の円爾に随侍し、円爾の亡き後に『聖一國師年譜』一巻を編集した高弟として知られる。すなわち、京都の東福寺には南北朝期に固山一輩と同門に当たたる聖一派の大道一以(一一九二—一二七〇)が書写した「鉄牛円心尺牘案」として、

、端肅加拜、申「裏建長堂上西澗和尚禪師尊前。維時孟春、
共性統衆、衆敵肅、龍天叶贊、法候起居万福。鄙邦老僧、触事
乖膺、濫領一刹、取「晒方外。自「慈航東濟之後、仏法重任、
力荷匡持、歲月彌久、関山迢遞、未「由「簷会、徒有「坐「井觀、
天之嘆。先時不「揣疎漏、曾具「柔訥、聞「候函席、諒蒙矜覽、
仰恃寛容、統有「申「瀆。先師存日、曾預「無準老師丈室一人之
列、痛受「鍼藥。歸來開「山、演「法不「墜「祖綱、以「其梯「山航、
海、足爾形疲、逝去已遠。餘殃剝孽、枝蔓未「除、概念已「遷、
未「蒙「國諡興「言。及「此、良切愧傷区々以「此旨「披露、殊蒙「
軫愛於師幕之前、不「倦「褒弘、不「惟先師影室生「輝、而乃子
乃孫百世之下、咸「拜「提獎之德、實難「弭忘。仍冀「養「毓道体、
前「遊「禎祥、以副「卑祝。京中如有「委令、毋「吝「行下、臨「紙
不「莊。伏乞、原照不宣。右謹具申呈。

嘉元三、正月日、^(62B)代劄子。

という尺牘が所蔵されている。すでに円爾が示寂して二六年もの歳月が経過しており、円心は博多の承天寺の第二世であり、嘉元三年の当時はすでに承天寺の住持を退いていた時期に当たるが、亡き円爾に国師号の下賜を願うべく、鎌倉幕府の同意を得るため建長寺の子曇に斡旋を請うている。おそらく二十七回忌に向けて亡き円爾に国師号下賜の斡旋を依頼したものである。これは子曇と後宇多天皇との交誼を踏まえてなされたものである。実際に円爾に聖一國師の勅諡号が宣下されたのは応長元年（一一三二）二月二十五日のことであり、子曇が遷化して五年余を経て後である。

さらに同じ年の五月一〇日には京都東山建仁寺の住持であった破庵派の鏡堂覚円が自坊である建長寺山内の靈光庵のことについて建長寺住持の子曇に後事を託している。すなわち、「鏡堂覚円尺牘写」として、

覚円、頓首再拜、申、累巨福堂上西嗣老師大和尚侍者。覚円、前者便中、謾以「蒼茗」申献、返沐「瓊報」、登受感「愧不」已。聞知、同躰康勝、内外雍肅、蓋道德所「感」而然也。欽羨、欽羨。聞東兵革擾攘、不「無」驚恐。但大檀那安然無事、冥吾門之幸也。茲特遣「僧」到「彼」下「書」之次、姑此拜謝、不肖塔頭之事、甚荷掛同意。但特不「相偶」、待「世間」靜定之後、諸方聚「会府中」之時、「却望和尚罪言為」幸末「間、更冀為」法珍重。不宣。

五月十日、建仁郷末比丘覚円、頓首拜覆。

という書簡（尺牘）が建仁寺の禅居庵に所蔵されている。文中にある「関東の兵革」とは、嘉元三年五月四日に執権の北条貞時が内管領の北条宗方（二七八—一三〇五）を誅殺した消息を語るものであり、そのわずか六日後に覚円は建仁寺の住持として大檀那の貞時の無事を慶び、世間の治安が治まつてから、ともに再会したい旨を建長寺住持の子曇に告げている。この頃の子曇は体調も整い、建長寺住持としての活動も無難に熟していたものらしい。

また戦国末期に鎌倉山内の福源山禅興寺の住持であった無隠法常によつて著わされた『湘南葛藤集』の「第六十四則画美人」に、

正安元年四月八日、深田貞朝、建長寺ノ降誕会ニ參詣之次、大通室ニ入參ス。時ニ一美人ノ宋画、靈昭女ヲ見テ、西澗和尚ニ問テ曰ク、其レ何人ゾ。師便チ靈昭女ノ機縁ヲ語ル。公、之ヲ賞観シテ曰ク、斯画洵ニ遍リテ美妙ヲ尽クセリ、斯女、現ニ大宋国ニ在リヤ。師曰ク、何ゾ大宋ト云ハシ、現ニ日本国ニ在リ。公曰ク、什麼ノ処ニ在ルヤ。師、高声シテ曰ク、貞朝公、応諾ス。師曰、什麼ノ処ニ力有ル。公、言下ニ旨ヲ領ジテ礼拜ス。

抄シテ曰ク、貞朝入道方、言下ニ旨ヲ得シ機、作麼生。此機縁ガ公案ト成リシハ、道菴和尚ノ室内商量ニ始マル。

という逸話が載せられている。これによれば、正安元年（一二九〇）四月八日に深田貞朝（入道）という武士が建長寺の降誕会（仏生日）に参詣し、子曇の方丈に入室したとされる。ただ、子曇が再来日したのは正安元年八月のことであり、円覚寺に住持したのは一〇月であるから、仮に正安元年の消息とすれば、円覚寺のできごとということになり、建長寺での消息とすれば数年後のことにならう。

このとき深田貞朝は方丈で靈昭女の宋画を見、子曇に絵の人物が何者なのかを尋ねている。子曇は靈昭女が馬祖門下の龐蘊（道玄、龐居士、？ 八〇八）の娘であり、その機縁を貞朝に説明している。貞朝はその宋画がきわめて美しく靈昭女を描いているのを目の当たりにし、大宋国にはこのような美女がいるのかと質している。このとき子曇は大宋国のみでなく日本国にもいると告げると、貞朝はどこにいるのかと詰め寄る。すると子曇は声を張り上げて貞朝の名を呼ぶ。貞朝が応諾すると、子曇は「どこにいるか」と一言告げる。このとき貞朝は言下に旨を領じて礼拝したというのである。これはおそらく靈昭女に準えて、貞朝自身の汚れなき仏性に目覚めさせた子曇の活作略と解してよいだろう。

この話頭が史実を伝えたものか否かは定かでないが、道菴和尚というのは仏光派の無礙妙謙（仏真禪師、？ 一三六九）に参じて法を嗣いだ道庵曾頭のことと建長寺の第一〇五世

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

（二に第一〇〇世）となっており、この人によつて公案として位置づけられ、参究されるようになったと伝えられている。このほか内閣文庫本『双峰国師語録』に付される「双峰国師年譜略」によれば、

弘安六年癸未、二十四歳、如相陽、謁仏光於巨福、光俾典内記。尋周旋仏源・大通・一山・寂庵之門者、二十年。所至命以版首、大通・寂庵者、推折而分座説法。嘉元三年乙巳、四十三歳、冬、府帖、自円覚耆旧、住筑横岳山崇福禪寺。閏臘月八開堂、一齋記「聖一之乳」。

という記事が存している。これによれば、東福寺の円爾の晩年に得度を受けた双峰宗源（達原、双峰国師、一二六三—一三五）は、弘安六年（一二八三）に鎌倉に赴いて無学祖元に謁して内記を掌つており、その後、大休正念（仏源禪師）さらに子曇・一寧の渡来僧および黄龍派の寂庵上昭（宏光禪師、一二二九—一三二六）に参ずること二〇年に及び、至るところで命ぜられて首座（版首）となり、とりわけ子曇と上昭は推挙して分座説法せしめたとされる。ただし、残念ながら、宗源が子曇や上昭のもとでなした乗弘法語は『双源国師語録』にも収められていない。

宗源は嘉元三年の冬に府帖により円覚寺の耆旧として筑前（福岡県）の横岳山崇福禪寺に赴き、二月八日（臘八）に開堂出世して円爾に嗣承香を焚いている。宗源が子曇に参じた

のは円覚寺における消息ではなかつたかと思られるが、明確ではないのでここに載せておくことにしたい。

また「日本国京師建仁禅寺高山照禅师塔銘」によれば、法燈派の高山慈照（心鏡、広濟禅师、一二六六—一三四三）は由良西方寺の無本覚心の法嗣であるが、京都の九重山万寿寺にて南浦紹明に参じた後、鎌倉に下向して乾明山万寿寺で高峰圓日に参学しており、それに「つづく記事として、

又調「寂庵照禅师於寿福、久闍（師名、命居）扱木寮、継掌」内記。周「旋建長・円覚両刹、西潤曇公・一山寧公、朝燬夕煉、金無留」續矣。

と記されている。この点は『本朝高僧伝』巻二六「京兆建仁寺沙門慈照伝」においても「厠跡建長・円覚両刹、曇西圃・寧一山、一揆一撈、追琢金玉」とある。慈照はさらに寿福寺において黄龍派の寂庵上院に謁しており、ついで建長寺と円覚寺でそれぞれ子曇と一寧のもとで朝夕に研鑽に努め、両者から厳格な指導を受けてすぐれた禅者として鍛え上げられたとされる。

同じく法燈派の孤山至遠（広照禅师、一二七八—一三六六）も無本覚心の最晩年の法嗣であるが、この人も一寧や子曇に参学していることが知られる。『延宝伝燈録』巻一五「京兆建仁孤山至遠禅师」の章によれば、

周「遊諸刹、謁約翁俊于建長、侍香主藏。又見清拙澄・一山

寧・西圃曇、悉承許可。嘗謁明極俊、需法燈真贊。」とあり、『本朝高僧伝』巻三一「京兆建仁寺沙門至遠伝」において、

去遊諸方、謁約翁俊禅师於建長、命侍焼香、尋典藏教。（中略）見明極俊禅师、需法燈国師真贊。（中略）見清拙澄・一山寧・西圃曇諸大老、罔不蒙許可。

と記されている。おそらく状況からすると、至遠は大覚派の約翁徳俊に師事した後、子曇や一寧にも参じたものらしいが、子曇のもとに投じたのが円覚寺であったのか建長寺であったのかは定かでない。その後、至遠はさらに渡来僧の清拙正澄にも参じ、また明極楚俊にも謁して無本覚心の頂相に祖贊を得ていることが知られる。

さらに曹洞宗永平下の大智（一二九〇—一三六六）も建長寺において晩年の子曇に参学したもののようである。『大智禅师逸偈行録』の「祇陀大智禅师行録并序」をはじめとする大智に関する伝記史料では明確でないが、大智のことはをまとめたと認められる大阪市陽松庵所蔵「天童覚和尚小参鈔」巻三には、

日本国二八、予十六歳ノ時、建長寺ニ掛搭シテヨリ、二十七歳マテ建長・円覚ニ在シ時、云々。

という記事が存しており、さらに注目すべきは同じ「天童覚和尚小参鈔」巻三に具体的に、

予、西圃和尚、建長二住セシ時節、予年十六歳、体首座受_二天皇請_一。

という記述が伝えられている。大智は肥後（熊本県）長崎の人であり、幼くして曹洞宗の寒巖義尹（法王長老、一二七一—一三〇〇）のもとで剃髪得度している。大智の一六歳は嘉元三年（一一三五）に当たっており、建長寺に掛搭した際の住持が子曇であったと述懐しているわけである。したがって、大智が鎌倉禅林で最初に参学したのは建長寺の子曇であつて、おそらく大智は最晩年の子曇のもとで掛搭を許され、短期間ながら親しく薫陶を受けたものと見られる。ちなみに体首座とは子曇の法を嗣いだ空叟思体のことであり、『大智禅師偈頌』には「送_二体長老赴_二天皇請_一」が収められているから、思体との交流はその後もつづいたことが知られる。また『延宝伝燈録』巻一六「相州建長了堂素安禅師」の章によれば、

十三、礼_二同源於保福、剪髮菓具_一。（中略）去遊_二円覚、謁_二西圃曇_一。圃曰、甚処来。師曰、鎮西。圃曰、見_二誰来_一。師曰、今日見_二和尚_一。乃許_二掛搭_一。圃常対_二衆称_一之。東明日和尚、董_二建長、招_二師分座_一。

という記事が伝えられており、『本朝高僧伝』巻二六「相州建長寺沙門素安伝」にも、

釈素安、号_二了堂_一。不考_二姓氏_一、筑之博多人。至_二年十三_一、礼_二

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

同原本公於州之保寧、披削菓具。参訊久之、一日辞_二原_一。原曰、何処去。安曰、参方去。原曰、参方事作麼生。安擬_二開口_一。原便打。安忽然開悟。去遊_二相州_一、謁_二西圃曇和尚于円覚_一。圃問、甚処来。安曰、鎮西。圃曰、見_二阿誰_一来。安曰、即今見_二和尚_一。圃休去。圃常対_二衆称_一之。東明日和尚董_二建長、延_二安居_一第一座。

と記されている。大覚派の了堂素安（本覚禅師、一二九二—一三六〇）は筑前博多の出身で、一三歳で郷里の保福寺に投じて大覚派の同源道本に参じた後、遊方して鎌倉円覚寺の子曇のもとに投じたとされる。ただ、ここで問題となるのは素安の一三歳が嘉元二年（一一三〇四）に当たることであり、それ以降に鎌倉で子曇に学んだとするなら、円覚寺ではなく建長寺であったと見なければならぬ。子曇と素安の問答は初相見の際のものであるが、若い素安の答えに満足した子曇のさまを伝えており、子曇は掛搭を許したのみでなく、常に一山の修行僧らに対して素安の器量を推称して止まなかつたとされる。素安が子曇に参じたのが史実であれば、子曇はいまだ弱齡の素安の度量を見抜き、その将来性を高く認めていたことにならう。

いま一つ『五山記考異 附_二住持簿_一』の「相州鎌倉府山内県巨福山建長興国禅寺」の箇所の「諸伽藍」には「山門建長興国禅寺、西澗之筆」という記事が存している。これ

によれば、かつて建長寺の山門に掲げられていた「建長興國禪寺」の寺号額は子曇が揮毫したものといつくことにならう。おそらく子曇が建長寺に入寺した際に、大檀越の北条貞時あたりが記念に願い、これに応じて子曇が自ら書筆したものを寺号額として刻んだのであろう。

正観寺への退居

行実：四年丙午冬十月、退居于正観。

東渡：徳治冬十一月、退居于正観蘭若。

延宝：徳治元年十月、退居于正観。

本朝：徳治元年冬十月、退居于正観精舎。

稽疑：徳治冬十一月、退居于正観蘭若。

墨蹟：徳治元年十月、正観二退居ス。

数年間にわたって建長寺の住持を勤めてきた子曇は、嘉元四年（一一三〇）一〇月に住持の座を辞している。「大通禪師行実」には単に「四年丙午冬十月、正観に退居す」とあるのみで理由などは記されていないが、状況的には体調の不振から煩瑣な大刹の住持職を勤めることができなくなり、自ら願って療養のために退居したものと見られる。これに対して、『東渡諸祖伝』より以降の伝記史料では、いずれも子曇が徳治元年の冬一〇月または一一月に正観寺に退居したと記している。嘉元四年は二月一四日に至って徳治と改元されてい

るから、正式には「大通禪師行実」が伝えている年次の表記が正しいことにならう。もっとも「大通禪師行実」「延宝伝燈録」「本朝高僧伝」「墨蹟祖師伝」が退居を一〇月のこととしているのに対し、『東渡諸祖伝』『二十四流稽疑』ではこれを一一月のことと伝えている。

このとき子曇が退居したとされる正観寺とは、鎌倉山内の円覚寺門外の一隅に存した小刹である。円覚寺に所蔵される南北朝時代に画かれた重要文化財「円覚寺境内絵図」によれば、円覚寺の山門（総門）に向かつて左側すなわち総門の堀の西側に接して「正観寺」とあり、正観寺の屋舎三棟から成る伽藍が描かれている。^②『元亨釈書』巻八「釈正念」の章によれば、

正念二年冬、寝病于鹿阜。十一月、益葦遷正観寺。二十九日、

集衆入室。晦執筆書曰、拈起須彌槌、擊碎虚空鼓、藏身

没影跡、日輪正当午。放筆而化。

とあり、正念二年（一一八九）の冬に病を發した仏源派祖の大休正念が一月に正観寺に遷住しており、月末の晦（三〇日）に正観寺で遺偈を残して示寂している。^③

ところで、『扶桑五山記』三「相陽巨福山建長興國禪寺」の「住持位次」によれば、

十一、無隠禾上、諱円範。謚「覚雄禪師」。嗣「大覚」。紀州人。

（下略）

とあって、大覚派の無隠円範（覚雄禪師、一一三〇—一一三〇七）が子曇の後席を継いで直ちに住持したかのごとく解されるが、このとき一時期ながら建長寺の住持を継承したのは前住の一山一寧にほかならない。一寧は「奥州御島妙覚菴頼賢菴主行実銘並序」において「巨福山建長禪寺住山、唐僧一山一寧撰」と記した後に、

徳治丙午冬、予再居「福山」。丁未春、有「僧匡心孤運、來礼謁言、（下略）予為銘。是歲三月十五日書。

と自ら記している。これによれば、徳治元年（実際には嘉元四年のことか）の冬に一寧は建長寺（福山）に再住しており、徳治二年（一一三〇七）春に奥州（宮城県）松島の御島妙覚庵から到った匡心・孤運の来謁を受け、三月一五日に「奥州御島妙覚菴頼賢菴主行実銘並序」を書き上げている。したがって、子曇が建長寺を退いて正観寺に退居した後、一寧がまもなく建長寺に再住していることが知られる。

この点は、「一山国師語録」巻上「再住巨福山建長興国禪寺語録」に「鏡堂和尚遺書至上堂」が収められていることからも確かめられる。嘉元四年九月二六日に京都で示寂した鏡堂覚円の遺書がまもなく建長寺の一寧のもとに届けられているのであって、その時点ではすでに一寧は建長寺に再住していることが知られる。おそらく覚円の遺書が一寧のもとに届けられたのは一〇月に入ってまもない頃のことであろうから、

このときは一寧は建長寺に入寺していたことになる。

ちなみに『海蔵和尚紀年録』の「徳治二年丁未」の条によれば、聖一派の虎関師錬が徳治二年（一一三〇七）の春に鎌倉に到って建長寺の一寧に参じており、一寧は四月二四日に建長寺を退居しているから、その後、無隠円範が入寺しているものである。したがって、子曇が正観寺に退いてから、約半年間にわたって一寧が建長寺に再住していたわけであり、また師錬が鎌倉に到った時には、すでに子曇は遷化した後であったことになる。師錬は直接に子曇その人を見知ることにはなかつたのであり、『元亨釈書』の子曇の章が表面的な内容のみで終わっているのも頷けよう。

この点、興味深いのは「円通大応国師塔銘」に、

徳治丁未、奉旨赴「関東」、留「正観寺」。而相州太守平崇演、請師即「誓所演」法。復敷養主「巨福山建長興国禪寺」。明年春、太上皇降「手詔」存問、恩礼優至。当「入寺」之夕、小参有「曰、今年臘月二十九日、来無」所来、明年臘月二十九日、去無」所去。衆驚訝、莫論其意。

とあり、徳治二年（一一三〇七）に旨を奉じて関東に赴いた南浦紹明も初め正観寺に留まっていることである。また「円通大応国師語録」巻下「巨福山建長禪寺語録」の末尾には「師初寓「正観寺」、仏成道日太守請就「府裏」拈香」が収められている。あるいはこの時期に紹明が建長寺の住持に招かれる

背景として、法從弟に当たる子曇が自らの亡き後を託すべき人材として法從兄の紹明を北条貞時（法名は崇演）に推挙していたのかも知れない。入寺の小參で紹明が子曇の遺偈のこゝとを引用しているのも興味深い。

示寂と後事

行実：二十八日凌晨、手書辞、副帥曰、子曇茲風火相逼、弗及、面遣、仏法正宗、全頼、一刀主盟、至囑。又写、偈曰、来無所從、去無所至、皎日麗天、清風匝地。抛筆便化。世寿五十有八。葬于伝燈菴。勅諡大通禪師、塔号「定明」。

元亨：徳治元年十一月二十八日滅。諡大通禪師。
東渡：二十八日凌晨、手書遣平帥曰、子曇茲風火相逼、弗及、面辭、仏法正宗、全頼、鼎力主盟、至囑。復書、頌曰、来無所從、去無所至、皎日麗天、清風匝地。擲筆而化。實徳治元年十一月二十八日也。春秋五十八。弟子奉遺殖、空於伝燈菴。四衆孺慕号哭之声、山林為之变色。勅諡号曰大通禪師、塔曰「定明」焉。

延宝：二十八日凌晨、手書辞平帥、因召門人囑後事。復書遺偈曰、来無所来、去無所去、皓日麗天、清風匝地。擲筆而脱。年五十八。諸徒奉遺殖、葬于福山伝燈菴。塔曰「定明」、勅諡大通禪師。

本朝：二十八日凌晨、手簡遣平帥曰、子曇茲風火相逼、弗及

面遣、仏法正宗、全頼、鼎力主盟、至囑。因召門人付後事。復書遺偈、擲筆而化。春秋五十有八。諸徒奉遺殖、葬于福山伝燈菴。塔曰「定明」、勅諡大通禪師。

稽疑：二十八日凌晨、手書遣平帥曰、子曇茲風火相逼、弗及、面辭、仏法正宗、全頼、鼎力主盟、至囑。復書遺頌曰、来無所從、去無所至、皎日麗天、清風匝地。擲筆而化。實徳治元年丙午冬十一月二十八日也。春秋五十有八。敕賜諡大通禪師。本朝行化、前後俱一十七年也。具見東渡諸祖伝卷上。

墨蹟：二十八日凌晨、手書シテ平帥ヲ辞ス。門人ヲ召テ後事ヲ囑ス。後、遺偈ヲ書シテ曰、来無所来、去無所去、皎日麗天、清風匝地。筆ヲ擲テ脱ス。年五十八。諸徒、遺殖ヲ奉シテ、福山ノ伝燈菴ニ葬ル。塔ヲ定朝ト云、敕シテ大通禪師ト諡ス。

正観寺に退居した子曇はまもなく最期を迎えている。「大通禪師行実」には子曇が示寂する前後の消息について、二十八日の凌晨、手書して副帥に辞して曰く、「子曇、茲に、風火相逼り、面遣するに及ばず、仏法の正宗、全く一刀の主盟に頼る。至囑」と。又た偈を写して曰く、「来たるに従る所無く、去るに至る所無し、皎日は天に麗き、清風は地を匝る」と。筆を抛ちて便化す。世寿五十有八。伝燈菴に葬る。勅して大通禪師と諡し、塔を定明と号す。

と。筆を抛ちて便化す。世寿五十有八。伝燈菴に葬る。勅して大通禪師と諡し、塔を定明と号す。

と伝えており、その最期の状況がいくぶん詳しく語られている。「大通禪師行実」によれば、子曇は嘉元四年（一一三〇）一〇月二八日に世寿五八歳で示寂している。これに対し、『元亨釈書』のほか後世の僧伝・燈史は、すべて徳治元年の示寂と記していることで一致している。実際は嘉元四年が一二月一四日に徳治と改元されているから、同じ年に当たっているわけであるが、子曇が示寂したのは改元される以前であり、厳密には「大通禪師行実」にいう嘉元四年とするのが正しい。

つぎに問題とすべきは示寂した日時であって、「大通禪師行実」のほか、『延宝伝燈錄』、『本朝高僧伝』、『墨蹟祖師伝』はいずれも一〇月二八日とする点で一致している。

また『鎌倉五山記』の「相州小坂郡山内県巨福山建長興國禪寺」の箇所には、

伝燈庵大通禪師、諱子曇、号西澗。嗣法石帆。台州人。正安二年來朝。世寿六十五年。徳治元年十月廿八日示寂。頌曰、來無所住、去無所至、白日麗天、清風匝地。定明 卯塔・瑞光門。

とあり、『五山記考異』の「巨福山建長興國禪寺住持位次」の箇所において、

第十一、大通禪師、嗣法石帆。諱子曇。号西澗。伝燈庵。徳治元丙午十月廿八日寂。

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

とあって、いずれも世寿の問題は別として、一〇月二八日を示寂した日とする点では「大通禪師行実」と同じである。

これに対して、『元亨釈書』では「徳治元年十一月二十八日に滅す。大通禪師と諡す」と記されており、子曇が示寂したのを一ヶ月遅れの十一月二八日と伝えている。この十一月二八日という説は『東渡諸祖伝』と『二十四流稽疑』が継承しているほか、『扶桑五山記』三、「相陽巨福山建長興國禪寺」の「住持位次」においても、

第十、西欄禾上、諱子曇。諡大通禪師。嗣石帆。大宋台州人。正安二年來朝。徳治元年十一月廿八日寂。寿六十五。塔于伝燈庵。頌曰、來無所從、去無所至、皎日麗天、清風匝地。

とあり、同じく『扶桑五山記』三、「相陽巨福山建長興國禪寺」の「諸塔」の「西欄派」においても、

伝燈庵。西欄禾上、子曇。諡大通禪師。嗣石帆。大宋台州人。正安二年來朝。徳治元年十一月廿八日、六十五寂。とあり、ともに建長寺の伝承であろうか十一月二八日を示寂の日と伝えている。ただし、同じ『扶桑五山記』四、「相陽瑞鹿山円覚聖禪寺」の「住持位次」においては、

第六、西欄禾上、諱子曇。諡大通禪師。嗣石帆。徳治元、十月廿八日。

とあり、「大通禪師行実」などと同じく一〇月二八日をもつ

て子曇の命日としている。

このように『元亨釈書』などはなぜか示寂年時を一月月遅い一月二八日と伝えているが、状況としては「大通禪師行実」にいう一〇月二八日の説を採用すべきである²²。

子曇は示寂に臨んで大檀越である執権の北条貞時に書簡を呈し、四大分離が間近に迫って面会することが契わないことを告げ、仏法の興隆のため今後も尽力してほしい旨を願っている。面違とは面と向かい合ったときに君の意見に違つて正言することであり、面辞も暇乞いのための面談・面語の意である²³。

さらに「大通禪師行実」によれば、子曇は示寂に臨んで「来無_レ所_レ従、去無_レ所_レ至、皎日麗_レ天、清風_レ匝_レ地」という遺偈を揮毫したとされている。これを書き下せば、およそ「来たるに従る所無く、去るに至る所無し、皎日は天に麗なり、清風は地を匝る」という具合になる。遺偈には世寿を挿入するのが一般的であるが、子曇は年齢を自ら記してはいない。遺偈の字句は史料によって少しづつ相違しており、『東渡諸祖伝』や『二十四流稽疑』では「来無_レ所_レ従、去無_レ所_レ至、皎日麗_レ天、清風_レ匝_レ地」とあり、『延宝伝燈録』や『墨蹟祖師伝』では「来無_レ所_レ来、去無_レ所_レ去、皓日麗_レ天、清風_レ匝_レ地」となっている。また『扶桑五山記』では「来無_レ所_レ従、去無_レ所_レ至、皎日麗_レ天、清風_レ匝_レ地」とあって「東

渡諸祖伝」に近いが、『鎌倉五山記』では「来無_レ所_レ住、去無_レ所_レ至、白日麗_レ天、清風_レ匝_レ地」と独特である。いずれにせよ、その伝写の過程において子曇の遺偈は誤写されていったものらしいが、意味的には大同小異といつてよいだろう。去来自由の境地に達して天地自然の運行の中に身を任せて世を去っていく子曇の心境が四言四句の中に凝縮されている²⁴。

世寿については五八歳説のほかには六五歳説が存しているが、一応、本稿においては基本となる「大通禪師行実」など伝記史料が等しく伝えている五八歳説を是としておきたい。ただし、子曇の法臘（坐夏）については何れの史料も伝えておらず、受戒して以降の比丘としての年齢は定かでない。

ところで、子曇が示寂した嘉元四年ないし徳治元年には、ほかにも著名な禅者が相継いで遷化している。「無象和尚行状記」によれば、松源派（法海派祖）の無象静照（法海禅師、一三三四—一三〇六）が五月一日に世寿七三歳で示寂しており、一山一寧が乗炬仏事を勤めている。また九月二六日には子曇とも親しかった破庵派の鏡堂覚円が京都の建仁寺において六三歳の生涯を終えており、すでに触れたごとく「一山国師語録」巻上「再住巨福山建長興国禅寺語録」には「鏡堂和尚遺書至上堂」が収められている。あたかも子曇は静照や覚円の後を追うかのごとく世を去っていることになる。おそらく子曇が示寂した際に乗炬の仏事をなしたのは建長寺の一寧

であつたものと見られるが、残念ながら『一山国師語録』巻上「再住巨福山建長興国禅寺語録」には子曇の遺書が至つたことに因む上堂も存せず、『一山国師語録』巻下「小仏事」にも子曇に対する乗炬仏事のことばは収められていない。

一方、『仏燈国師語録』巻下「小仏事」には、

建長西潤和尚鎖龕

弘「通大法」極「羣迷」、去古來今類不「齊」、截「斷去來生死」尽、
滔々碧澗水流「西」、共惟某人、祖「運庵」得「路塞」路、師「石帆」
破「家」家、再航「万里」東來、重展「三玄」戈甲、振「格」外機、提
向「上」着、拋「鹿峯」宏開「爐」輪、頑銅鈍鏡、無「不」器成。住「福」
山「大鼓」波瀾、蝦蟹魚龍、一期變化。九重隆春、一國尊師、香
風四吹、十方宗仰。逗到徇「緣」化、翻「身」抄「破虛空」。今正是
時、如何攀似。玄關巨關、十地頓超、無鬚鎖子兩頭擔。

という鎖龕仏事のことばが収められている。鎖龕とは蓋棺ともいい、龕（棺）の蓋を鎖す仏事であるが、身の長七尺もの子曇の遺体を納めた柩はかなり通常より大きかつたはずである。子曇が示寂した際にその鎖龕をなしたのは大覚派の約翁徳俊（仏燈大光国師、一二四五—一三三〇）であつたことが知られ、すでに触れたごとく徳俊はかつて入宋したとき、天童山の石帆惟衍に参学した経験が存し、そのとき以来、子曇と面識が存したものと見られる。このとき徳俊は鎌倉山内の福源山禅興寺の住持として子曇の訃報に接し、子曇の遺骸と対

西潤子曇の渡來とその功績（佐藤）

面しているのであろう。「運庵を祖とし、路を得て路を塞ぐ」とか「石帆を師とし、家を破り家を起す」と語っているのは、実際に惟衍に学んだ同参として子曇を評したものであり、子曇を一國の尊師と称えている。

また聖一派の南山土曇の『南山和尚語録』「小仏事」にも、

為「建長大通禪師起骨」

湛然西潤一「瀝」起、直下流「入東海門」、誰言泯滅流亦止、正脈滔
滔接「巨源」、恭惟某人、石帆真嗣、雲菴的孫、握「起黑漆籠」、整
頓破沙盆、敲「出」出「祖」骨髓、坐「斷」斷「神」僧命根。道行「兩朝」、声塞
乾坤。寔是叢林中興主、堪「列」歷世「傳燈尊」。忽撰「化權」已期、
年、色身雖「隱真身存」、要「見」真身「麼」。提「起骨」云、無「端」轉
位回「機」去、特地又過「落葉村」。

という起骨の法語が収められている。土曇はすでに触れたごとく子曇とも交流が存しており、おそらく子曇が亡くなった訃報に接して鎌倉に駆け付け、起骨の仏事をなしているわけである。起骨とは靈骨を納めた棺を塔所に送り出すために担ぎ起す儀式であり、葬儀万般が終了した後、子曇の塔頭である建長寺の伝燈庵に遺骨を納める際に土曇が起骨の導師としてなしたものであろう。土曇は法語の中で子曇を「石帆の真嗣、雲菴的孫」と述べ、また「叢林中興の主」とか「歴世傳燈の尊」と称えており、すぐれた禪匠として学人を接化指導した点を評している。

そのほかの諸仏事を執り行なったのがそれぞれ具体的に誰であったのかは定かでないが、おそらくこのとき鎌倉ないし周辺に在った多くの禅者が一同に介し、子曇の葬儀を無事に遂行しているものと見られる。

建長寺と天童山における入祖堂

子曇が示寂してしばらくを経た時点で、建長寺の祖堂において入祖堂の儀式が行われている。すなわち、『一山国師語録』巻下「小仏事」には、

西潤和尚入祖堂。

去年元不去、今年亦無来、不来与不去、南岳与天台。故我前住当山大通禅师西潤和尚、松源直下、石帆嫡生。在唐土、则天台南岳、妙提玄要、来日東、则瑞鹿巨福、大振宗綱。翻軛面皮、处仏祖驚避、提起機鋒、時、衲子奔忙。功成不居、翻身便行。直得聖君欽風、賜諡号曰大通。本無位次、豈可遮藏。即今要見此老蹲坐处、摩呈起牌云、鉄眼銅睛窺不得、瞎驢隊裏共徜徉。

という入祖堂の法語が収められている。冒頭に「去年は元よりに去らず、今年は亦た来たる無し、来らざると去らざると、南岳と天台と」とあり、また「故我が前住、当山大通禅师西潤和尚」と述べているから、これは子曇が亡くなった年の大晦日の頃、すなわち徳治元年の一二月の末頃になされたもの

と見られ、一事は子曇の生涯を振り返るかたちで法語を述べている。しかもこの入祖堂の仏事がなされる以前に朝廷から亡き子曇に対し、すでに大通禅師の勅諡号が下賜されていることになり、一事も「諡号を賜いて大通と曰う」と記している。一二月の末日とすれば、子曇が示寂して二ヶ月あまりを経た時点であり、あるいは四十九日の供養を終えて後に一事が建長寺再住の住職として子曇の位牌を自ら祖堂に安置しているものである。

ところで、子曇に対して大通禅師の勅諡号が下賜されたのは後二条天皇（邦治、一二八五—一三〇八、在位は一三〇一—一三〇八）の在位のと看といことになるが、なぜ子曇に対してこのとき大通禅師という諡号名が選ばれたのであろうか。子曇より以前に大通禅師という禅師号で知られる禅僧といえ、唐代に北宗禅の祖（禅宗六祖）として絶大な接化を振るつた神秀（大通禅師、？七〇六）の存在が名高い。『全唐文』巻三三一「張説 十一」に収められる「唐玉泉寺大通禅師碑銘并序」や『宋高僧伝』巻八「習禅篇第三之一」の「唐荆州当陽山度門寺神秀伝」によれば、神秀は身長が実に八尺に及び、豊かな眉毛と大きな耳も持ち、目もと涼しく容姿端麗な人であったとされる。さすがに身の丈が八尺というのはかなりの誇張であろうが、こうした神秀の持つ大人の相は、同じく長身で眼光鋭い子曇のすがたにそのまま重なるものがあ

ろう。神秀が神龍二年（七〇六）二月二八日に一〇〇余歳で遷化した際、三月二日に唐の中宗（李顯、六五六—七一〇、在位は六八三—六八四および七〇五—七一〇）は大通禪師の勅諭号を下賜したとされる。

子曇に対して大通禪師の勅諭号が選定されたのは、この神秀の故事を踏まえてのものであった可能性が高い。しかもそれは晩年の子曇と最も親しく交遊し、かつ中国禅宗の故事にも精通していた一山一寧による進言が大きかったのではなからうか。そのことを窺う史料は存していないもの、おそらく子曇が遷化してまもない時期に、一寧は大檀越の北条貞時に禪師号の下賜を進言し、後宇多上皇などを通して朝廷から大通禪師という勅諭号が亡き子曇に対して贈られたものである。

一方、「大通禪師行実」の末尾には、曹洞宗宏智派の雲外雲岫が明州慶元路郵県の天童山景德禪寺の住持として寄せた入祖堂のことばとして、

古帆未掛、鯨波万里、古帆已掛、鯨波万里。且道、不涉途程、子皈就、父底句、作麼生道。大通西澗曇禪師来也。堆雲菴裏還、他一位始得。還他了也、安置了也。指牌云、扶桑国裡日頭紅、太白山中添瑞氣。

日本国小師正初侍者、為大通西澗曇禪師入祖堂仏事。

皇元至治三年癸亥季春、天童住山雲外雲岫書。時年八十有二。

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

と記されている。これを書き下すならば、およそつぎのことくなる。

古帆未だ掛けざるに、鯨波万里、古帆已に掛けるに、鯨波万里。且く道え、途程に涉らず、子皈りて父に就く底の句、作麼生が道わん。大通西澗曇禪師来たれり。堆雲菴裏に他の一位を還して始めて得ん。他を還し了われり、安置し了われり。牌を指して云く、「扶桑国裡、日頭紅し、太白山中、瑞氣を添う」と。

日本国の小師正初侍者、大通西澗曇禪師の入祖堂の仏事を為す。

皇元至治三年癸亥季春、天童住山雲外雲岫、書す。時に年八十有二。

これによれば、子曇の得度の小師であった侍者の正初が日本から入元し、子曇のために入祖堂の仏事をなしたことが知られる。天童山の雲外雲岫が「大通禪師行実」を書いたのが元の至治三年（日本の元亨三年、一三三三）三月のことであるから、入祖堂の儀式がなされたとすれば、その前年の至治二年一〇月二八日の十七回忌の正当ではなかつたかと推測される。天童山における入祖堂の仏事であるから、当然のことながら子曇の「大通西澗曇禪師」の名を刻んだ位牌が寺内の祖師堂に納められたわけである。

このとき入祖堂のために入元して天童山に到った侍者の正初とは、子曇の法嗣として名が知られる無極正初のことである。

り、おそらく「大通禪師行実」の撰述を雲岫に依頼したのもこの人である。正初は本師の子曇がかつて天童山で法祖の石帆惟衍に参じていた因縁を重んじて天童山を目指したものである。単に天童山の祖堂に子曇の位牌を安置するのみならず、おそらく惟衍の墓塔の存した天童山の塔頭（廟所）にも位牌を安置し、かつ惟衍の墓塔に随待するかたちで子曇の墓塔も立石され、遺骨一位の分骨安位もなされたものと見てよいであらう。

しかもこの記述によって天童山に存した惟衍の塔頭が堆雲庵と称されていたことが判明し、惟衍の亡き後、およそ半生紀余を経た十四世紀前半においても堆雲庵が廟所としてかなり機能していたらしい消息も窺われる。

ちなみに正初が天童山で入祖堂の仏事を雲岫に依頼したのと同じ頃、鏡堂覺円の法嗣である鏡堂派（大円派）の無憂義天（一二九〇—一三六七）もまた天童山に到り、雲岫に覺円の安牌法語を求めている。

西澗子曇に対する祖贊

子曇と同郷の法友であった一山一寧は『一山国師語録』巻下「贊仏祖」において、

西澗和尚 小師正開請。

高明気節、清朗容儀、太白的嗣、冷泉孫枝、在「唐土」已開

鋪席、來「扶桑」則重運「爐鎚」。大用処不「存」仏祖、妙唱時不「犯」離微。謂「此大通之真、是錯認」渠、謂「非」大通之真、是礎。過伊。竹籠橫揮処、又見花開「五葉」時。

という子曇に対する祖贊を残している。ここで一寧は「大通の真」ということばを用いているから、子曇に大通禪師の勅諡号が下賜された後に贊を付したものであることが知られる。また「小師の正開請」とあるから、子曇の頂相を持参して一寧に贊を請うたのは、子曇から剃度を受けた小師の正開であったことが窺われるが、残念ながら子曇の弟子の正開についてはその詳細が定かでない。贊の中で一寧は子曇が松源崇嶽（冷泉）の法孫であり、石帆惟衍（太白）の高弟としてすぐれた気概と容儀を具えていたさまを称え、中国と日本の両処で仏法を挙揚した点を強調している。

また『円通大応国師語録』巻下「巨福山建長寺語録」によれば、松源派（大応派祖）の南浦紹明は徳治二年（一三〇七）二月二十九日に鎌倉の建長寺に入寺しているが、徳治三年（一〇月九日に延慶元年と改元）の上堂において、「仏光忌拈香」を終え、「重陽上堂」「開爐上堂」「達磨忌上堂」につづいて「大通忌拈香」をなしている。いわゆる子曇に対する三回忌（大祥忌）の拈香であって、その全文を示すならば、

大通忌拈香云、空劫以前、威音那畔、早有「靈根」、無人取得。

三世諸仏、歴代祖師、纔得「些子氣息」、敢不「囊藏被蓋」。競「頭

出来、貴賈賤売、全提半提、横拈倒用、一生拈弄不出。今日大通禪師三回諱辰、大檀那令「山僧燒一炷香。山僧未免、分明拈出、薰他鼻孔。何故如是。同參面前、不敢自諱。」

というものであり、建長寺の大檀那すなわち北条貞時の命によつて子曇の忌日拈香をなしている。この「大通忌拈香」の後に「虚堂忌拈香」、「謝新旧両班上堂」、「冬至上堂」、「十一月半上堂」が収められているから、紹明としては子曇の示寂を一〇月二八日として忌日拈香をなしていることになる。

一方、子曇が示寂して二〇年あまりを経て日本に渡来した破庵派（大鑑派祖）の清拙正澄（畢竟滅、大鑑禪師、一二七四—一三三九）も『清拙和尚語録 日本』の「仏祖讚」にて、

西圃和尚。

天童侍者、円通首座、運筆直下的孫、石帆最初跳躑。挺生白雲之城、分特不倚、瑞応天柱之峯、鬱葱環抱。兩人扶桑、為國主之師尊、七年福鹿、振松源之祖道。敷「化工播物之心、孰不感其德慈、発迅雷起壑之機、味者謂其性操。伝「燈」以至「百千燈、得一箇勝花千箇。巍巍堂堂、焯焯煌煌。喚作「大通大人相、即是謗伊。不喚作「大通大人相、又成「磋過。覆「薩兒孫万代昌、白雪陽春有「人和。」

という子曇に対する仏祖贊を残している。この仏祖贊は正澄の詩文集である『禅居集』の「仏祖讚」には収められていないが、贊の中で正澄は子曇一代の消息を詠い上げており、こ

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

れを「大通禪師行実」などに則して整理してみると、およそつぎのごとくなろう。「白雲の城に挺生し」とあるのは子曇が仙居県の県城に出生したことを表現したものである。子曇は天童山で待者として石帆惟衍に参じ、法を嗣いで運庵普巖の法孫となり、傑出した禅機を振るい、南嶽の天柱寺に住持したこと、廬山の円通寺で首座を勤めたことを特筆している。さらに二度にわたり日本に赴いて国主の師となり、七年にわたつて建長・円覚の両寺に住し、法祖の松源崇嶽の祖道を教え広めた点を称えている。最後に正澄は子曇が巍々堂々としてまさに大人の相を具えており、その門流は末代までも繁茂するであろうと結んでいる。来日する以前に松源派の月江正印の実弟である正澄が、帰国していた子曇と実際に相見する機会が存したか否かは定かでないが、日本に二度にわたり赴いた子曇の存在は早くから伝え聞いていたものと見られる。

また江戸期の元師蛮は『本朝高僧伝』巻三三「相州建長寺沙門子曇伝」の末尾に、

贊曰、曇公道貌偉奇、材力雄富。年僅十八、触「石帆之風、振松源之宗」。再来「此国、管轄大刹。想夫妙提玄唱、堆冊盈帙。而今難得「半稿隻簡、蓋乏於胎厥」也。又六代祖師真贊、在「法山之庫。余幸獲「高躑之遺、既書載「燈録。」

として子曇の足跡を要領よくまとめている。とりわけ興味深

いのは「想うに夫れ妙提玄唱は冊に堆く帙に盈つ。而今、半稿隻簡を得難く、蓋し胎厥に乏しきなり」と伝えていることであろう。これによれば、子曇にはかつてその提唱をまとめた語録の類いが存したはずなのに、師蛮がこれを探し求めてもすでに消息を断つて得られなかつたらしいことが知られる。師蛮は子曇のことが容易に得がたく、門流に残される墨蹟・書簡の類いも少ないことを述懐している。

西澗子曇の遺墨

現今、残念ながら子曇にはまとまつたかたちの語録と称するものが伝えられていない。蘭溪道隆・兀庵普寧・大休正念・無学祖元・鏡堂覚円・一山一寧といった鎌倉期に渡来した名立たる中国禅僧には概ね語録が残されており、それぞれに『蘭溪和尚語録』（後に『大覚禅師語録』）、『兀庵和尚語録』、『大休和尚語録』、『仏光国師語録』、『鏡堂和尚語録』、『一山国師語録』として編纂されている。それに対して、なぜか子曇には単独の語録が残されておらず、一抹の寂しさを覚えるものである。

しかしながら、『扶桑禅林書目』の「語録」によれば、西澗和尚、諱子曇。宋人。嗣「法石帆惟衍」。一卷。

という記載が存していることから、少なくとも江戸末期に京都の東山建仁寺第三五七世となつた天章慈英（杞憂庵、一八

一五—一八七二）が『扶桑禅林書目』を編纂した当時までは、いずれかに子曇の語録が所蔵されて伝存していたことになろうか。その表題はおそらく『西澗和尚語録』か『大通禅師語録』といったものであつたと見られ、しかも二巻に編纂されていたことが知られる。^⑧『延宝伝燈録』巻三、相州建長西澗子曇禅師の章や『本朝高僧伝』巻三三、相州建長寺沙門子曇伝には、残念ながら『西澗和尚語録』からの引用と見られるような上堂・小参の類いは一切収められていない。すでに触れたごとく、おそらく正元師蛮は『西澗和尚語録』が存在するらしいことは知っていたものの、閲覧する機会も得なかつたのであろう。

現在のところ、『西澗和尚語録』はその所在が確認されていないが、もともと建長寺の伝燈庵など子曇ゆかりの場所や、子曇の系統を引く大通派の寺院などに、『西澗和尚語録』が所蔵されていたものと推測される。この語録が発見されることでもあれば、子曇の二度にわたる来日の事情はもろろんのこと、師の惟衍に関する消息、子曇の日本禅林における活動などもかなり克明に辿ることができるであろう。

子曇にまとまつた語録が伝えられていない以上、子曇が自ら揮毫した墨蹟その他を通してその作を窺うしか術がない。そこでつぎに子曇が書いた遺墨について一通り整理して見ることにしたい。

すでに触れたごとく東京都世田谷区上野毛の五島美術館には、帰国した直後に日本の夢庵契という道友に送った「与夢庵尺牘」が伝えられているが、これは現存する子曇の墨蹟としては最も古いものである。一方、『聖一國師年譜』に収められた子曇の書簡も、現物ではなく抄出とはいえ円爾宛ての作として貴重であろう。

また駒澤大学禅文化歴史博物館と岡山県岡山市の林原美術館には子曇の筆になるとされる「置文」が伝えられているが、これは実際には子曇のものではなく、聖一派の乾峰士曇の筆になるものであるから、ここでは考察から外しておきたい。

京都紫野の大徳寺には子曇が記した「虚堂智愚頂相贊」が所蔵されているが、これはすでに触れたごとく、かつて天童山の石帆惟衍が法兄の虚堂智愚の頂相に贊を付した作が日本に将来されていたが、惜しくも焼失したため、改めて再来日した直後の子曇が法伯の智愚の頂相に本師の惟衍の贊語を書き記したものである。

一方、田山方南編『禅林墨蹟拾遺』「日本」には、長島家所蔵「四八、西澗子曇墨蹟、偈語四首」として、

傑出叢林 此老翁 機鋒峭峻 眼頭空 住山鋤斧 輕提起 魔仏群中 振祖風。

玉龍昨夜生 金鳳 羽翼摩空下 九州 看取翺翔霄漢遠 直教百鳥絶飛遊。

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

瑞鹿峯前分半座、権衡仏祖用全真、大機衲子相隨逐、応似星星拱北辰。

慧日峯頭端的孩子、從來仏祖入無門、若能入得無門処、方解知恩却報恩。

西澗子曇「子曇」西澗

という子曇の作になる七言四句の偈頌四首が一軸にまとめられて残されており、内容からいずれも名の通った禅者に寄せた偈頌であることが窺われる。ただ、これらが特定の個人に寄せた一連の作なのか、個別の題名でそれぞれに寄せた作をまとめたものなのかは断定できないが、四首並べて子曇自身が書き記し、落款を添えて有縁の禅者に付与したということになる。第一首は一人の老翁が叢林において厳格な禅風を振るい、傑出した活動をなしているさまを讃えたものである。第二首は実際に九州に下つて禅旨を振るわんとする禅者を鳳凰に準え、接化に期待を寄せる内容である。第三首は円覚寺（瑞鹿山）で首座として半座を分ち、多くの修行僧の信望を得て仏法を挙揚したことを称えたものである。第四首は東福寺（慧日山）の円爾の法を嗣いだと見られる禅者に対し、今後の報恩行に期待を寄せる内容である。

もし、これらが一連の作とすれば、その禅者は聖一派に属し、かつて円覚寺で首座を勤めた経験があり、傑出した禅機を振るって信望が厚く、九州の地で仏法を挙揚した人という

ことになる。円覚寺における首座職を必ずしも子曇のもとでの活動と解さなければ、これらの条件にすべて該当する禅者としては、聖一派の南山土曇が最も妥当であろう。

同じく『禅林墨蹟拾遺』、『日本』には、竹内家所蔵「四九、西澗子曇墨蹟、偈語三首」として、

雨打風敲曾不入、確然屹立転崢嶸、古今斫額人無數、只見雲從嶺上生。

捏不成、团撃不開、剛然壁立転崢嶸、玲瓏八面無縫罅、一任烟雲自去來。

巍々歴劫自堅剛、聳翠凌空絶覆蔵、任使八風頻鼓動、旋嵐偃岳不相妨。

円覚西澗。「子曇」「西澗」

という子曇が詠じた七言四句の偈頌三首を一軸にした作を載せている。この墨蹟では子曇は自ら「円覚西澗」と署名しているから、これらの作は子曇が円覚寺の住持としてなしたものとということになる。この三首の偈頌においては浮遊する雲と不動の山が題材となっており、あるいは子曇が富士山など実際の雄大な山を眺めて詠じた作とも取れよう。ちなみに『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録 の研究 上』の「元和五己未年」（七三頁）にも、

雨打風敲曾不入、確然屹立転崢嶸、古今斫額人無數、只見雲從嶺上生。

捏不成、团撃不開、剛然壁立転崢嶸、玲瓏八面無縫罅、一任烟雲自去來。
巍々歴劫自堅剛、聳翠凌空絶覆蔵、任使八風頻鼓動、旋嵐偃岳不相妨。

円覚西澗。「子曇」「西澗」

としてこの三偈頌が収められている。ただし、竹内尚次氏はこの墨蹟について、

竹内家本トシテ現在ス、ナオ、方印「子曇」ハ「円覚」ト「西澗」ノ間ニ在ル、壺印トアルハ写シ誤リカ。

という注記を残しているから、この墨蹟は竹内氏自身が実際に所蔵されていたことが知られる。ただし、竹内氏が逝去されて後、この子曇の墨蹟が現在どうなっているのかは確認していない。

ところで、京都花園の正法山妙心寺と福岡市博多の万松山承天寺の両所には、子曇が賛を付した中国禅宗の六代祖師の画像六幅がそれぞれ残されている。いずれも国の重要文化財に指定されているが、なぜ妙心寺と承天寺に同様の画賛が所蔵されているのかは不思議である。妙心寺所蔵のものは「六代祖師像」と称され、承天寺所蔵のものは「禅家六祖像」と称されており、いずれも絹本着色であるが、妙心寺所蔵の方は画像の損傷が激しい。いま、その全文を示すならば、つぎのようである。

初祖菩提達磨大師。

淨智妙円体自空、天寶慧辯秀、珠光、六宗破後來、東土、五葉從、茲遍界矣。子曇拜讚。

二祖太祖禪師。

宴坐香山、頂骨奇、少林春信秀、新枝、利刀截、下孃生臂、端的親伝、屈胸衣。子曇拜讚。

三祖鑑智禪師。

内外中間罪性空、一言契理即伝宗、古今世道多、更変、周武年中、魏公。子曇拜讚。

四祖大醫禪師。

縛脱從來得自由、何為引頸護相酬、龍門万古增、欽慕、白氣翔空夜不収。子曇拜讚。

五祖大滿禪師。

黃梅果裏没親爺、仏性俱空自到家、七百祥麟俱点額、誰知確、紫夜生花。子曇拜讚。

六祖大鑿禪師。

嶺南仏性未、曾無、壁傷書來勝、画図、善惡不思親対面、難將多力、有衣孟。子曇拜讚。

これら六幅の画實は東土（中国）禪宗六代の祖師画像に対する祖贊であり、いずれにも「子曇拜讚」と揮毫されているが、落款は押されていない。住持地や道号が付されておらず、単に子曇の名のみが書されていることから、住持を勤めてい

西潤子曇の渡来とその功績（佐藤）

なかつた時期すなわち最初の来日時期に贊を付したのかも知れない。達磨・僧璨・弘忍の頂相は向かつて左を向き、子曇の贊も左から右へと読むように記されているが、慧可・道信・慧能の頂相は向かつて右を向き、子曇の贊も右の行から左の行へと読むように記されている。いずれの画も法界定印を結んで曲椽に坐禅する姿で描かれ、踏床に沓（靴）を置いている。画像の容姿は形式的ではあるが、氣品に満ちて緻密に描かれている。一説に妙心寺のものが正本で、承天寺のものがその写しともされるが、定かなところは分からない。^{②③}

あるいは同様のものも二幅あり、それに子曇がそれぞれ同内容の贊語を付したものと解するのが妥当であろうか。この画實は子曇の代表作と目されていたものらしく、『延宝伝燈録』にはその全文が収められており、^{②③}「本朝高層伝」にも初祖達磨の贊語が収められている。

さらに根津美術館編『青山荘清賞』第二「書蹟篇」（昭和一四年刊）の第九には、「西潤子曇禪師墨蹟」として、

跳「出諸方陷虎機、掀天括地総相宜、却將一滴曹溪水、漲起波瀾更有誰。

東山の旨幾人知、不「是渠儂」更是誰、正統莫言無「種草」、鳳凰生出鳳凰兒。

先師未了閑公案、芽孽重生爛葛藤、便用大開「東閣手」、向「無慘処」聚「青蠅」。

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

一一〇

宝祐戊寅二月、西澗子曇。「子曇」「西澗」

という偈頌三首を併せて揮毫した墨蹟が載せられており、その解説によれば、縦一尺九分、横一尺六寸六分五厘とされている。ちなみに『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録の研究 上』の「元和六、二冊之内下」（九三五頁〜九三六頁）には、

跳出諸方（明）陷虎機、掀天格地總相、
誰、波瀾

東山の旨幾人知、不是渠儂更是、
生出

児、
糠処

先師未了閑公案、穿孽重生爛葛藤、
、

蠅、
、

居諸、西澗。「子曇」「西澗」

各印有角二、帛漏力カリタヤウニ、相見候也。帛内、豎壹尺九分、横壹尺八寸二分、上下浅黄之絹、中風帯綾ニツクリ出。

という三偈頌が収められており、残念ながら筆写せずに欠字にしてある部分が存し、また字の異同も見られるものの、明らかに『青山莊清實』に収められているものと同文といつてよい。竹内尚次氏はこの子曇の作を「進道之偈頌」と称しており、仏道に進む上での要諦を示したものと解している。ところで、この三首の偈頌について『墨蹟之写』では、

此三首之頌、大通禅師西澗大和尚之手沢也。宜「宝情珍襲」焉

永俊。「方印」

曹源礼格。「方印」

龍眠令秀。「方印」

大慈龍玄。「方印」

此添状、柔長老自筆ゾ。

大甯小鷹二書夕、越前屋三右卫門持参候。東福歴々添状、真

偽難申哉。此方不知と云夕、印之朱色悪ク、筆跡も子曇ノ様

二八不相見。玉室へも被見候へハ、何とも難見分_レ之由、被

申候卜也。

という注記が存しており、東福寺の所蔵であつたものらしく、

二三〇世の剛外令柔（孤山、一五六三、一六二七）と二三二世

の圭叔龍玄（？、一六二五）と三三三世の越溪礼格（義格、？

一六五一）と三三六世の雄峰永俊（？、一六三八）という四

長老が子曇の手沢であるから宝物として大切にすべき添状を

残していたとされる。ただし、『墨蹟之写』を著した大徳寺

の江月宗玩（大梁興宗禅師、一五七四、一六四三）は落款や筆

蹟などから子曇のものではないと鑑定している。

『青山莊清實』に載る子曇の墨蹟と『墨蹟之写』に記録さ

れたものとは語句に若干の相違が見られるわけであり、大き

さとしては縦が一尺九分と同じであるが、横は一尺六寸六分

五厘と一尺八寸二分とわずかの違いが存している。とりわけ、

決定的な違いは年記の有無であつて、『青山莊清實』に載る

子曇の墨蹟には「宝祐戊寅二月、西澗子曇。「子曇」「西澗」

と年記と署名および落款があるのに対し、『墨蹟之写』に記録されたものは「居請 西澗」「子曇」「西澗」とあり、「居請」が何を意味するのかは定かでないものの、年記は何ら記されていない。宝祐とは南宋後期の宝祐年間（一二五三—一二五八）のことであるうから、仮に宝祐六年（一二五八）と見てもそのとき子曇はわずか一〇歳の少年にすぎない。また子曇の存命中に戊寅の年があるのは、子曇が最初の来日を経て帰国の途に着いた元の至元一五年（南宋の祥興元年、一二七八）すなわち日本の弘安元年（建治四年）のみである。このため『青山莊清賞』の解説では、墨蹟はあくまで子曇の作としながらも、年記は後世の何人かによる書き足しであろうと解している。

さらに加納治兵衛『白鶴帖』第三集上（白鶴山莊 一九三〇年）によれば、

放去提来兎角杖、看々也是転風流、横身宇宙知何处、東倒西搦得自由。

慧日臺前禍胎兒、起孫誰識有從來、而今毒氣深入地、野草閑花不敢開。

仏祖場中通活路、拈鎚豎拄起家来、驚然飛錫九州外、大地山河眼豁開。

南山会得東山旨、却向西州振祖風、不用尋常閑絡索、单伝直指自流通。

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

西澗 子曇「子曇」「西澗」

という子曇の墨蹟が伝えられている。これは子曇が七言四句の偈頌四首を列記し、自ら署名して落款を押ししたものである。これらがそれぞれ如何なる表題でなされた偈頌であったのかは定かでないが、第一首は拄杖にまつわる偈頌であり、第二首と第三首は韻が同じことから、同じく慧日山東福寺の禪者との関わりを詠じたものである。第四首はおそらく京都東山に近い東福寺で円爾に参じて嗣法した聖一派の南山土曇に与えたものではなからうか。かつて子曇は一寧とともに来日した直後、筑前（鎮西）の崇福寺で祖風を振るっていた土曇のもとを訪れ、賀偈を書き与えたとされている。

いま一つ『鎌倉・禅の源流 建長寺創建750年記念特別展』（東京国立博物館、二〇〇三）の第九一によれば、京都府宮津市金屋谷の泰叟山国清寺に所蔵される西澗子曇賛「長帯観音図」が載せられており、子曇の賛として、

界雲衆生願益堅、寒梅広、何長空
月正円。

福山西澗賛

と記されている。この観音図は長い帯を身に付けていることから長帯観音と称せられており、絹本墨画淡彩で縦六九・六センチ、横三一・五センチの作であり、上部に子曇の賛が書かれている。「福山西澗賛」とあるから、子曇が巨福山建長

寺に住持していた晩年の時期に揮毫した作であることが知られるが、図録を通して見るかぎり残念ながら破損が酷く判読不明な箇所が多い。

つぎに墨蹟の現物は残されていないが、かつて江戸初期に大応派（大徳寺派）の江月宗玩が記録した『墨蹟之写』に収録されている子曇の作について紹介しておきたい。便宜上、竹内尚次『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究上』を依用して述べておきたい。

『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究上』
 「慶長十六辛亥」（二四頁）には、

利人濟物心無倦、布德行慈世所希、隨處但增方便力、不知春雪上拜肩。

饒上人、号益翁、一日采炷香求頌。且速欲歸里、余固未暇問其爲書之事。卒製四句、以塞其請云。

庚子秋、円覚西澗子曇書。「西澗」子曇」

という益翁 饒という禅者に付与した「還郷偈」が伝えられている。これは子曇が円覚寺の住持であった庚子の秋すなわち正安二年（一三〇〇）の秋に、参学の徒であったと見られる益翁饒という禅者が方丈に到ってか道号に因んで偈頌を求めたのに対し、子曇がこれに応じて書き与えたものである。益翁の道号に因んで慈悲の実践を勧める内容であるから、道頌と見るべきものであるが、益翁饒が如何なる嗣承の禅者

なのかは定かでない。仮に益翁饒が子曇の円覚寺住持期の門人であるとすれば、その参学期間は僅か一年ほどにすぎないことになり、子曇の門人と解するには無理があるつか。

同じく『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究上』の「慶長廿年、元和元年」の箇所（二九頁、三〇頁）には、

異極離明之地、岫然高聳於干尋、粲然南山、名存体具。故陟之不_レ及者、惟知嶮岨以弗_レ前、居心自安者、豈覺孤峻之難。到_レ今觀此軸、寧不_レ有_レ之羨、而移北門_レ求_レ。滿目青々、翻成障礙、現_レ其真美、造詣悠然、而親見者、良未_レ易_レ論也。因書其末。

時辛丑白露節、瑞鹿山円覚西澗子曇。「子曇」「西澗」

という跋文の墨蹟が載せられている。辛丑は正安三年（一三〇一）に当たり、白露節は二十四氣の一つで九月初旬の八日から九日の頃、秋の気配が著しくなる時期であり、ときに子曇は円覚寺の住持として記したものである。なお、竹内尚次氏はこれを「南山図画軸題跋力」と註しており、頌軸の末に寄せた跋文にほかならない。

同じく『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究上』の「元和五己未年」の箇所（七〇頁）と「元和八」の箇所（九九四頁、九九五頁）には、

天然確実勢曆空、不_レ假_レ提持弋贊功、今古無人穿鑿得、聽

教古鎮「白雲中」。

鑽彌堅矣仰弥高、長帶「白雲」、聳「碧霄」、全体如々無「寸土」、鐵渾
崙地太岩嶮。

巨壘疊巖衆難「破」、直是崔嵬聳「半空」、劫火洞然大千境、堅剛成
法不「雷同」。

円覚西澗、「舟陳」]

という三偈頌が収められており、やはり円覚寺に住持中に記したものである。落款に押された「舟陳」については子曇の別号なのか否かは定かでない。「元和八」の箇所には、

此三篇偈、西澗禪師之真蹟、無「其疑」候。猶以可有「珍蔵」者也。

元和第四初冬日、不二庵守藤。「方印」

龍眠庵令柔。「壺印」

延之禪伯、凡右。

とあり、東福寺二三三世である聖一派の集雲守藤（江湖散人、湖山、？、一六二二）と同じく東福寺二三〇世である聖一派の剛外令柔（孤山、一五六三、一六二七）が子曇の真蹟である点を認めた添状を残している。この墨蹟に関する記事は『本光国師日記』第四〇の寛永六年（一六二九）二月二七日の条にも載せられている。

同じく『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録』の研究上』の「元和七」の箇所（九八五頁、九八六頁）には、

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

祝香。

此香、根苗迥異、枝葉不凡、經「歲月」而茂、軀深、歷「霜」而香愈烈。

伏願、広興「法社」、大振「宗猷」、聳「德普」於前脩、啓「光明」於末運。

提綱、達磨不「来」東土、処々青山鎮「白雲」、二祖不「往」西天、条々緑水含「明月」。与磨与磨、鏡眼銅睛不「破」、不「然」不「然」、金口玉唇亦難「宣」。所以、西天四七、謾自擲量、唐土二三、何無「夢見」。総是將「錯就錯」、以「訛伝訛」。殊不「以下」、尾ノ文欠「失入」。

兩内、横一尺七寸七分、竪一尺一寸貳分、上下青半絹、中風帶今織ノ金紗。四月朔日、富士屋庄兵衛持參候。各印無之、西澗ト八難「申物」ソ。箱ノ蓋ニ曇西澗トアリ。

という入寺法語の類いが記されている。江月宗玩はこの墨蹟を子曇のものとは見がたい点を指摘しているが、竹内尚次氏は「コノ法語ハ、奥ガ切レテ筆者ヲ確カメヨウモナイガ、ナカナカ堂々トシタ格調アル文章デ、箱書キノ所伝、当ラストモ遠カラズ、ト思ワレル」と注している。墨蹟自体が子曇の直筆であったか否かは、いまとなつては測りようもないが、仮に直筆でなかつたとしても法語の記載内容が子曇の作ということになれば、円覚寺か建長寺に住持する際になした貴重な入院法語ということになる。ただ、この墨蹟は切断され

たものか後半部分が欠落しており、法語の提綱の全文を知ることができないのが惜しまれる。

さらに円覚寺の仏日庵所蔵『仏日庵公物目録』、「諸祖頂相」に「五祖演 大通贊」と、「大通 自贊」が記されているから、北条時宗および北条得宗家の廟所であつた仏日庵には、かつて子曇が贊を付した楊岐派の五祖法演（東山、？、一一〇四）の頂相が存し、また子曇が自ら贊を付した頂相が所蔵されていたことが知られる。もし、子曇の自贊頂相が残されていれば、この人の堂々たる容姿を窺い知ることができたはずであり、その散逸はまことに惜しまれてならない。

同じく『仏日庵公物目録』、「墨蹟」の「日本分」にも「西澗真跡十二鋪」、「一山真跡四鋪」と記されているから、一山一寧の真蹟四幅とともに子曇の真蹟が一〇幅以上も残されていたことが知られる。このように仏日庵には子曇の揮毫した墨蹟が大切に保管されていたことが知られるが、残念ながら現今には残されていないようである。

嗣法門人とゆかりの寺院

子曇の門流は後に西澗派ないし大通派と称せられ、日本禅宗二十四流の一つに列せられているが、具体的に子曇の法を嗣いだ門人はどれほど存したのであるうか。「大通禪師行実」においては法嗣の名は何ら記されておらず、わずかに「大通

禪師行実」を曹洞宗の雲外雲岫に依頼した侍者の小師正初すなわち無極正初の名が知られるすぎない。

『東渡諸祖伝』巻上「宋西澗曇禪師伝」には、子曇の法を嗣いだ門人について「得其法者、畊雲原・嵩山中等也」と記されており、畊雲克原と嵩山居中（大本禪師、二二七七—三四五）の二人が挙げられている。また『延宝伝燈録』巻二「臨濟宗」には「建長西澗子曇禪師法嗣 第一世」として「京兆南禅嵩山居中禪師」と「相州建長明巖正因禪師」の章が存している。また「大通下第二世 南禅嵩山居中禪師法嗣」として「丹後州安国宝山浮玉禪師」と「丹州安国少林桂萼禪師」の章が存し、さらに「大通下第三世 安国少林桂萼禪師法嗣」として「京兆南禅大用全用禪師」の章が存している。このほかに「相州建長明巖正因禪師」の章には法嗣として「淨妙瑞巖正芝禪師」の名のみが挙げられている。したがって、『延宝伝燈録』においては大通下（西澗派）の禪者は子曇を含めて七名の名が知られることになる。

一方、宗派図としては、室町期に夢窓派の古篆周印が編集した『仏祖宗派図』に「建長西澗子曇」の法嗣として「南禅嵩山居中」、「淨妙空叟思体」、「万寿畊雲克原」、「房州安国無極正初」、「建長明岩正因」という五名の名が記されている。また「南禅嵩山居中」の系統は「丹州安国少林桂萼」から「円覚大用全用」と次第している。「淨妙空叟思体」の系統は

「興聖桂岩門芳」から「建長象初開光」さらに「円覚汝仲爾」と次第している。「万寿畊雲克原」には法嗣として「万寿大辯正訥」が、「房州安国無極正初」には法嗣として「浄妙蘭室正友」が、「建長明岩正因」には法嗣として「浄妙瑞岩正芝」がそれぞれ記されている。

また江戸期にまとめられた駒澤大学図書館所蔵本の『正誤宗派図』四には「天童石帆惟衍」について、「建長西彌子曇大通」の法嗣として「畊雲克原」「南禅高山居中 大本」「万寿混源正肇」「房州安国無極正初」「万寿出塵処傑」「浄妙空叟思体」「建長明巖正因」という七名の名が記されている。「南禅高山居中 大本」の系統は「丹州安国開山少林桂萼」から「円覚大用全用」と次第している。「浄妙空叟思体」の系統は「興聖桂巖門芳」から「建仁象初開光」さらに「円覚汝中開肅」と次第している。「畊雲克原」には法嗣として「万寿大辯正訥」が、「房州安国無極正初」には法嗣として「浄妙蘭室正友」が、「建長明巖正因」には法嗣として「浄妙瑞岩正芝」がそれぞれ記されている。

これに対し、玉村竹二『五山禅林宗派図』（思文閣出版）では、「大通派」の箇所（三七頁）に、西澗子曇の法嗣として、高山居中・南叟・出塵処傑・混源正肇・礼翁・空叟思体・清江・無極正初・明岩正因・畊雲克原という一〇人の名を挙げられており、南叟・礼翁・清江の三名が加えられているが、

実質的には『仏祖宗派図』と『正誤宗派図』を通して知られる七人が正式な法嗣ということになる。また大通派の系統については本稿の末尾に『五山禅林宗派図』に載る法系図をそのまま載せておくことにしたい。

同じく玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（思文閣出版）では、西澗子曇の項は見られないが、「高山居中」（すうざんきよちゆう）と「畊雲克原」（こううんこくけん）の項が存している。大通派の禅者としては、法の曾孫として少林桂萼の法嗣である「邵庵全雅」（しょうあんぜんよう）の項があり、また少林桂萼より大用全用・伯春全寿と次第する「文和全印」（ぶんなぜんいん）の項が存している。

これらの嗣法門人らはいずれも子曇が再来日して以降にその門に投じて印可を受けたことになり、子曇が再来日してから示寂するまでの期間に育成された門人ということになる。子曇より指導を受けたのは最長でも六年から七年の参隨に限られることになる。ただし、日本禅林では開堂出世に際して得度を受けた師に嗣承香を炷くことが一般化しているから、必ずしも子曇より生前に印可まで得ていなかったとしても不自然ではない。

すでに高山居中や無極正初など子曇との関わりが明確な門人に関しては触れておいたので、法嗣に関しては一々に詳しく事跡を考察することは煩瑣にわたるため、ここでは控えて

おきたい。

つぎに子曇および大通派ゆかりの寺院や塔頭について簡略に整理しておきたい。すでに触れたことく子曇の全身ないし靈骨は建長寺の伝燈庵に葬られたわけであるが、子曇が関わったと見られる寺院も伝えられている。『扶桑五山記』二「大日本国禅院諸山座位条々」の「諸山」の「因幡州」によれば「萬寿山安国禅永禅寺、開山大通禅師」という記載が存している。今枝愛真『中世禅宗史の研究』の「安国寺・利生塔の設立」には、因幡（鳥取県）の万寿山安国禅永寺について、

因幡の安国寺は、所在未詳であるが、はじめ禅永寺と称し、のちに安国寺に指定された。山号を万寿山といい、開山は大通禅師西澗子曇である。なお、諸山にも列せられている。

という簡略な考察がなされているにすぎないが、この寺は子曇を開山として知られる。子曇が実際に因幡にまで赴いたとは見られないから、おそらく法嗣のいすれかが伽藍を創建し、子曇を勧請開山となしたものである。

信濃（長野県）上伊那郡すなわち現今の飯島町本郷の臨照山西岸寺は蘭溪道隆とともに西澗子曇をも両開山としている。『扶桑五山記』二「大日本国禅院諸山座位条々」の「諸山」の「信濃州」によれば、

臨照山西岸「岸」禅寺、下伊那郡、開山嵩山禾上大本禅師、嗣

西彌。開基大徹鈍禾上、嗣嵩山。八景、慈雲晚鐘・清湖夜月・春花花木・秋社風露・砥橋跨虹・荻野環翠・飛陽濯菽・三濟修禪。

とある。子曇の法嗣である嵩山居中が世代（実質開山か）に連なっており、居中の法嗣である大徹至鈍が第六世として伽藍を再興し、寺には応安六年（一三七三）に書された至鈍の置文が所蔵され、この年に諸山に列せられている。

さらに『扶桑五山記』二「大日本国禅院諸山座位条々」の「諸山」の「丹後州」によれば「鳳凰山安国禅寺、開山嵩山禾上大本禅師」とある。聖一派の雪舟等楊（楊知客、拙宗、一四一〇—一五〇六？）が画いた「天橋立図」によると、丹後の鳳凰山安国寺はもと府中に近い宮津市秋月に存したことが知られる。

『扶桑五山記』二「大日本国禅院諸山座位条々」の「諸山」の「日向州」によれば「太平山安国禅寺、開山嵩山禾上大本禅師、嗣西彌」とあり、もと日向（宮崎県）の太平山安国寺が嵩山居中を開山としていたことが知られる。日向の安国寺は健在の宮崎県南那珂郡飫肥町に存したとされるが、すでに廃寺となっている。

居中の塔頭としては『扶桑五山記』二「相陽瑞鹿山円覚興聖禅寺」の項の「諸塔」の「西澗派」に「瑞雲菴 嵩山禾上」とあり、『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禅寺」の項の

「諸塔」の「西彌派」に「広灯菴 嵩山禾上」とあるから、かつて鎌倉円覚寺の瑞雲庵と京都建仁寺の広燈庵が存したことが知られる。

明岩正因（大達禪師、？一三六九）の塔頭についても『延宝伝燈録』巻二二「相州建長明巖正因禪師」の章と「本朝高僧伝」巻三一「相州建長寺沙門正因伝」には、

釈正因、字明巖、不詳姓氏、相州人。久随建長西彌曇和尙、挹注禪源。初住建長、後移円覚、学人景行、法儀肅如。晚逸居鹿山正伝菴。応安二年己酉仏誕生日、説偈而逝。偈曰、寂滅為樂、猶涉多岐、死蛇出艸、賜倒須彌。葬于本菴、敕諡大達禪師。

と記され、『扶桑五山記』四「相陽瑞鹿山円覚興聖禪寺」の項の「住持位次」に、

廿四、明岩禾上、諱正因。塔于正伝菴。応安三年庚戌四月八日寂。頌曰、寂滅為樂、猶涉多岐、死蛇出艸、賜倒須彌。勅号大達禪師、嗣大通。

とあり、『扶桑五山記』四「相陽瑞鹿山円覚興聖禪寺」の項の「諸塔」の「西彌派」に「正伝菴 明岩和尚」とあるから、円覚寺の正伝庵がゆかりの塔頭として存していたことが知られる。

さらに法の曾孫に当たる大用全用の塔頭としても、『扶桑五山記』二「瑞龍山太平興国南禪寺」の項の「諸塔頭」に

「西澗派」として「聚祥院 大用禾上全用、嗣少林菴」とあり、『扶桑五山記』二「相陽瑞鹿山円覚興聖禪寺」の項の「諸塔」の「西彌派」に「龍翔菴 大用和尚」とあるから、かつて京都南禪寺の聚祥院と鎌倉円覚寺の龍翔庵が全用の塔頭として存したことが知られる。

さらに興味深いのが、『扶桑五山記』五「稻荷山浄妙禪寺」の項に「空叟思体 嗣西澗」とあり、子曇の法嗣である空叟思体が鎌倉の浄妙寺に住持したことが知られ、同じ「稻荷山浄妙禪寺」の項に「蘭室正友 嗣無極初」、「西澗派 瑞岩正芝 嗣明岩因」とあり、思体と同門の無極正初の法を嗣いだ蘭室正友と、明巖正因の法を嗣いだ瑞巖正芝の二人も浄妙寺に住持していることが知られることであろう。浄妙寺が大通派と因縁深い寺院となっていたらしいことが窺われる。

おわりに

以上、蒙古襲来を挟んで二度の来日を果たした西澗子曇について、「大通禪師行実」の記事を核として足跡を詳細に考察したわけであるが、なお細かな箇所では定かでない面が多い。これはすでに触れたごとく子曇に語録が現存していないことが大きな要因であって、かつて編纂された『西澗和尚語録』ないし『大通禪師語録』といった表題の語録が発見され

るようなことでもあれば、この人の消息が克明に辿れるはずであろう。また子曇がなした上堂や問答が知られれば、その禅風の特徴なども究明することが可能となろう。『西澗和尚語録』二巻も塔頭には大切に保管されていたものと推測されるから、伝燈庵をはじめ子曇ゆかりの寺院や塔頭が現今に残されていないことが惜しまれてならない。

黄檗宗の高泉性激は『東渡諸祖伝』巻上「宋西澗曇禅師伝」において、

贊曰、古云、門内有「君子」、門外君子至。此邦文永間、有「聖一・大覚二老宿」、開「法名山」、徳風浩蕩、曇師瞻「風而至」。既去復来、正如「優鉢羅華重敷」天外。賜「謚大通」、宜其然矣。

という贊語を子曇のために残している。性激は「門内に君子有れば、門外より君子至る」という諺に因んで、文永年間（一一六四—一一七五）に東福寺の円爾と建長寺の蘭溪道隆が大いに禅風を振るい、これに呼応するかごとく子曇が南末から渡来したものとしている。

ただし、子曇が最初から日本渡航を積極的に望んでいたと解するのは問題であり、初めは本師の石帆惟衍の使僧として北条時宗に法語を呈するべくやむなく日本に向かったと見るべきであろう。しかし、日本に滞在していた期間、子曇に対する待遇は比較的によく、また日本に多くの知己を得たことから、帰国した後も子曇は機会があれば再び日本に向かい

い意向が増していたようである。そんな折、元の使僧である一山一寧に付属するかたちで日本渡航が実現し、子曇は日本を終焉の地とすることとなった。

おそらく建長寺の伝燈庵などにはかつて子曇生前の姿を刻んだ木造坐像が安置されていたはずであり、自賛ないし他賛の頂相（肖像画）も所蔵されていたことであろう。また円覚寺の仏日庵にもかつて子曇の自賛頂相が所蔵されていたことが知られているが、すでにその消息を絶っている。

子曇が示寂したのは嘉元四年（一一三〇）一〇月のことであり、すでに七〇年もの歳月が経過している。子曇の存在はともに来日した一山一寧の華々しい活動の陰に隠れてあまり評価されていない。しかしながら、中国と日本の間を再度にわたって往来した中国禅僧は子曇のみであり、この二度の往来は多くの人的な交流を可能にしたのである。禅者に限っても最初の来日では円爾・蘭溪道隆・大休正念および南浦紹明らと知り合い、また兀庵普寧の門人である東巖慧安・寂巖禅了・夢庵契などと関わりを結んでいる。さらに帰国した直後には無学祖元・鏡堂覚円と関わり、再来日に際しては一山一寧・石梁仁恭と便を同じくしている。もちろん、再来日して以降の活動は七年ほどにすぎなかったが、その間にも多くの日本の禅者と交渉を持ったのである。

まさに子曇は鎌倉中期から後期に活躍した主な日中の禅僧

の多くと何らかの交流が存したことになる。子曇が禅宗の日中交流の上で果たした功績は、その類い稀な活動を通して、いま少し評価されてもよいのではなからうか。

註

(1) 天徳院所蔵の『禅林諸祖伝』は、加賀藩第五代の藩主である前田綱紀(松雲公、養民堂主人、一六四三—一七二四)が宝永七年(一七一〇)に書写したものである。八冊一六巻と目錄一冊より成り、中国と日本の禅宗祖師に関わる伝記史料の一大集蔵となつてゐる。曹洞宗文化財調査委員会が調査し、写真撮影されておゐり、私も天徳院の許可を得て複写資料(影印)を頂いてゐる。

(2) 国立公文書館の内閣文庫に所蔵される『禅林僧伝』八巻八冊は、江戸初期に林道春(羅山、一五八三—一六五七)が筆録した禅僧の伝記集成であり、その複写本が東京大学史料編纂所にも所蔵されている。本稿では内閣文庫所蔵本を使用しておいた。

(3) 雲外雲岫については拙稿「元代曹洞禅僧列伝(上) 天童山の雲外雲岫について」(『駒澤大学仏教学部論集』第三三号)を参照。また東明慧日の来日をめぐる事情については拙稿「元代曹洞禅僧列伝(中) 東明慧日と東陵永興の来日以前の動静」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五一号)を参照。

(4) 『二十四流稽疑』の「西潤曇禅师書伝」の末尾には、
教号諸書載記。釈書卷第八淨禅三之三第十五紙、載大通禅师。喜列祖図、建長大通禅师。宗派喜図、並二十四流

図、俱諡如上。

と記されており、子曇に関する記事を載せたいくつかの史料を挙げてゐる。

(5) さらに近代のものとしても上村観光『五山文学全集』別巻の『五山詩僧伝』に「西潤子曇」の項が存し、概ね『本朝高僧伝』の記述を踏まえたかたちでまとめられており、簡略な伝記ながら書き下し文で載せられてゐる。

(6) 鈴木哲雄『中国主要地名辞典 隋—宋金』(山喜房仏書林)によれば、「仙居県(浙江台州府)」として、

唐、武徳四年(六二一)臨海県を析いて樂安県を置き、八年、省き、上元二年(六七五)復して置いた。台州臨海郡樂安県である。五代の時、銭氏は奏して永安県と改めた。呉越に台州は永安県を領した。宋、景德(一〇〇四—一〇〇七)に今の名に改めた。宋に台州臨海郡軍事仙居県である(浙江通志七)

(7) 『増集続伝燈録』巻六「温州江心東潤洞禅师」の章によれば、

台之仙居人。出世三学。上堂。山僧生縁仙居。如今把人杓柄、又是仙居。可謂熱処難忘。況現前一衆、尽是旧時相識、各各心眼相照。

とあり、道洵が郷里仙居県の三学禅寺に住持したときの入院の上堂を載せており、郷里で旧知の道俗に法を説くことになつた因縁を語つてゐる。また道洵の墨蹟としては、常盤山文庫に「大憲宗泉墨蹟跋」が存し、『禅林墨蹟拾遺』中国篇の九四に収められてゐる。また虚堂智愚の「虎丘十詠」に寄せた

跋文も存し、同じく『禪林墨蹟拾遺』中国篇の二二に収められている。

- (8) 『光緒優居志』卷二「地里志」の「叙山上 鼎北山四」に、紫籜山、在「鼎北三十里、旧名「竹山」。与「天台」接。唐天室中、明皇夢一人紫服而朝、自称「竹山神」、来呈瑞鳳。翌日果有「鳳翔」焉、遂改「今名」。顧志云、遂賜「名建」廟。其側有「瑞峯」、又上有「樓鳳亭」。王載、竹山絶頂古招提、景異相将「国奇」、靈鷲雄吞台嶽小、瑞峯高压斗牛低。雲深石怪宜「僧隱」、水靜山幽榮鳥啼、記得当年封「紫籜」、只因「丹鳳」此中棲。錢竿詩、雲鎖「藤蘿」石路深、旃檀林裏有「叢林」、万山重疊雨添「翠」、一水瀉瓊風漾「金」、午飯欲「陪」龍象住、夜眠夢「聽」鳳凰吟、更求「竹竊」安禪処、老卻「平生」名利心。赤城志。東有「広度寺」。由「山北麓」行二十里、即天台之羅城。巖中寬遠可「屯」兵、路極紆險、仰攻最難。国朝順治中、陳汝安・周欽實、踞之為「乱」と記されており、「嘉定赤城志」の記事を受け、さらに広度寺のことや清代の消息などを付加している。

- (9) 一九八七年一月に浙江人民出版社より刊行された『仙居県志』の「形勝」によれば、広度寺の現状は定かでないものの、「紫籜山小山系」(二七頁)として、

紫籜山小山系、位于大雷山之西、鼎城之北的広度郷、這是以青尖山為主峰、包括白雲背崗、寺後山等一系列山岳、谷地和山間盆地的一个小山系。相伝唐天宝年間、「明皇夢一人紫服而朝、自称竹山神、来呈瑞鳳、翌日果有鳳翔焉。遂賜今名」。青尖山、海拔一〇三五米、峰呈四五等腰三角形、有如古代帝王諸侯朝聘、祭祀所執圭璧之頂、故又称

青圭山。至山頂一看、却成方円、放眼俯瞰、四下翠巒拱卫、層層簇擁、四面群巒、參差下降。鑲嵌在銀溪、緑洲之中的鼎城景貌、一覽無余。在一億多年前、這里曾是火山噴發地区、噴出過大量的熔結凝灰岩、以後歷經塌陷涌突、才形成今天道神奇般的景観。(原文は簡体字)

という記載が存している。これによれば、紫籜山は仙居県の中心地(鼎城)から北に向かった広度郷に存し、天台鼎境の大雷山の西に位置していることが知られる。その主峰である青尖山は海拔一〇三五メートルであり、山頂からは四方および鼎の中心地も一望される。また広度郷の名はいうまでもなく広度寺に由来するものであろうから、寺も何らかのかたちで現存しているものと見られる。

- (10) 『嘉泰普燈錄』卷二「臨安府淨慈混源曇密禪師」の章によれば、

乾道辛卯、出住「茗溪」上方、次遷「台城紫籜・鴻福・万年、淳熙甲辰夏、詔居「淨慈」。

と記されており、曇密が乾道七年(一一七一)に湖州(浙江省)安吉県の上方便に出世した後、台州に赴いて仙居県の紫籜山広度寺、黄巖県の浮山鴻福寺、天台県の万年報恩光孝寺に遷住した後、淳熙二年(一一八四)夏に杭州の淨慈寺に陞住していることが知られる。一方、「希叟和尚広録」卷六「頌」に「寄紫籜茶、与「虎丘石溪」という偈頌が収められており、無準下の希叟紹曇が松源派の石溪心月に紫籜山で産せられた茶を与えていることから、紫籜山は茶の産地としても知られたものらしい。

- (11) 大愚派の笑隱大新(蒲室、広智全悟大禪師、一一八四—一三

四四)の『蒲室集』巻二「塔銘」に「永嘉江心寺一山万禪師塔銘代仏智師作」が存しており、

徳祐間、因遊天台。叟執別曰、子其寒拾乎。及境衆留、主寒巖。未幾、還紫籙。十年還疎山。与当道讓不合、即棄去。

とあり、『続伝燈録』巻三六「温州江心一山禪師」の章にも、

後遊天台、及境衆請開法寒岩、竟嗣東叟。踰三年、還仙居紫籙。歷十載、還疎山、当道讓不合即携退。

と記されている。これらによれば、了方は徳祐年間(一二七五—一二七六)に台州天台山に遊方し、請われて天台県西北七〇里の寒石山寒巖寺に住持しており、三年を経て仙居県の紫籙寺に遷住している。紫籙寺はいうまでもなく子曇が受業した広度寺のことであり、了方は南宋末元初の動乱期に一〇年間にわたって紫籙寺に住持していたとされる。

(12) 『金華黃先生文集』巻四二「塔銘」の「崑山薦巖寺竺三元禪師塔銘」によれば、

至元己丑、用学者出于世本邑之慈源寺、説法嗣横川。居六年、法席鼎盛。俄謝去、訪高沙弥遺踪於湧泉、因留止焉。仙居之紫籙山広度禪寺久廢、道俗僉言、非師莫能起之。郡府以為然、元貞丙申、請師主寺事。居五年、棟宇一新、仍墾荒穢之地為田、以足其食。学徒盈集、師於土木場中、接引無倦。

と記されている。至元二六年(一二八九)より六年間にわたって台州天台県の慈源寺に住持していた妙道は、いったん住持の座を退いて台州寧海県の湧泉寺(業山高沙弥の遺跡とする)に寓居しているが、元貞二年(一二九六)には請われて

紫籙山広度寺の住持となっており、五年間にわたり伽藍の一新や寺田の充実に尽力していることが知られる。かつて子曇が得度した広度寺は、その後、南宋末元初の動乱期に荒廃していたものと見られ、これを復旧したのが妙道であり、それはあたかも子曇が二度目の来日を果たす前後の頃に当たっている。

(13) 『了堂和尚語録』巻一には「台州路紫籙山広度禪寺語録」が収められ、その中に、

先師善翁和尚入祖堂。無異堂前展両手、処、識得根源、被人鈍置不少。紫籙峯頂一十七年、敲空作響、還佗位次、按排置牌云、大家團圓頭、共説無生活。

という本師の竺元妙道(善翁和尚)のためになした入祖堂のことが載せられており、無異堂が祖堂の名称と見られる。了堂唯一は元代中期に妙道の後席を継ぐようなかたちで紫籙山広度寺に住持していることが知られる。このほか、元代後期の眞師泰(字は泰甫、一二九八—一三六二)の詩文集である『玩齋集』巻九「碑」の「重修定水教忠報徳禪寺之碑」や『補統高僧伝』巻三「明政伝」によれば、台州黄巖県の出身で仙居県東二〇里の三学禪院で破庵派の雪山妙坦に参じて得度した舜田明政(鶴松主人)は、松源派の竺西妙坦(一二四五—一三二五)の法を嗣いで、元代中期に仙居県の慈安寺に出世し、天台県の淨惠寺(淨惠寺)と仙居県の広度寺さらに処州青田県の蓮雲寺に遷住している。

(14) 『北磬文集』巻五「序」の「石楼序」には普明に対する道号序として、

一炷清香滿石楼、大覺焚檀香心量器後、乞還山林、

進_レ頌詩於慶歴天子、未後句幾二百年。潼川普明比丘、摘_レ石樓二字、以見志。石樓得非岑樓之謂歟。仙好樓居、抑有慕焉、則莞爾而作曰、撰合成陰、去作_レ金鑿上客。黃太史序_レ忠國師也。不知風葉擁_レ跖、同參先講、豈巖間半辛、付_レ深夜_レ誦書、十年宰相、可_レ同日語。円通却_レ万乘詔、遣弟子行、或以為尊_レ法有_レ体、未若_レ一拳万里、勿_レ以累_レ大覺之為_レ愈也。当_レ宁虛心方外、將_レ莫_レ巖剔野、可_レ無_レ蘊_レ經濟_レ甘_レ隱約_レ者。出其治、豈四十二年而已哉。石樓自名、蓋惜_レ円通不知_レ出_レ此、而大覺_レ山林之晚。書_レ其言、使_レ後世知_レ石樓之自。

と記されている。『物初廢語』卷二四「行状」の「北禪禪師行状」によれば、居簡は潼川（四川省）通泉の龍氏の出身であるから、普明は師の居簡と同じ潼川の出身であったことが知られ、同郷の居簡を慕ってその門に投じた蜀僧（川僧）なのである。

- (15) 『勅修百丈清規』卷四「兩序章第六」の「侍者」の箇所には、凡住持往復書問、製作文字、先具_レ草呈。如_レ闕_レ書記、山門一応文翰、書状侍者識_レ之。
- と記されており、書状侍者の職位について簡略な説明がなされている。
- (16) 『諸経撮要』第一冊の巻首に収められている「蒙山行実記」および「増集統伝燈録」巻四「松江灑山蒙山德異禪師」の章によれば、かつて石帆惟衍にも参じた楊岐派の蒙山德異（古筠比丘、一一三一一—一三〇八）が万寿寺の石樓普明のもとで蔵主を掌っている。

(17) 惟衍については、吉田道興「天童寺世代考（六）」（愛知学院

大学）『禅研究所紀要』第三号）に考察が存している。

- (18) 中華人民共和国の北京市に存する書目文献出版社が一九八七年に出版した『北京図書館古籍善本書目』に、南宋の咸淳年間（一一六五—一二七四）に刊行された「相模州極楽禅寺月峯和尚語録」一卷と、相模州極楽禅寺月峯和尚語録「一卷と、相模州極楽禅寺月峯和尚語録」一卷が北京図書館に現存所蔵されていることが記載されている。椎名宏雄氏はその主著である「宋元版禅籍の研究」（大東出版社刊）において、この月峯とはまさに道隆の法嗣である月峰了然のことであり、南宋末期に日本禅僧の語録を江南の地で開版したものが実際に中国国内で現存している稀有なる事例として取り上げている。残念ながら日本国内には宋版「月峰和尚語録」そのものは現今に伝えられてはいないが、筆写本や江戸初期の刊本というかたちで「月峰和尚語録」一卷が諸地に辛うじて残されている。

- (19) 惟衍は簡翁居敬の後席を継いで天童山に陞住しているわけであるが、残念ながら「天童寺志」巻三「先覚攷 宋」には、石帆行禪師 旧志缺、今補。師嗣_レ法於道場山蓮菴岳禪師。嘗住_レ持天童、而無_レ蹟可_レ攷。

とあり、考察すべき事跡を記した史料が見当たらないとして、伝記的な記載が全くなされていない。

- (20) 『希叟和尚語録』・「法語」に「日本温_レ・英_レ二禪人、持_レ建長蘭溪和尚書、与_レ平元師_レ求_レ語」という法語が収められており、『希叟和尚広録』巻四「法語」にも「示_レ日本平將軍_レ法語」が収められている。当時、五〇余歳であった無準下の希叟紹曇（牧間）のもとに日本から大覚派の不退徳温と傑翁宗英の二禅人が蘭溪道隆の書簡を持参して訪れ、北条時宗のために法語

を求めたことが知られる。これが具体的に何時のことかは定かでないが、いまだ道隆が活躍中のことであり、あるいは天童山の惟行のもとを訪ねた両者がさらに紹曇のもとをも訪れているのかも知れない。ちなみに両者はこのとき帰国に際して宋地へ入手した円鑑（円鏡）を携帯して帰国し、道隆に献呈して日用に供したとされる。

(21) 『円通大応国師語録』巻下「偈頌」には、

和蒙古国信使趙宣撫頌 有東林遠之語、二首。

遠公不出虎溪意、非是淵明誰賞音、欲話箇中消息子、蒲輪何日到雲林。

外国高人来日本、相逢談笑露真機、殊方異域無羌路、目擊道存更有誰。

とあり、宣撫の趙良弼と交わした二首の和韻の偈頌を載せている。

(22) 拙稿「虚堂智愚と南浦紹明 日本僧紹明の在宋中の動静について」、『禅文化研究所紀要』第二八号を参照。

(23) 加藤正俊「関山慧玄と初期妙心寺」（思文閣出版）の「関山の遺誠」の章によれば、「関山無相大師遺誠」には南禅寺の住持であった大応派の温仲宗純（温中、？一四九九）が康正二年（一四五六）一二月に書いた跋文が収められているが、宗純はその跋文の中で、

想夫、虚堂老祖、雖有數十人嗣、愈三四世而絶。唯我大応相耳、綿綿流久。有為児孫、宜自知者。虚堂曰、吾道東矣。大通禪師曰、南浦法兄、於虚堂老伯、頗有超師作。是則所以為本朝大祖也。

と述べており、虚堂智愚のことはともに子曇の評も引用し

ている。また入明経験の存する宗純が中国における虚堂門下の消息に触れて「虚堂老祖、数十人の嗣有り」と雖も、愈な三四世にして絶つ」と伝えているのは興味深く、中国の智愚の系統が少なくとも四世までは存続していたらしい消息が知られる。

(24) 『聖一國師年譜』一巻は内題が「東福開山聖一國師年譜」となっており、弘安四年（一一八一）二月に円爾の伝記を法嗣の鉄牛円心が前任太宰府崇福禅寺小師比丘の肩書きで年譜形式に編述したものである。これを応永二年（一四一七）に聖一派の岐陽方秀（不二道人、一三六一—一四二四）が前任慧日山東福禅寺遠孫比丘の肩書きで校正して刊行したものが流通している。

(25) 五山版の『關谿和尚語録』三巻および江戸期に再編された『大覚禅師語録』三巻には、道隆が晩年になした語録が収められていないため、子曇との関わりを伝える具体的な記事は見い出されない。

(26) 『元史』巻九「本紀」の「世祖六」によれば、至元一三年三月の頃に元軍は南宋の国都である杭州臨安府に入城している。

(27) 『環溪和尚語録』巻上「住慶元府太白名山天童景德禅寺語録」はかなり限られた上堂しか載せておらず、この時期の環溪惟一が無字祖元および日本の北条時宗とどのように関わったのか詳しい事跡は定かでない。ただ、松源派（法海派祖）の無象静照が撰じた「仏光禅師行状」によれば、

次年遷天童、環溪請歸第一座。次年五月、日本平將軍、以建長虚席、航海遠招、遂從所請。環溪一和尚、以無準衣授師。（中略）以五月廿六日、離太白。六

月初二日登舟、当月抵日本。

と記されており、天童山の唯一が北条時宗の要請に応えるべく、首座の祖元を抜擢して無準師範の袈裟を授け、日本へと向かわせているらしいことが知られる。

(28) 川添昭一『北条時宗』（吉川弘文館、人物叢書 新装版）に「時宗と無学祖元」の章が存し、村井章介『北条時宗と蒙古襲来 時代・世界・個人を読む』（NHKブックス、九〇二）の「時宗と日中禅宗世界」の章に「無学祖元と元寇」の項が存しており、時宗の書状に関する考察がなされている。

(29) 『環溪和尚語録』巻末には法嗣の竟此が秀州（浙江省）海塩県の天寧報恩光孝禅寺の住持として至元一九年（一二八二）に状した「行状」が収められており、

己卯冬、師以「老病謝事、退居東堂。先是、師於丙子秋感疾、遂命其徒、即寺之西偏、得穴地、築室数椽、以爲「歸藏之所」。崗巒朝向、秀峙可觀。因取「鄉里之白蓮華、以名菴、以示首丘之意。辛巳秋九月旦、忽誠其徒、趣辦「終焉計」。越「四日」、索「浴易」衣、趺坐而逝。

とその晩年の消息を伝えている。これによれば、唯一は至元一三年（一二七六）の秋に疾を感じて天童山の西偏に白蓮庵を創建しており、至元一六年（一二七九）の冬に老病を理由に住職を退いて東堂（隱居）の身となっている。その後、天童山には唯一の法弟に当たる月坡普明が住持に迎えられているものと見られ、至元一八年（一二八一）九月四日に唯一は世寿八〇歳の生涯を終えている。

(30) 子曇の「与夢庵尺牘」については、五島美術館刊『五島美術

館の名品【絵画と書】の七九に、「重要文化財 西瀨子曇蹟尺牘」として載せられており、また福岡県博物館刊『博多禅 日本禅宗文化の発生と展開』の三二に「西瀨子曇墨蹟尺牘」として返り点を付したものが載せられている。また榎本涉「初期日元貿易と人的交流（汲古書院『宋代の長江流域社会経済史の視点から』に所収）には、具体的に忠実な読み下しがなされていることから、これを全面的に依用しておきたい。ただし、榎本氏の見解とは年時の解釈に一年のずれがあることを付け加えておく。

(31) 『兀菴和尚語録』巻中「住巨福山建長興国禅寺語録」には「侍者道昭・景用・禅了編」とあり、同じく『兀菴和尚語録』巻下「序跋」には、

跋「了侍者頌軸。
禅了侍者、遊歴宋朝、遍參諸老。湖海同流、寂巖号之、掄揚之徳。頌成「巨軸」、并帛帆之帙、併捧呈。蓋老眼矚矚、略観「彷彿」。其中有一「句子」、直是無「巴鼻」。由是急巻而復還之。

という跋文が存している。一方、無著道忠の自筆写本・禅学類の『清拙和尚語録 日本』の「題跋」には、

跋「了寂巖回日本頌軸後。
宋景定間、明州大慈名勝、送了寂巖歸日本、珠玉璨然、照映海島。彼七閩・四川・二浙・西広、英髦所聚、必大川会中龍象也歟。寂巖既歸、乃寂爾無聞、其能真寂者焉。後六十七年、予来「海国」、獲「覽」斯軸、思「古人而不」可「見」、重為「太息」。

という跋文が伝えられている。これらを合わせて考察すると、

禪了は道号を寂庵または寂岩といい、入宋して初め大慧派の大川普濟(一一七九—一二五三)のもとに参学したのらしい。『大川和尚語録』「偈頌」には「送日本国僧」という二首の偈頌が収められているが、これが禪了に与えた作か否かは定かでない。その後、禪了は江南禅林で諸禅者のもとに遍参し、景定年間(一二六〇—一二六四)に明州鄞県の大慈山教忠報国禅寺から日本に帰国したことが記されている。禪了が帰国する際、大慈寺に集っていた諸禅者が饒別に偈頌を寄せたものらしく、七閩・四川・二浙・両広など各地出身の僧が寄せた偈頌を軸装したのが「了寂庵回日本頌軸」であったことが知られる。おそらく禪了は帰国する直前には大慈寺で大慧派の物初大観(一一〇一—一二六八)に参学していたのではないかと見られ、また時期的に兀庵普寧の来日に随侍して帰国したものでないかと推測される。普寧は「了寂庵回日本頌軸」に跋文を寄せているわけであり、帰国した禪了は鎌倉建長寺の住持となった普寧のもとでそのままつ者を勤めて、「住巨福山建長興国禅寺語録」を編集している。その後、六七年の歳月を経て日本に到った破庵派の清拙正澄(大鑑禅師、一二七四—一三三九)がこの「了寂庵回日本頌軸」を目的の当たりにし、さらに跋文を寄せているわけである。正澄が来日したのは嘉暦元年元(泰定三年)(一三三六)のことであるから、それより六七年前となると、まさに景定元年(一二六〇)に当たっている。正澄は禪了のその後の消息が途絶えていることを憂いているが、先の子曇の書簡によって普寧が帰国して後も、禪了は鎌倉近辺に留まって子曇と交遊を持っていたことが判明するわけである。

西澗子曇の渡来とその功績(佐藤)

(32) 『増補続史料大成』別巻に所収される『武家年代記』の「建治三年 丁丑」の箇所に「左近大時国南方」として、建治元・十二・十三上洛、祖父時盛相共。同三・十二・十九、可一方奉行之由、被成御教書。建治三・十・六、右将監、同日従五下。弘安七・七・十四、出家親縁。同十・三、於常州被誅了。自建治三・十・二十九、至弘安七、六波羅南方。或本、弘安七・六・廿、被召下関東、依年来之悪行、也不被入鎌倉、被移常陸国、云々。

と記されており、建治三年(一二七七)一〇月二十九日より弘安七年(一二八四)まで北条時国が六波羅探題南方であったことが知られる。子曇が帰国する直前に時国が南方に就任していることになり、おそらく子曇は時国と面識を持っていたものである。

(33) 葉實磨哉「北条時宗と西澗子曇の役割」(同氏『中世禅林成立史の研究』に所収)の「外交使節一山一寧の来航」の箇所によれば、このときの南殿を六波羅南方の北条時輔(式部大輔、一二四八—一二七二)のことと解しているが、書簡的年代からして時輔に当てるのは間違いであろう。

(34) 玉村竹二氏は『臨濟宗史』(春秋社刊)の「聖一国師円爾」の「西澗子曇の招聘」の項において、

蘭溪道隆が亡くなった後に北条氏の師匠となる宋の僧侶が必要であった。そこでいろいろな議論があり、一方では蘭溪の弟子の詮、英二蔵主即ち無及徳詮と傑翁宗英を北条氏が名僧を招じるための特使とした。聖一国師もまた独自で画策を練っていた。その時に西澗子曇が働いて

いるようである。弘安元年（一二七八）子曇が、南宋が滅びて元となっていた中国に帰ったのは、この人の師匠である石帆惟衍という人を呼ぶ心待ちがあつたからではないかと思う。子曇が中国に帰ると、すでに石帆は亡くなつてしまつていた。そこで止むをえず西潤子曇は、無及徳詮と傑翁宗英の二人に合流して、第二の候補者の物色にかかる。

と記しており、子曇が帰国した直後の活動に円爾の影を見ている。ただ、玉村氏のこの文はかなりの類推を含むものであつて、少なくとも円爾が北条氏とは別個に名僧の招聘のために画策して子曇を動かしたとか、健在なら八〇歳を有に超えていたであろう惟衍を日本に招聘するために子曇が帰国したとする説は成り立たないであらう。

(35) ちなみに元版の『虚舟和尚語録』は後に日本に将来され、かつて普通に直に参学して法を嗣いだ桂堂瓊林によつて嘉元元年（一一〇三）冬至の日に序文が付されて日本で覆元版が開版されている。

(36) 『増集続伝燈録』巻六「台州万年横江浩律師」の章によれば、台州万年横江浩律師、郡之仙邑東溪鄭氏。出世紫巖。上堂。曹溪路上水泄不通、紫巖山前千郊兩足。所以道、今年雨水非、常足、管取秋采田稻熟、牧童音唱太平歌、笑倒東村王大叔。好大衆、楊瓜山前草、憑君待、佃嫩、異苗穠茂処、深密固、薑根。擊、私子。將謂曰雲老祖、却是大陽和尚。

とあり、ここにいう横江浩が出世した紫巖とは、まさに仙居県の紫巖山殊勝院のことを指している。また載せられてい

る上堂も「紫巖山前、千郊は兩つながら足る」とあるから、殊勝院においてなされたものであることが知られる。

(37) 『了堂和尚語録』巻三「了堂和尚偈頌」に、「寄紫巖絶学和尚」「悼紫巖絶学和尚」の偈頌が存しており、紫巖山の殊勝院に住持したと見られる絶学という禅者との交流を伝えている。ただし、同時代に活躍した松源派の絶学道勳（一一五〇—一一一六）や破庵派の絶学世誠（一一六〇—一一三三）がともに殊勝院と直接に関わつたという消息が伝えられていないことから、彼らとは別人で絶学と号した禅者であつたものと見られる。

(38) この事件については『仏祖歴代通載』巻三四「至元二十五年正月十九日」の項により詳しい問答の内容を伝えており、すでに野口善敬『元代禅宗史研究（禅文化研究所刊）』の「元代の禅宗と教宗 至元二十五年正月十九日の出来事を中心に」に詳しく論じられている。

(39) 『増集続伝燈録』巻四「杭州径山本源善達律師」の章には、杭州径山本源善達律師、僊居柴氏。早年与及庵信、行脚、誓不歴職。往江西、見雪巖于仰山、随衆入室、無所省発。後歸仙居、里人請主多福。棄去遊湖南、主福殿。尋遷浙西、見径山雲峰、入室有省。峰印可之。適憲雲虚席、命師補处。後住保寧・淨慈・径山。

と記されており、仙居県の柴氏の出身である本源善達が同じ頃に径山の妙高に参じて印可を得ている。子曇にとって善達はほぼ同世代の同郷の人であるだけに両者には何らかの交流が存したものと推測され、やがて善達は径山の住持にまでなっている。この点は『補続高僧伝』巻二「習禅篇 元」の

「一溪如公・本源達公伝」においても確かめられる。妙高のもとからは径山の善達のほかにも、廬山東林寺の古智慶哲と中天竺寺の一溪自如と、天童山の性石大奇が輩出してあり、さらに首座位ながら詩文に長じた龍巖 真も存しており、すぐれた人材が育成されている。

(40) 雲峰妙高の墨蹟としては『禅林墨蹟』乾の三〇、「大憲墨蹟跋」と『禅林墨蹟拾遺』中国篇の六六、「贊語」が知られる。

(41) 実際に元代において丙寅の年といえは、至正三年(一二六六)か泰定三年(一二三六)ということになり、いずれも子曇の事跡とは齟齬を生じている。

(42) 『断江摘蕈』については拙稿『断江摘蕈』の翻刻(『駒澤大學禅研究所年報』第一八号)を参照。

(43) 『石溪和尚語録』巻上、「臨安府径山興聖万寿禅寺語録」は「侍者永珍・祖森等編」とあるから、永珍が同門の相堂祖森らと編集したものであり、永珍が心月の晩年の門人であったことが知られる。なお、心月の「臨安府径山興聖万寿禅寺語録」には、「日本僧馳「本國丞相問」道書 至上堂」が収められ、巻下「偶頌」にも「寄「日本國相模平將軍」」の作が収められている。日本の丞相とは京都東福寺の檀越でもある左大臣の一条実経のことを指しているものであろう。また相模平將軍とはいうまでもなく執権の北条時頼のことである。

(44) 『吳中人物志』巻二によれば、永珍は字を季潜といい、撫州(江西省)臨川の出身とされる。南宋末期に常熟の能仁寺に住し、至元年間の末に平江の万寿寺に遷り、大徳四年(一一三〇)に示寂したと伝えられる。

(45) 『靈山道隱』と『業識団』に関する考察としては、拙稿「靈山道

隱と『業識団』について」(『駒澤大學仏教学部研究紀要』第二八号)を参照。

(46) 室町期に夢窓派の古篆周印が編した「仏祖宗派図」には「径山僊溪広闡」の法嗣として「宝陀愚溪如智」の名が存し、愚溪如智が大憲派の僊溪広闡(仏智禅師、一一八九—一二六三)の法を嗣いでいることが知られる。「僊溪和尚語録」巻下、「法語」に「示「智上人」とあるのが、如智のことを指しているのかも知れない。

(47) 一山一寧の来日をめぐる事情については、西尾賢隆「中世の日中交流と禅宗」(吉川弘文館刊)の「元朝国信使寧一山の論考が存しており、「宋末元初の一山」、「国信使一山の渡来」わが国での一山の各項目について論じられている。

(48) 『竺仙和尚語録』巻上、「四明竺仙和尚住御前瑞龍山太平興國南禅禅寺語録」の「少林院明極和尚七周忌請普説」に、「己巳年間、師在「径山」為「首座」。山僧亦有「彼。忽日本文侍者至。(中略)文等則曰、此船一去、明年便又再来必然也。就回亦可。山僧曰、船固再来、我恐不得「来耳。文又曰、在昔几菴亦回、西瀾回而復往。但自負「恋我國之好」者、自不回耳。

という記事が存しており、鎌倉末期に松源派の竺仙梵覺(来來禅子、寂勝幢、一一九二—一一四八)が同じ松源派の明極楚俊(仏日焰慧禅師、一二六二—一三三六)とともに来日する因縁として、径山を訪れた日本の文侍者が日中間を再び無事に戻れる理由に、帰国した几庵普寧と再来日した子曇の例を挙げて説得している。いずれにせよ、当時、再来日を果たした中国禅僧として子曇の存在は大きかったことになる。

なお、この点については村井章介『東アジア往還 漢詩と外交』（朝日新聞社）の「渡来僧の世紀」の「渡来僧の旅」に説明がなされている。

- (49) 石梁仁恭については、同門の雪村友梅（幻空、宝覚真空禪師、一一九〇—一三四六）の『雪村大和尚行道記』に「恭石梁興雲塔」に註して、

石梁和尚、諱仁恭。台州人。隨侍一山來朝、乃厥外甥。雪實紀綱、開山信州仏国山慈寿禪寺、住持慈雲・聖福・寿福・建仁。建武元年甲戌十二月十八日示寂。謚慈照恵灯禪師。恭扁臥雲、改興雲一字。

と記されており、『宝覚真空禪師語録』巻乾「仏祖贊」の「恵燈禪師」にも「興雲石梁、国師俗甥」とある。さらに『五山文学新集』第三巻の「雪村大和尚行道記」に付される一山派の天隱龍沢（黙雲、一四三三—一五〇〇）が製した「禅居大鑑禪師付録序」によれば、

月溪円禪師、乃祖伯父而嗣。痴絶老師也。興雲恵燈禪師、石梁和尚、一山俗姪也。大鑑・恵燈両祖、居月溪会裡、祝髮受具、共被而坐、同床而睡。然後、大鑑嗣「仏心」、恵燈嗣「一山」也。

という記事が存している。これによれば、石梁仁恭は破庵派の清拙正澄（大鑑禪師）と共に月溪紹円のもとで剃髪出家していることが知られる。

- (50) これは竹内尚次『江月宗玩 墨蹟之写 禅林墨蹟鑑定日録の研究 上』の「元和五己未年、九月朔日ヨリノ写在之」の箇所（七八一頁、七八二頁）にも載せられている。

- (51) ただ、大休正念は土曇が承天寺に住持した一〇年も前の正応

二年（一一二八九）一月三〇日に示寂しているから、必ずしもここに載せた諸禪師がそのまま賀語を同時期に寄せたものではない。

- (52) 臨川書店『増補 続史料大成 鎌倉年代記・武家年代記・鎌倉大日記』の「鎌倉年代記裏書」（五八頁）を参照。

- (53) 『金沢文庫古文書』第九輯「仏事編」には、六七七三「元朝寄日本書」が収められており、一寧が持参した元朝の国書の全文を示すならば、つぎのような内容となっている。

上天眷命大元皇帝、致書于日本国王。有司奏陳、響者、世祖聖德神功文武皇帝、嘗遣補陀納僧如智及王積翁等、兩奉聖書、通好日本、咸以中塗有阻而邁、爰自聖上臨御以來、綏懷諸國、薄海内外、靡有遐遺。日本之好、宜復通問。今如智已老、妙慈弘濟大師、江浙釈教總統、補陀事一山、道行素高、可令往諭、附商船以行、庶可必達。朕特從其請、蓋欲成先皇遺意、爾至於悼好思民之事、王其審圖之、不宣。

大徳元年三月。

これによれば、このときの日本国王に宛てた元朝の国書は、大徳元年（一一二九七）三月の日付けとなっている。ときの皇帝は世祖フビライの後を継いだ成宗（鉄穆耳、一一二六六—一三〇七、在位は一一九四—一三〇七）であり、それまで元貞三年であった年号が二月に大徳と改元された直後のことである。諸般の事情を考慮すれば、日本商船が元の国に到着したのはその前年の元貞二年（一一二九六）の頃ではなかったかと思われる、日本商船はおそらく子曇との間で接触を図り、日本への再渡航を促したものでなかろうか。しばしの間、日本

商船は元朝に留め置かれたものと見られ、その間に元朝側は一旦は愚溪如智を日本に遣わそうとしたが、如智が老齢を理由にこれを辞退したことから、改めて一寧を選出して日本に向かわせるまでに年月が掛かり、ようやく大徳三年すなわち日本の正安元年に一寧は子曇とともに日本に向かい、鎌倉まで辿り着いたわけである。元朝としてはかつての元寇のごとき兵を使った脅しではなく、一寧を介して日本との通好を平和裏に実現したかったものらしい。

(54) 子曇が入寺するまで建長寺に住持していたのは大覚派の桑田道海(智覚禪師、? - 一三〇九)と見られるが、その間の事情は定かでない。

(55) 『延宝伝燈録』巻二二「京兆南禅高山居中禪師」の章には、居中が一寧や子曇に参学する以前の消息として、

京兆南禅高山居中禪師、姓源氏。遠州吉最県人。十九上洛、礼「興聖敬翁欽公」、剪髮円具。去参「無為元・桂堂林」堂謂「人曰、看「道後生」、志趣宏遠、必弘「吾宗」去在。辞

見「心地・白雲・南浦・高峰・鏡堂・無象諸大老」。

とあり、『本朝高僧伝』巻二七「京兆南禅寺沙門居中伝」に、

釈居中、号「高山」。世姓源氏。遠州吉最県人。年至十九、辞「親上洛」、礼「興聖敬翁欽公」、剪髮円具。去参「無為元・桂堂林」一老。堂謂「人曰、看「此後生」、志趣宏遠、異

時必弘「吾宗」。又見「心地・白雲・南浦・高峰・鏡堂・無象諸大老」。

とほぼ同様に記されている。居中は遠江(静岡県)吉最県の源氏の出身で、一九歳で親もとを辞して上洛し、京都の興聖寺において敬翁 欽を礼して出家受戒し、さらに聖一派の無

為昭元(大智海禪師、一二四五 - 一三一)や松源派の桂堂瓊林に参じ、とくに瓊林よりその才を称えられている。その後、当代を代表する無本覚心・白雲慧暎・南浦紹明・高峰頭日・鏡堂覚円・無象静照といった錚々たる諸禅匠のもとに歴参したとされる。

(56) 「衆角雖多一麟足矣」の語は、『景德伝燈録』巻五「吉州青原山行思禪師」の章に見られ、唐代に六祖下の青原行思(弘濟禪師、? 七四〇)が門下に到った石頭希遷(無際大師、七〇〇 七九〇)を認められたことはほかならない。

(57) 「広智国師乾峰和尚行状」には、
乾元壬寅、山赴洛。二年、山住「相陽」、師侍行。(中略) 時十九、名聞「相洛」。

とあり、土曇は聖一派の南山土曇に随侍して乾元二年(嘉元元年、一三〇三)に鎌倉に到っており、一九歳とはいえ名声を馳せたとされる。「固山叢和尚行状」にいう時期と相違するが、おそらく土曇は一時期ながら円覚寺に掛搭して法諱の似通った子曇に参学する機会を得たものである。

(58) 物部国光(河内丹南から相模(神奈川県)飯山(厚木市飯山)に移住したと見られる鑄物師の物部重光の孫と見られる。重光は建長七年(一二五五)二月に大和権守の肩書きで建長寺の梵鐘を鑄造している。国光の作で最も古いのは弘安九年(一二八六)に鑄造した千葉小綱寺の梵鐘であり、正応元年(一二八八)には大磯高麗寺の梵鐘、正応四年(一二九一)には相模国分寺の梵鐘、永仁六年(一二九六)には杉田東漸寺の梵鐘をそれぞれ製作し、正安三年(一三〇一)には金沢称名寺と鎌倉円覚寺の梵鐘を残している。詳しくは坪井良平

『日本の梵鐘』（角川書店刊）を参照。

(59) 「相模州瑞鹿山円覚興聖禅寺鐘銘」に名が記される禅者として、大書旧では宗英が大覚派の傑翁宗英のことではないかと見られる。また頭首位では師侃が聖一派の愚直師侃のこと、玄挺と崇喜が仏光派の秀巖玄挺（一二六五—一三三〇）と見山崇喜（仏宗禅師、？—一三三三）のこと、道生が仏源派の鉄庵道生（本源禅師、一二六一—一三三三）のことをそれぞれ指していると思われる。さらに西堂位では徳照と徳詮が大覚派の春谷徳照と無及徳詮に該当しよう。したがって、このとき円覚寺の子曇のもとには錚々たる俊傑が多く参集していたことになる。

(60) 昭和三年（一九三八）に法燈派本山興国寺修史局から発行された『鷲峰餘光』下篇第一には、この「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」が活字化して載せられており、駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』には「法燈禅師塔銘 一卷 西潤子曇 日仏全統刊目」と記されている。また雲林師啓の「興国開山法燈円明国師塔銘」も子曇のものにつづいて「禅林僧伝」と『鷲峰餘光』に載せられている。

(61) ちなみに富山県高岡市大田の摩頂山国泰寺に所蔵される仮題『法燈国師関係史料集』に載る「鷲峯山興国禅寺塔頭之次序」の「諸額」によれば、

- 閩南第一禅林。 外門之額 宋朝渤季潭筆。
- 鷲峰山。 中門之額 宋朝竹友筆。
- 興国禅寺。 三門之額 後醍醐宸翰。
- 円通閣。 山門二階額、勝陀殿頭山筆。
- 祈祷修正。 仏殿額、自南和上。

靈明閣 土地堂、自南和上。
 列祖 祖師堂額、自南和上。
 海会 僧堂額、東海和尚。
 庫院 曇西圃。
 西方寺 篆字、永平開山道元和尚。
 靈山会 法堂額、東海和尚。
 降魔 方丈額、元朝景濤。
 塔銘 唐僧西圃、於「鎌倉之円覚寺」所作。
 思遠 宋遠竹友筆。
 勅賜法灯円明国師。 后醍醐天皇宸翰、開山塔。
 澄堂 開山塔額、後二条院宸翰。

とあり、子曇が撰した「鷲峰開山法燈円明国師塔銘」が実際に西方興国寺の山内に建立されていたことが知られ、「唐僧西圃、鎌倉の円覚寺に於て作る所なり」とあり、子曇が円覚寺で製作したものであることが明記されている。また子曇は塔銘のほかにも庫院の額も揮毫しているものらしく、少なくとも中世後期まで西方興国寺には曹洞宗の永平道元が揮毫した「西方寺」の寺額とともに、子曇が揮毫した「庫院」の額が残されていたことが判明する。

(62) 円覚寺には重要文化財として北条貞時が発布した「円覚寺制符」が所蔵されている。

- 円覚寺制符条々。
- 一、僧衆事、不可過二百人。
- 一、粥飯事、臨時打給一向可停止之。
- 一、寺中心事、不可過一種。
- 一、寺參時慮從輩儲事、可停止之。

一、小僧喝食入寺事、自今以後一向可_レ停止之、但權那_レ免許非_レ禁制之限。

一、僧徒出門女人入寺事、固可_レ守先日法、若違犯者、可_レ追放之。

一、行人人工帯刀事、固可_レ禁制之、若有犯者、永可_レ追出之。

右所_レ定如_レ件。

乾元二年二月十二日、沙弥「花押」

この古文書は乾元元年（一三〇三）二月の日付けでなされており、すでに住持が子曇から一寧へと移行して以降のものである。円覚寺が檀那である北条得宗家の支配のもとに置かれていたことが知られるとともに、寺内の僧衆が二〇〇人を超えてはならないと規定されている。先の子曇の記事によれば、円覚寺の僧衆が二五〇人とされているから、おそらく子曇と一寧が渡来したことによって、円覚寺や建長寺では参学の徒が大幅に増加したことが知られ、これを受けて僧衆の掛搭に関する規制も成文化され、より厳格なものとなったのである。

(63) ただし、『五山記考異』の「巨福山建長興国禅寺住持位次」では、

第十一、大通禅師、諱子曇、号「西澗」。伝燈菴。徳治元
丙午十月廿八日寂。

とあって、子曇を建長寺の第二一世として載せている。この場合、『扶桑五山記』と相違しているのは、九世に大覚派の桑田道海が入って、以下、一代ずつずれているわけである。

(64) 『博多承天寺展』に「八〇、鉄牛円心尺牘案」として載せら

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

れており、紙本墨書で縦三三・〇センチ、横一〇三・五センチとなっており、国の重要文化財に指定されている。

(65) 京都国立博物館編『京都最古の禅寺・建仁寺 宋西禅師開創八〇〇年記念・特別展覧会』の図録一によれば、紙本墨書で縦三三・〇センチ、横四九・三センチとなっている。また解説として、

年紀を欠くものの、文中「関東兵革」は嘉元三年（一三〇五）五月四日、北条貞時が北条宗方を誅殺したことをさす（『読史愚抄』）ので、この時のものである。大檀那つまり貞時の無事を喜び、世間が静謐となつてからともに再会することを希望している。乱からわずが六日後に書かれたということもあり、事件の緊張感が伝わってくる。

とあり、その間の消息を説明している。

(66) 『湘南葛藤集』は昭和一七年（一九四二）九月に時代社より発行された『武士道全書』第七巻の『武士禅機縁集』に収められている。

(67) 『扶桑五山記』三、「相陽巨福山建長興国禅寺」の「諸塔」の「仏国派」に「龍華菴、道庵末上、首頭、嗣無碍」とあり、同じく「住持位次」に「一百、道庵末上、諱首頭、嗣無礙、塔曰龍華」と記されている。

(68) 拙稿「大智禅師の在元中の動静について」（駒澤大学中国仏教史蹟参観団『中国仏蹟見聞記』第七集）の「入元の背景と年時」を参照。

(69) 重要文化財「円覚寺境内絵図」については、五島美術館編『鎌倉円覚寺の名宝 七百二十年の歴史を語る禅の文化』

(平成一八年 二〇〇六 一〇月) に載せられている。また『鎌倉市史・社寺編』の「円覚寺」の項(三八三頁と三九四頁)には考証が存しており、建武年間(一一三三—一一三八)の初め頃の作成と見られている。また正観寺については貫達人・川副武胤著『鎌倉廃寺事典』(有隣堂刊)の「正観寺」の項を参照。

(70) 『大休和尚語録』の「題序跋雜記」には「題正観寺鐘刻」が収められている。

(71) 館隆志「一山一寧撰・頼賢の碑」と松島瑞巖寺 御島妙覚庵の観鏡房頼賢の事跡をめぐって」(花園大学「禅学研究」第(八四号)を参照。

(72) 大本山建長寺刊『建長寺史 編年史料編・第一巻』の「徳治元年」の項によれば、

十一月二十八日、西潤子曇寂ス、五十八歳、約翁徳俊鎮
 露師、一山一寧秉炬師、南山土雲起骨師ヲ務ム。闍維ノ
 後二建長寺伝燈庵二埋メ塔ヲ定明ト云フ。

と記しており、子曇の示寂を十一月二十八日と定め、一〇月二十八日説は載せていない。その典拠として「元亨釈書」と「扶桑五山記」が挙げられている。また一山一寧が葬儀の秉炬師を勤めたと明記している。

(73) 『渭南文集』巻四〇「松源禪師塔銘」や「松源和尚語録」巻末「塔銘」によれば、

又胎「曹嗣法香山光睦・雲居善開、囑以「大法。因書偈
 曰、来無_レ所来、去無_レ所去、警_レ玄関、仏祖罔_レ措。
 跏趺而寂。実嘉定二年八月四日也。

とあり、子曇の法統の祖に当たたる松源崇嶽が示寂に臨んで書

した遺偈に「来無_レ所来、去無_レ所去」の語句が存しており、子曇もこの語をもとに自らの遺偈を残していることが知られる。また『円通大応国師語録』巻末所収「円通大応国師塔銘」によれば、南浦紹明が徳治二年(一一三〇—一一三〇七)一一月二十九日に建長寺に入寺した際に小参において、

徳治丁未、奉_レ旨赴_レ関東、留_レ正観寺。而相州太守平崇
 演、請_レ師即_レ署所_レ演_レ法。復敷_レ奏請_レ主_レ巨福山建長興国禅
 寺。明年春、太上皇降_レ手詔_レ存問、恩_レ礼優_レ至。当_レ入_レ寺
 之_レ夕、小参有_レ曰、今年臘月二十九日、来無_レ所来、明
 年臘月二十九日、去無_レ所去。衆驚_レ訝、莫_レ論_レ其_レ意。

と述べたとされる。これは遠く崇嶽の遺偈を踏まえているが、直接には同じ建長寺で前年に亡くなった子曇の遺偈を意識して述べたものと見られる。

(74) 『南山和尚語録』に付される「南山和尚行状」によれば「三年、住_レ東瀧法蔵。徳治二年丁未、住_レ相東勝、応_レ最勝園寺殿招」とあるから、「このとき土雲は美濃(岐阜県)二木の法蔵禅寺の住持であったものらしく、美濃から鎌倉に赴いて子曇のために起骨仏事を執行したことになる」。

(75) 大本山建長寺刊『建長寺史 編年史料編・第一巻』の「徳治二年」の項によれば、

十一月頃、一山一寧、西潤子曇ノ牌ヲ相堂二入牌ス。
 と記しており、この入相堂がなされたのを徳治二年(一一三〇七)の一〇月頃、すなわち子曇の一周忌の頃になされたものと推定している。

(76) 『全唐文』巻三三二「張説 十一」に載る「唐玉泉寺大通禅师碑銘并序」には、

禪師、尊稱大通。諱神秀。本姓李。陳留尉氏人也。心洞九淵、懸解先覺。身長八尺、秀眉大耳、応王伯之象、合聖賢之度。(中略)神龍二年二月二十八日夜中、顧命趺坐、泊如化滅。(中略)三月二日、冊諡大通。とあり、この記事を継承する『宋高僧伝』巻八「習禪篇第三之一」の「唐荊州当陽山度門寺神秀伝」にも、

中書令張説、嘗問法執弟子礼。退謂人云、禪師身長八尺、厯眉秀目、威德巍巍、王霸之器也。(中略)秀以神龍二年卒、土庶皆來葬送、詔賜諡曰大通禪師。と記されている。そこには堂々とした長身で眉目秀麗な神秀のすがたと、大通禪師の禪師号が下賜されたさまが述べられている。

(77) 『天童寺志』巻九「轄麗放」には、残念ながら惟衍の塔頭に關しては何らの記載も存していない。ただ、「堆雲菴 應菴祖塔院、今廢」という記事が存するから、かつて天童山の西麓、唐悉の左端に法統の祖に当たる應庵曇華の塔院として堆雲庵が建てられたことが知られ、惟衍の全身は曇華の塔に付随するかたちで同処に葬られたものと見られる。

(78) 「無曇天禪師行実」に「師僅逾弱冠之日、沿視滄海而直入大元。其志專在安置大円靈座于蓮華之菴而已。太白住山岫雲外、親書安牌法語、付師以為証矣」とあるから、年時は未詳ながら、曇天が入元して覚円のために入祖堂の仏事をなしたことが知られる。このとき安牌法語を天童山の雲岫がなして曇天に付与したとされる。

(79) 大本山建長寺刊『建長寺史 編年史料編 第一巻』の「徳治二年」の項によれば、

春頃、大通禪師ノ諡号下ル、西潤ノ徒正開、一山一寧二就于本師ノ幻影ニ讀ヲ請フ。

と記しており、一寧が子曇の頂相に贊を付したのを徳治二年の春の頃と推定している。また正開の「開」を「因力」と註しており、子曇の法を嗣いだ明岩正因のことではないかと推測している。

(80) 駒澤大学図書館所蔵『本朝禪林撰述書目』には残念ながら『西潤和尚語録』に関するような記載は見られない。一方、駒澤大学図書館編『新纂禪籍目録』には、『西潤和尚語録 西潤子曇 日本禪目』と記されているが、『日本禪林撰述書目』(『大日本仏教全書』一)にも子曇の語録については何も記されていない。

(81) なお、その詳細については「南山土雲に關わる三点の置文 禅文化歴史博物館所蔵の中世資料をめぐって」(『駒澤大学 禅文化歴史博物館蔵品目録』(絵画・墨蹟編之)に所収)において触れたので参照されたい。

(82) とともに毎日新聞社「重要文化財10 絵画」の肖像画に三〇七「六代祖師像」六幅と三〇八「禪家六祖像」六幅として載せられている。とくに承天寺のものは「博多禅 日本禅宗文化の発生と展開」(一九九一、福岡市博物館)の75「禪家六祖像」や「博多承天寺展」(一九八一、福岡県文化会館)の16「禪家六祖像」として詳しい解説が記されている。妙心寺の「六代祖師像」は各幅とも縦九二・四センチ、横四〇・六センチであり、承天寺の「禪家六祖像」は各幅とも縦七三センチ、横三六・五センチとなっており、妙心寺のものの方が軸としては若干大きい。

(83) 福岡県文化会館編『博多承天寺展』(一九八一年)の「出品目録・作品解説」の「一六、禪家六祖像」によれば、六幅のいずれにも「表背貼紙墨書」として、

筑前州博多居住谷自相宗利、並中室妙実、破慳囊、捨淨財、贖比六代祖師頂相六幘、寄附于万松山承天禅寺、永鎮山門。其志可尚也。記于茲、以示将来也。後知事人、重禱此六軸時、嗣而於之慶、斯記之不失也。

延宝七年己未九月十七日、住山円俊志焉。

と記されており、博多居住商家の谷宗利(自相)と中室妙実が承天寺に喜捨したものであることが知られる。この貼紙は開山四〇〇回忌を目前(一ヶ月後)にした延宝七年(一六七九)九月一七日に承天寺第一〇六世である聖一派の北源円俊(一六一七—一七〇〇)が記したものである。同じく解説によれば「禪家六祖像」に關して、

此六軸者、自初祖達磨大師、至大鑑禪師、六代祖之頂相。徑山無準和尚之描画、西潤子曇禪師之讚詞、即是一手筆之所贊也。不可涉猶豫矣。北源西堂住承天日、專權度求之、被鼎鎮山門、誠是稀代之珍也。是歲、当寺宝物十六羅漢、暨殿裏觀音之大幘、補修之次、遺寶來於六軸、憑仗於当寺之幹事、捨衣資而禱焉。其建立之志願、高達天聰、院宣持下、瞻覽曩祖之妙画并真贊、袞襲之榮、莫大於焉。遠肇寺、亦左街僧剛室和尚、南禅英仲和尚、建仁顯令和尚、其餘諸彦、炷拜感見、茲增十倍之声價。万松一衆、到尽未來、際筮十襲焉。後世恐有破家之增故、書之以為憲章。若有

聽水之徒者、拋之以為左証矣。

延宝七稔星輯己未季秋十七葉、

東福令瞻東堂。「印章」

東福光鶴東堂。「印章」

という延宝七年(一六七九)九月に書された証書一軸が存していることも伝えている。この証書で興味深いのは、これらの画を描いたのを承天寺や東福寺を開いた円爾の師である径山の無準師範であると記している点であろう。史実のほどは定かでないが、禪宗六祖像が描かれるのは南宋代から流行しており、絹本着色でいずれも縦七三センチ、横三六・五センチで統一されている。あるいは子曇自身が渡来した際に将来した画像かも知れないが、解題では鎌倉時代に日本で画かれた作と見なされている。

(84) 東土六代祖師の祖贊は子曇の代表作と見られていたものらしく、『延宝伝燈録』の子曇の章にも、

師六代祖師真贊曰、

淨智妙円体自空、天資慧辨發珠光、六宗破後來東土、

五葉從茲徧界芳。初祖。

宴坐香山頂骨奇、少林春信發新枝、利刀截下孃生臂、

端的親伝屈胸衣。二祖。

内外中間罪性空、一言契理即伝宗、古今世道多更變、

周武年中懸皖山。三祖。

縛脱從來得自由、何為引類讓相酬、龍門万古增欽慕、

白氣翔空夜不収。四祖。

黃梅果裏没親爺、仏性俱空自到家、七百祥麟俱点額、

誰知確甯夜生華。五祖。

嶺南仏性未_レ曾無、壁偈書采勝_二画図、善悪不思議対面、
難_下將_レ多力_一有_レ衣蓋_上。六祖。

としてその全文が載せられており、正元師蛮も重視していたことが知られる。

(85) 『青山莊清賞』第二「書蹟篇」の第九「西澗子曇禪師墨蹟」の解説として、

師の筆蹟は一種独特の骨法を有し、一見直ちにそれと見るべきものあり、一点一劃を粗にせず、端巖これ謹書する底の概あり。毛利公爵所蔵の墨蹟また本幅と軌を一にするものあるを見る。さりながら此の墨蹟の年号署名は共に筆格本文と一ならず。仔細に鑑するに、もと「子曇」「西澗」の二印のみありし上に、後年に何人が年号署名を弄筆せるものと鑑せらる。況や宝祐に戊寅の干支なきのみならず、宝祐年間は師未だ十歳に満たざる時代なるに於ておや。此れ本幅の為に憾みても餘りある一事なりとす。因に此幅はもと建仁寺常光院に在り、次で甲良豊後入道道玄に移りしものと伝へらる。

と記しており、本文自体は子曇が揮毫した作に間違いないが、後人が年号と署名を書き足してしまつたものと解している。

(86) 玉村竹二『日本禅宗史論集』下之二「随想小品篇」に「円覚寺正伝庵略歴」として明若正因の塔頭である円覚寺正伝庵に関する考察が存している。

(87) 『二十四流稽疑』巻上「宋西澗曇禪師書伝」にも「贊」として、

古云、門内有_二君子、門外君子至。此邦文永間、有_二聖一・大覚_二老宿、開_二法名山、徳風浩蕩。曇師瞻_レ風而至、

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）

既去復来。正如_二優鉢羅華重敷_一天外。賜_二諡大通、宜其然矣。

とあり、『東渡諸祖伝』に載る性激の贊をそのままに引用している。

【西澗子曇関連系譜】

「楊岐派」

五祖法演—開福道寧—月林師觀—無門慧開—無本覺心—東海竺源

大慧宗杲「大慧派」

心開鐵閣—高山慈照—孤山至遠—自南聖薰

虎丘紹隆—応庵曇華—密庵咸傑

松源素嶽「松源派」
曹源道生「曹源派」
破庵祖先「破庵派」

「大慧派」

大慧宗杲

拙庵德光

浙翁如琰—偃溪広闡—愚溪如智
北磻居簡—物初大観—晦機元熙—笑隱大訢—懶庵廷俊
石樓普明

妙峰之善—東叟仲穎—一山了万
無用淨全—笑翁妙堪—無文道璨—玉崖克振

「松源派」

松源素嶽

掩室善開—石溪心月—無象靜照—大休正念—鉄庵道生

運庵普巖

虚堂智愚—南浦紹明

滅翁文礼

石林行章—東嶼德海—横江浩

無得寛通

虚舟普度—虎巖淨伏—月江正印

無明慧性

蘭溪道隆—月峰了然—明極楚俊

大歇仲謙

溪西広沢—約翁德俊—道意

同源道本—了堂素安

傑翁宗英

春谷德照

無及德詮

無隱凹範

不退徳温

葦航道然

【曹源派】

曹源道生—癡絶道冲—頑極行弥—一山一寧—石梁仁恭
月溪紹円—雪村友梅

【破庵派】

破庵祖先—無準師範—東福円爾—威山順空—固山一鞏—愚直師侃
石田法薰—愚極智慧—清拙正澄—東山湛照—虎関師錬
兀庵普寧—東巖慧安—夢庵契—双峰宗源—南山土雲—乾峰土曇—鉄牛円心—大道一以
環溪惟一—鏡堂覚円—無雲義天—寂巖禅了—無學祖元—高峰顕日—夢窓疎石
希叟紹曇—見山崇喜—秀巖玄挺—雪巖祖欽—豊山道隱—無礙妙謙—道庵曾顯
断橋妙倫—古田徳厚—東澗道洵

【大通派系譜】

玉村竹二『五山禪林宗派図』より

西澗子曇—嵩山居中—少林桂壽—大用全用—伯春全寿—文和全印
南叟—宝山浮玉—邵庵全雅—長川祥珍—翠岩全珉
出塵処傑—文溪—周—大方—広—徳海秀文
混源正肇—梅隠居芳—同溪正茂—邵仲正英
礼翁—雪江—朔—大徹至純—仲敬至虔—茂林正松
空叟思体—桂岩闍芳—象初闍先—汝仲闍爾—喜宗—欽—雲章闍慶
清江—直山闍高
無極正初—闍室正友
明岩正因—瑞岩正芝—建宗長会
畊雲克原—大辯正訥

西澗子曇の渡来とその功績（佐藤）